公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第646集

宮貝戸遺跡

上信自動車道祖母島箱島バイパス建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2018

群馬県上信自動車道建設事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

宮貝戸遺跡
上信自動車道祖母島箱島バイパス建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書
二〇一八
群馬県上信自動車道建設事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

宮貝戸遺跡

上信自動車道祖母島箱島バイパス建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2018

群馬県上信自動車道建設事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

渋川市を起点に吾妻川沿いに吾妻郡東吾妻町等を経て長野県東御市に至る上信自動車道は、県央地域と県北西部の吾妻地域を結び、交通渋滞緩和や救急医療対応、産業振興等への貢献が期待される自動車道であり、一部では供用も開始されております。そして建設予定地では甲(よろい)を着た古墳人の出土した渋川市の金井東裏遺跡や、遮光器土偶の出土した吾妻郡東吾妻町の唐堀遺跡など、全国的に注目される遺跡、遺物の発見が相次いでおります。

東吾妻町箱島で発掘調査いたしました宮貝戸(みやがいと)遺跡も、そうした上信自動車道建設予定地にある遺跡の一つであり、平成28・29年度に発掘調査を実施いたしました。同遺跡では奈良・平安時代から江戸時代頃までの時期の遺構を調査し、数量は少なかったものの出土遺物を得ております。発見された遺構は中世を中心とした時期のものでありましたが、11世紀の所産と判断される二つの竈(かまど)を有する竪穴建物や、中世の竪穴状遺構を伴う掘立柱建物などを調査し、様々な知見を得ることができました。

この度、宮貝戸遺跡の発掘調査成果をまとめ、埋蔵文化財発掘調査報告書として上梓することとなりました。ここに発掘調査から報告書作成まで、ご指導、ご協力を賜りました群馬県中之条土木事務所、群馬県上信自動車道建設事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、東吾妻町教育委員会をはじめ、本事業にご尽力賜りました関係各位に心からの感謝を申し上げます。そして、本報告書が当該地域、特に埋蔵文化財に関する知見の少ない東吾妻町(旧吾妻郡東村)箱島地区の歴史を知るうえで広く活用されますことを願いまして、序といたします。

平成30年11月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長　中野三智男

例　言

1　本書は、平成28年度並びに平成29年度上信自動車道祖母島箱島バイパス建設事業に伴い埋蔵文化財の発掘調査された、宮貝戸（みやがいと）遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　宮貝戸遺跡は、群馬県吾妻郡東吾妻町大字箱島1125・1127・1129-1・1129-2・1129-3・1130・1138-1・1138-2・1139・1140・1141-2・1147-1・1148-1・1150-1・1150-2・1152-1・1152-2番地に所在する。

3　事業主体は群馬県中之条土木事務所（平成28年度）、群馬県上信自動車道建設事務所（平成29・30年度）である。

4　調査主体は公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団である。

5　発掘調査の期間と体制は次の通りである。

調査期間　（平成28年度）平成29年１月１日～平成29年１月31日
（履行期間：平成28年４月１日～平成29年３月31日）
（平成29年度）平成29年7月１日～平成29年８月31日
（履行期間：平成29年６月１日～平成29年10月31日）

調査担当　（平成28年度）調査部調査課　主任調査研究員　山本光明
（平成29年度）調査部調査課　調査研究員　山本直哉　　専門調査役　飛田野正佳

遺跡掘削工事請負：瑞穂建設株式会社（平成28年度）　山下工業株式会社（平成29年度）

委託　地上測量：株式会社測研　　空中写真撮影：株式会社シン技術コンサル
土器洗浄・注記作業：株式会社測研

6　整理事業の期間と体制は次の通りである。

整理期間　平成30年４月１日～平成30年９月30日（履行期間：平成30年４月１日～平成30年11月30日）

整理担当　資料部資料１課　主任調査研究員　齊田智彦　　資料部資料２課　専門調査役　石守　晃

7　本書作成の担当者は次の通りである。

編　　集　石守　晃

デジタル編集　齊田智彦

本文執筆　第４章第１節は山本光明が執筆し、株式会社火山灰考古学研究所の火山噴出物分析業務報告書を遺構、図番号等一部加筆の上転載した。その他は石守が執筆した。

遺物観察　縄文・弥生土器：石坂　茂（専門調査役）　　石器・石製品：津島秀章（資料第２課長）
土師器・須恵器・陶磁器：大西雅広（専門調査役）

遺物写真撮影　津島秀章・石守　晃

8　石材鑑定は飯島静男氏（群馬地質学研究会会員）に依頼した。

9　発掘調査諸資料及び出土品は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

10　発掘調査及び本書作成に当たり諸氏、機関よりご協力、ご指導、ご教示を賜った。記して感謝の意を表します。
群馬県中之条土木事務所、群馬県上信自動車道建設事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、
東吾妻町教育委員会文化財保護課

凡　　例

1　宮貝戸遺跡の遺構平面図は世界測地系国家座標(座標第Ⅸ系)を用いて測量した。遺構図の中で使用した北方位はすべて座標北で、真北方向角は＋０°32′23.10″である。

2　遺構図の中で使用した北方位は、すべて座標北を示している。

3　遺構の方位は、座標北を基準として主軸角度等の傾きを計測した。

4　遺構平面図の縮尺は、原則として以下を使用した。但し遺構によっては異なる縮率を用いたものもある。

竪穴建物　1/60、竈・炉　1/30、掘立柱建物　1/60、竪穴状遺構　1/60、柵　1/40

溝(平面)　1/80、(断面)　1/40、土坑・ピット　1/40、畠　(平面)　1/80、(断面)　1/40

5　遺物図の縮尺は以下の通りである。

土器　1/3、石器・石製品　1/2

6　遺物番号は出土遺構ごとの連番で、番号は本文・挿図・表・写真図版ともに一致する。

7　図中で使用したスクリーントーンやマークは、以下のことを表す。

遺構　焼土　粘土　カクラン　炭

遺物　赤色塗採

8　本書では必要に応じて、浅間A軽石(As-A)、浅間粕川テフラ(As-Kk)、浅間B軽石(As-B)、浅間C軽石(As-C)、浅間板鼻褐色軽石(As-BP)などの主要テフラを略号のみで表記した。

9　土層や土器の色調観察は、原則として農林水産省農林水産技術会議監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』を使用した。

10　第１図は昭和59年度の国土地理院の指示に基づいて、国土地理院20万分の１の地勢図「長野」・「宇都宮」を使用した。第２・６・７図は、昭和59年度の国土地理院の指示に基づいて、国土地理院２万５千分の１の地形図「金井」を使用した。

目　　次

序
例言
凡例
目次
挿図目次
表目次
写真目次
第１章　宮貝戸遺跡の発掘調査とその経過 ・・・・・・ 1
第１節　調査に至る経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
1　上信自動車道・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
2　試掘調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
3　発掘調査に至る経過・・・・・・・・・・・・・・ 4
第２節　発掘調査の経過 ・・・・・・・・・・・・・・・ 5
第３節　発掘調査の方法 ・・・・・・・・・・・・・・・ 6
1　調査区の設定・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
2　グリッドの設定 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
3　発掘調査の方法 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
4　発掘調査の記録 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
第４節　基本土層・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
第２章　宮貝戸遺跡を廻る環境 ・・・・・・・・・・・・ 8
第１節　地理的・地質的環境 ・・・・・・・・・・・・ 8
1　地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
2　地質的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
第２節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
1　縄文時代 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
2　弥生時代 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
3　古墳時代 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
4　奈良・平安時代 ・・・・・・・・・・・・・・・・12
5　中・近世 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
第３章　発見された遺構と遺物 ・・・・・・・・・・・・13
第１節　本遺跡の調査概要・・・・・・・・・・・・・・13
1　遺跡の立地と調査区・・・・・・・・・・・・・・13
2　調査した遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・13
第２節　１区の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・15
1　１区の遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
2　２号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・15
3　１号柵 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
4　７号土坑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
5　短冊形・長方形・溝形の土坑群 ・・・・・・・21
6　円形・楕円形・方形の土坑群 ・・・・・・・・26
7　10号土坑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
8　４・37号土坑と１・２号谷・・・・・・・・・・28
9　ピット ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
10　11号溝 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
11　16号溝 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
12　耕作遺構群（１～10・12～15号溝）・・・・・・34
13　１号畠 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
14　２号畠 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
15　３号谷 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
第３節　２区の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・42
1　２区の遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・42
2　長方形の土坑群 ・・・・・・・・・・・・・・・42
3　楕円形・方形の土坑群 ・・・・・・・・・・・・43
4　ピット ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
5　19号溝 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46
6　耕作痕 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46
7　遺構外の出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・46
第４節　３区の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・50
1　３区の遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・50
2　１号掘立柱建物・１号竪穴状遺構 ・・・・・・50
3　２号掘立柱建物 ・・・・・・・・・・・・・・・53
4　３号掘立柱建物 ・・・・・・・・・・・・・・・55
5　２号竪穴状遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・56
6　長方形の土坑群 ・・・・・・・・・・・・・・・57
7　円形・楕円形・方形の土坑群 ・・・・・・・・57
8　ピット ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・61
9　17号溝 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・62
10　18号溝 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・62
11　耕作痕 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・65

12　遺構外の出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・67
第５節　縄文時代の遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・68
1　本遺跡と縄文時代遺物との関係 ・・・・・・・68
2　本遺跡出土の縄文時代遺物・・・・・・・・・・68
第４章　自然科学分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69
第１節　自然科学分析の委託 ・・・・・・・・・・・・69
1　自然科学分析資料 ・・・・・・・・・・・・・・・69
2　自然化学分析の目的・・・・・・・・・・・・・・69
3　自然科学分析の委託・・・・・・・・・・・・・・69
4　委託の成果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69
5　所見・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69
第２節　宮貝戸遺跡火山噴出物分析業務 ・・・・・・69
1　はじめに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69
2　土層の層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・70
（1）　試掘トレンチ ・・・・・・・・・・・・・・・70
（2）　1号谷・・・・・・・・・・・・・・・・・・・70
3　テフラ検出分析 ・・・・・・・・・・・・・・・・71
（1）　分析試料と分析方法 ・・・・・・・・・・・71
（2）　分析結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・71
4　考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・71
5　まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・72
第５章　まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・73
第１節　遺構、遺物の概要・・・・・・・・・・・・・・73
1　遺構の時期的制約 ・・・・・・・・・・・・・・・73
2　遺構と遺物の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・73
第２節　若干の考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・73
1　奈良・平安時代 ・・・・・・・・・・・・・・・・73
2　中世・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・74
3　３区の段差遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・74

挿図目次

第１図　上信自動車道と遺跡位置図 ･････････････････････････ 1
第２図　宮貝戸遺跡位置図 ･････････････････････････････ 2
第３図　上信自動車道祖母島箱島バイパス箱島地域の試掘調査 ･･･ 3・4
第４図　調査区と国家座標軸 ･････････････････････････････ 6
第５図　基本土層観察位置と土層断面 ･･････････････････････ 7
第６図　宮貝戸遺跡周辺地質図 ･･･････････････････････････ 8
第７図　宮貝戸遺跡周辺遺跡分布図 ･････････････････････････ 10
第８図　宮貝戸遺跡調査区と調査遺構全体図 ･････････････････ 14
第９図　１区全体図 ･･･････････････････････････････････ 16
第10図　１区南２号竪穴建物と出土遺物 ･････････････････････ 17
第11図　１区南２号竪穴建物竈と竈１土層断面 ･･･････････････ 18
第12図　１区南２号竪穴建物竈２土層断面 ･･････････････････ 19
第13図　１区南１号柵 ･････････････････････････････････ 20
第14図　１区南７号土坑と出土遺物 ････････････････････････ 21
第15図　１区北１号土坑、１区南２・３号土坑 ････････････････ 22
第16図　１区南５・６・８・17・19号土坑と３号谷 ･････････････ 23
第17図　１区南９・11～13・18号土坑 ･･････････････････････ 24
第18図　１区南14～16・20・21・24・27号土坑 ････････････････ 25
第19図　１区南28・29・34・35号土坑 ･･････････････････････ 26
第20図　１区南22・23・25・26・30・31号土坑 ････････････････ 27
第21図　１区南32・33号土坑 ････････････････････････････ 28
第22図　１区南10号土坑 ･･･････････････････････････････ 28
第23図　１区北４・37号土坑 ････････････････････････････ 30
第24図　１区北４・37号土坑と１・２号谷 ･･････････････････ 31
第25図　１区北１・２号ピット、１区南３～11号ピット ･･････････ 33
第26図　１区南12～14号ピット ･･･････････････････････････ 34
第27図　１区南11・16号溝と出土遺物 ･･････････････････････ 35
第28図　１区南耕作遺構群（１～10・12～15号溝）と出土遺物 ････････ 37
第29図　１区北１号畠、１区南２号畠 ･･････････････････････ 39
第30図　２区全体図 ･･･････････････････････････････････ 42
第31図　２区52・56～60号土坑と出土遺物 ････････････････････ 44
第32図　２区53～55号土坑 ･･････････････････････････････ 45
第33図　２区38～40号ピット ･････････････････････････････ 45
第34図　２区19号溝と出土遺物 ････････････････････････････ 47
第35図　２区耕作痕 ････････････････････････････････････ 49
第36図　２区遺構外の出土遺物 ････････････････････････････ 49
第37図　３区全体図 ････････････････････････････････････ 51
第38図　３区１号掘立柱建物 ･････････････････････････････ 52
第39図　３区１号竪穴状遺構と出土遺物 ･････････････････････ 53
第40図　３区２号掘立柱建物 ･････････････････････････････ 54
第41図　３区３号掘立柱建物 ･････････････････････････････ 55
第42図　３区２号竪穴状遺構 ･････････････････････････････ 56
第43図　３区36～40号土坑 ･･･････････････････････････････ 58
第44図　３区41～46号土坑 ･･･････････････････････････････ 59
第45図　３区47～51号土坑 ･･･････････････････････････････ 60
第46図　３区17・19・20・23・25・27・28号ピット ･･･････････････ 61
第47図　３区32・34・37号ピット ･･････････････････････････ 62
第48図　３区17・18号溝 ････････････････････････････････ 63
第49図　３区耕作痕と出土遺物 ････････････････････････････ 66
第50図　３区遺構外の出土遺物 ････････････････････････････ 67
第51図　縄文時代の出土遺物 ･････････････････････････････ 68
第52図　試掘トレンチ・９号土坑断面の総合地質柱状図 ･･････････ 70
第53図　１号谷の地質柱状図 ･････････････････････････････ 70

表目次

表１　周辺遺跡一覧 ････････････････････････････････････ 11
表２　宮貝戸遺跡遺構数量一覧 ･･･････････････････････････ 13
表３　１区南１号柵ピット一覧 ･･･････････････････････････ 40
表４　１区土坑一覧 ････････････････････････････････････ 40
表５　１区ピット一覧 ･･････････････････････････････････ 40
表６　１区溝一覧 ･････････････････････････････････････ 40
表７　１区南Ａ群耕作痕（１～６・13号溝）サク間一覧 ･･････････ 40
表８　１区南Ｂ群耕作痕（７～10・12・14・15号溝）サク間一覧 ････ 40
表９　１区北１号畠サク一覧 ･････････････････････････････ 41
表10　１区北１号畠サク間一覧 ････････････････････････････ 41
表11　２区土坑一覧 ････････････････････････････････････ 49
表12　２区ピット一覧 ･･････････････････････････････････ 49
表13　３区土坑一覧 ････････････････････････････････････ 67
表14　３区ピット一覧 ･･････････････････････････････････ 67
表15　１区南深掘地点南壁におけるテフラ検出分析結果 ･････････ 71
表16　宮貝戸遺跡遺構一覧 ･･･････････････････････････････ 73
表17　遺物観察表（古墳時代以降） ･････････････････････････ 75
表18　遺物観察表（縄文時代） ････････････････････････････ 76
表19　土師器甕非掲載遺物集計表 ･･････････････････････････ 76
表20　縄文土器非掲載遺物集計表 ･･････････････････････････ 76

写真目次

PL. 1　1　1区航空写真
2　1区航空写真
PL. 2　1　1区南２号竪穴建物全景
2　1区南２号竪穴建物遺物出土状況
3　1区南２号竪穴建物全景
4　1区南２号竪穴建物竈１・２
5　1区南２号竪穴建物竈１・２
PL. 3　1　1区南２号竪穴建物竈１掘り方
2　1区南２号竪穴建物竈２掘り方
3　1区南２号竪穴建物ピット１
4　1区南２号竪穴建物ピット２
5　1区南２号竪穴建物ピット３
6　1区南２号竪穴建物ピット３～６、炉
7　1区南２号竪穴建物掘り方全景
PL. 4　1　1区南１号柵全景
2　1区南１号柵ピット１
3　1区南１号柵ピット２
4　1区南１号柵ピット３
5　1区南１号柵ピット４
PL. 5　1　1区北１号土坑全景
2　1区南２号土坑全景
3　1区南３号土坑全景
4　1区北４号土坑、２号谷全景
5　1区南５号土坑全景
6　1区南５・６号土坑、３号谷全景
7　1区南７号土坑全景
8　1区南７号土坑遺物出土状況
PL. 6　1　1区南８号土坑全景
2　1区南９号土坑全景
3　1区南10号土坑全景
4　1区南11号土坑全景
5　1区南12・13・18号土坑全景
6　1区南18号土坑全景
7　1区南14号土坑全景
8　1区南15号土坑全景
PL. 7　1　1区南16号土坑土層断面

2　１区南20・21号土坑全景
3　１区南８・17・19号土坑全景
4　１区南22号土坑全景
5　１区南23号土坑全景
6　１区南24号土坑全景
7　１区南25号土坑全景
PL．8　1　１区南26号土坑全景
2　１区南27号土坑全景
3　１区南28号土坑全景
4　１区南29号土坑土層断面
5　１区南30号土坑全景
6　１区南31号土坑全景
7　１区南32号土坑全景
8　１区南33号土坑全景
PL．9　1　１区南34号土坑全景
2　１区南35号土坑全景
3　１区北37号土坑全景
4　１区北37号土坑全景、１号谷土層断面
5　１区北37号土坑、１号谷全景
PL．10　1　１区北１号ピット全景
2　１区北２号ピット全景
3　１区南３号ピット全景
4　１区南４・５号ピット全景
5　１区南６号ピット全景
6　１区南７号ピット全景
7　１区南８号ピット全景
8　１区南９号ピット全景
9　１区南10号ピット全景
10　１区南11号ピット全景
11　１区南12号ピット全景
12　１区南13号ピット全景
13　１区南14号ピット全景
PL．11　1　１区南耕作遺構群（１～10・12～15号溝）全景
2　１区南耕作遺構群（１～10・12～15号溝）全景
3　１区南11号溝全景
4　１区南16号溝全景
PL．12　1　１区北１号畠北部全景
2　１区北１号畠南部全景
3　１区南２号畠東部全景
4　１区南２号畠西部全景
5　１区作業風景
PL．13　1　２区航空写真
2　２区X52号土坑全景
3　２区X53号土坑全景
4　２区X54号土坑全景
5　２区X55号土坑全景
PL．14　1　２区X56号土坑全景
2　２区X57号土坑全景
3　２区X58号土坑全景
4　２区X59号土坑全景
5　２区X60号土坑全景
6　２区X38号ピット土層断面
7　２区X39号ピット土層断面
8　２区X40号ピット土層断面
PL．15　1　２区19号溝全景
2　２区19号溝北部全景
3　２区19号溝中央部全景
4　２区19号溝南部全景
5　２区19号溝南西隅部全景
6　２区19号溝船川堆積分布状況
7　２区作業風景
PL．16　1　２区耕作痕全景
2　２区耕作痕北東隅部全景
3　２区耕作痕東部全景
4　２区耕作痕北西隅部全景
5　２区耕作痕西部全景
PL．17　1　３区全景
2　３区船川堆積下窪地全景
PL．18　1　３区１号掘立柱建物全景
2　３区１号掘立柱建物ピット１上層断面
3　３区１号掘立柱建物ピット２上層断面
4　３区１号掘立柱建物ピット３上層断面
5　３区１号掘立柱建物ピット４上層断面
PL．19　1　３区１号掘立柱建物ピット５上層断面
2　３区１号掘立柱建物ピット６上層断面
3　３区２・３号掘立柱建物、17・23・27・28・32号ピット全景
4　３区２号掘立柱建物ピット１上層断面
5　３区２号掘立柱建物ピット６上層断面
PL．20　1　３区１号竪穴状遺構全景
2　３区２号竪穴状遺構礫出土状況
3　３区２号竪穴状遺構全景
4　３区36号土坑全景
5　３区37号土坑全景
6　３区38号土坑全景
7　３区39号土坑全景
8　３区40号土坑全景
PL．21　1　３区41号土坑全景
2　３区42号土坑全景
3　３区43号土坑全景
4　３区44号土坑全景
5　３区45号土坑全景
6　３区46号土坑全景
7　３区47号土坑全景
8　３区48号土坑全景
PL．22　1　３区49号土坑全景
2　３区50号土坑全景
3　３区51号土坑全景
4　３区19・20号ピット全景
5　３区25号ピット全景
6　３区17号溝礫出土状況
7　３区17号溝全景
PL．23　1　３区18号溝全景
2　３区18号溝南端部全景、土層断面
3　３区作業風景
4　３区耕作痕Ｂ群全景
PL．24　出土遺物

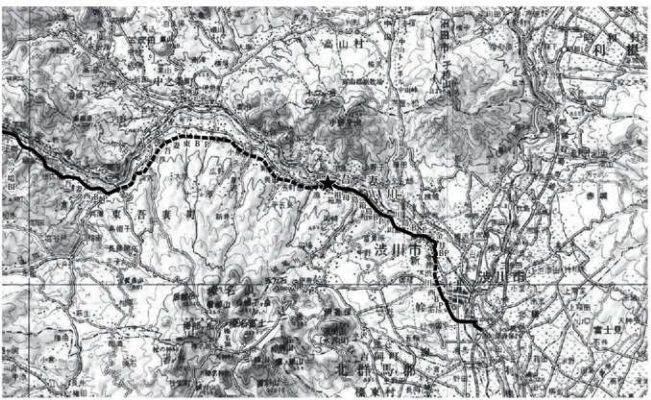
第１章　宮貝戸遺跡の発掘調査とその経過

第１節　調査に至る経過

１．上信自動車道

群馬県が平成20年３月に策定した「はばたけ群馬・県土整備プラン2013-2022」の最重要施策に、県内を縦横に走行する高速道路網（国土開発幹線自動車国道）を補完する交通軸として、県央軸、東毛軸、西毛軸、吾妻軸、三国軸、尾瀬軸、渡良瀬軸を設定しようとする軸構想があった。当遺跡に係る上信自動車道は、このうち吾妻軸を補完、構成する自動車道路である。上信自動車道は本県渋川市の国道17号に接続する関越自動車道（新潟線）渋川伊香保インターチェンジを起点として、渋川市と吾妻郡東吾妻町、同郡長野原町、同嬬恋村を経由して、長野県東御市の上信越自動車道（関越自動車道上越線）東部湯の丸インターチェンジに至る広域道路として構想されている。そして、上信自動車道は地域高規格道路としても指定されている。

上信自動車道は、広域道路整備基本計画策定に関する平成４（1992）年９月３日の建設省道路局長通達（建設省道企発第52号）と、同日付の同省道路企画課長・都市局街路課長通知（建設省道企発第53号、建設省都街発第32号）に基づく、群馬、長野両県の広域道路整備基本計画に位置付けられた道路であり、平成６（1994）年12月16日に地域高規格道路の計画路線に指定されている。



第１図　上信自動車道と遺跡位置図
（国土地理院20万分の１地勢図「長野」平成24年５月１日発行・「宇都宮」平成23年６月１日発行を使用）

なお、上信自動車道は設計速度60～80㎞の交流促進型路線であり、高速空通網空白地帯の解消、交通渋滞の緩和、災害時の安全安心確保と、救急医療、観光振興、産業物流への貢献が期待されている。

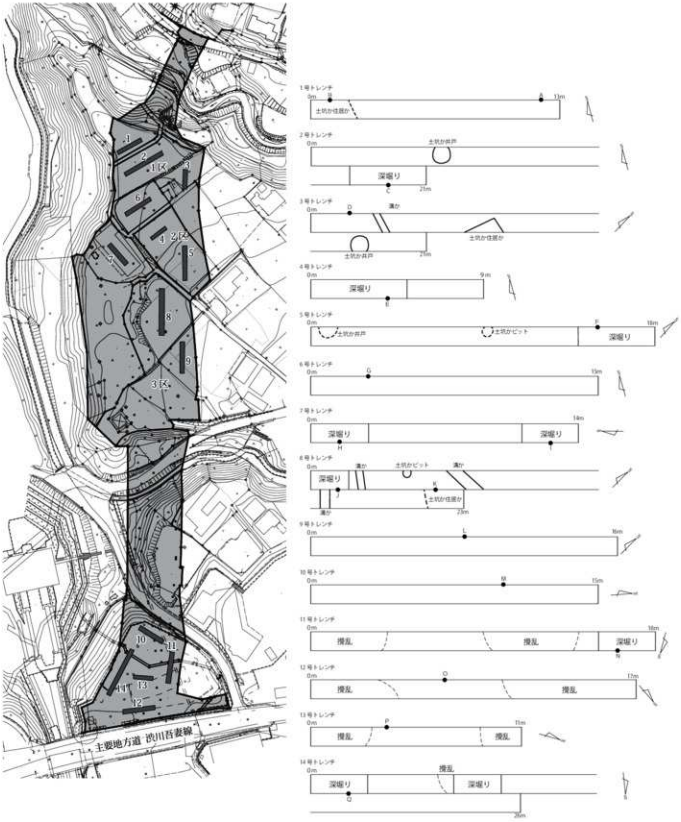
本県において上信自動車道は、渋川市の国道17号と接続する渋川伊香保インターチェンジ接続地点から、吾妻郡長野原町の国道145・292号の交差点である大津交差点までが既に事業化されており、東から渋川西バイパス、金井バイパス、川島バイパス、祖母島箱島バイパス、吾妻東バイパス、吾妻西バイパス、八ッ場バイパス、長野原バイパスの８バイパスの建設が計画、進捗しており、このうち渋川西バイパス、八ッ場バイパス、長野原バイパスが既に供用に附されている。

なおその走向経路は、渋川インターチェンジを起点として、同インターチェンジ北側の国道17号の中村交差点を西折して国土交通省が管理する渋川西バイパス（渋川市の環状線）で渋川市の旧市街地の南西側を迂回し、県道35号渋川東吾妻線に並走して渋川市街地の西側を迂回しつつ金井バイパスで北上し、川島バイパス、祖母島箱島バイパス、吾妻東バイパスの中ほどまでを県道35号線、吾妻東バイパス中ほどから吾妻西バイパスの中ほどまでを国道145号に並走して吾妻川右岸を走行し、吾妻郡東吾妻町根小屋で吾妻川を渡河し、国道145号沿いに北接する八ッ場バイパス途中の吾妻郡長野原町林で再び渡河するまでは吾妻川左岸を走行し、以西は吾妻川右岸を走り、八ッ場バイパスの終点間近で再び吾妻川を渡河して草津へ向かう国道292号と分岐する大津交差点に至る。なお、以西の区間は、本稿執筆時点では調査区間であり、バイパス路線は確定していない。

さて、本遺跡の所在する祖母島箱島バイパスは、国道353号のバイパス道路であり、渋川市祖母島から東吾妻町大字箱島間の延長約2.0㎞の路線である。吾妻川左岸を走行する国道353号（通称「日向道」）や吾妻川右岸をこ

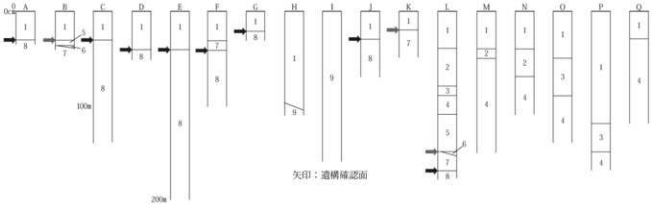
〔参考文献〕
愛媛県土木部道路都市局道路建設課(2000)「広域道路整備基本計画と地域高規格道路」
群馬県<http://www.pref.gunma.jp/contents/000251933.pdf>2016年12月20日参照
群馬県<http://www.pref.gunma.jp/contents/000253245.pdf>2017年3月23日参照
群馬県<http://www.pref.gunma.jp/contents/000253246.pdf>2017年3月23日参照
群馬県<http://www.pref.gunma.jp/contents/000253248.pdf>2017年3月23日参照
群馬県県土整備部道路整備課(2015)「事業概要紹介　群馬がはばたくための７つの交通軸構想」『用地ジャーナル』23巻10号、pp25-30
道路法令研究会(2016)『道路法令総覧　平成29年版』、pp491-492

第２図　宮貝戸遺跡位置図（国土地理院2.5万分の１地形図「金井」平成21年５月１日発行を使用）



第３図の１　上信自動車道祖母島箱島バイパス箱島地域の試掘調査

れに並走する県道35号線（通称「日陰道」）の当該区間は、カーブが連続し、冬季の路面凍結による速度低下や斜面崩落が発生することから、これらの解消も検討されている。本路線は２車線、設計速度60kmの道路として計画されており、事業期間は平成19年度から同31年度の予定である。



1　表土及び現耕作土　4　黒褐色砂質土　7　黒色砂質土
2　暗褐色砂質土　5　黒色砂質土　8　Hr-FP 泥流
3　暗黄褐色砂質土　6　As-Kk　9　礫石か

第３図の２　上信自動車道祖母島箱島バイパス箱島地域の試掘調査

２．試掘調査

中之条土木事務所(以下「中之条土木」とする)は、上信自動車道祖母島箱島バイパス(以下「祖母島箱島バイパス」とする)の事業実施に当たり、平成28年10月27日、建設事業予定地に対する埋蔵文化財の確認のための試掘調査の実施を群馬県教育委員会文化財保護課(以下「県保護課」とする)に依頼した。県保護課は、本遺跡が周知の埋蔵文化財包蔵地ではないものの、中世の遺跡として周知される茅貝戸遺跡(東吾妻町遺跡番号0122)の北側に近接して立地することから、試掘、確認調査を実施することとし、同調査を平成28年11月16･17日にこれを実施した。

試掘調査は、事業対象地に、14箇所のトレンチを設定して掘削する方法で実施された。このうち、１・２・３・５・８号トレンチでは土坑や溝の遺存が確認され、９号トレンチでは畠等の存在が想定されるAs-Kkの堆積が認められた。また、６・７号トレンチは共に南隣接地より１メートル近く低いものの、６号トレンチではHr-FP泥流層の上面を削平していることが確認された。

これらの調査所見に基づき県保護課は、県道35号に北摂する南西部を除く、中・北部の区域を遺跡地として認定し、本調査が必要であるという見解を得て、その旨を中之条土木に回答している。

また、平成28年11月21日付で、東吾妻町教育委員会から埋蔵文化財包蔵地の新規申請がなされ、同日付で埋蔵文化財包蔵地変更されている。

３．発掘調査に至る経過

さて平成28年度、当事業団(以下「事業団」とする)が担当して中之条土木事務所管内では、上信自動車道のうち吾妻西バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査が着手されていた。そうした中、平成28(2016)年11月21日に群馬県県土整備部と県保護課の打ち合わせが行なわれ、土木整備部側より祖母島箱島バイパスの一部である本遺跡地内への構造物の設置工事計画が提示され、平成29年1月20日を希望調査完了日とする、最優先での発掘調査の実施要請がなされた。また、同月24日には当事業団への協議も行われ、本遺跡の発掘調査を、吾妻西バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財の調査に取り込んで実施することが決定した。

当初事業団では、厳冬期の発掘調査を避けるため、12月中の調査を検討したが、調査体制を整えるに時間を要したことなどから、結果的に平成29年１月の発掘事業実施の運びとなった。

なお、平成29年５月17日、当事業団による平成29年度の当遺跡の発掘調査の実施が県保護課により調整され、同月24日に上信自動車道建設事務所より発掘調査の依頼があり、同月26日中之条土木と事業団の間で契約がなされ、同年７・８月の当事業団による発掘調査の実施が決定されたのである。

第２節　発掘調査の経過

事業団による発掘調査は、平成29(2017)年１月と同年７・８月に実施した。以下に、その概要を記すこととする。

平成29(2017)年１月（１区）

５日　重機搬入。表土の掘削着工。遺構の確認作業着手。

６日　基本土層１・２の写真撮影。

10日　１・２号土坑より掘削開始。遺構測量、遺構写真撮影着手。

12日　１～10号溝掘削開始。断面図作成、断面写真撮影着手。

16日　重機搬入。除雪作業実施。

17日　各土坑、ピット、畠の掘削開始。断面図作成、断面写真撮影着手。

18日　11・16号溝掘削開始。断面図作成、断面写真撮影。各ピット断面図作成、断面写真撮影完了。

19日　12～15溝断面図作成、断面写真撮影。各土坑の断面図作成、断面写真撮影完了。

20日　２号竪穴建物断面図作成、断面写真撮影。空中写真撮影実施。

21日　２号竪穴建物竈断面図作成、断面写真撮影。竪穴建物内ピット着手。

23日　２号竪穴建物、各土坑、ピット、溝、畠の遺構全景写真撮影開始。

24日　２号竪穴建物竈掘方断面図作成、断面写真撮影。各遺構の全景写真撮影完了。

26日　２号竪穴建物の最終遺構全景写真撮影。埋没谷１の調査完了。重機搬入。埋戻し着工。

30日　仮設関連片付け作業全て完了。調査終了。

平成29(2017)年６月

23日　重機にて事務所敷地等の整地着工。

24日　事務所敷地等の整地完了

７月（２・３区）

３日　重機搬入。３区西側より表土の掘削着工。遺構の確認作業着手。調査範囲安全柵設置。

６日　１号竪穴状遺構、１号掘立柱建物、36号土坑などより掘削開始。３区東側重機による表土掘削開始。

７日　３区東側の遺構の確認作業着手。２号掘立柱建物・37号土坑の掘削開始。

10日　１号竪穴状遺構、１・２号掘立柱建物、36・37号土坑、16～29号ピットの全景写真撮影。同遺構調査完了。

11日　38・39号土坑、34～38号ピット全景写真撮影。同遺構調査完了。

12日　３区中央部重機による表土掘削開始。遺構の確認作業着手。

13日　17号溝の掘削開始。40・41号土坑全景写真撮影。同遺構調査完了。

14日　17号溝の全景写真撮影。同遺構調査完了。

18日　２号竪穴状遺構、42～51号土坑掘削開始。（２区）の調査区設定。重機による表土掘削開始。遺構の確認作業着手。

19日　42～51号土坑全景写真撮影。同遺構調査完了。18号溝の掘削開始。

20日　２号竪穴状遺構、18号溝全景写真撮影。同遺構調査完了。３区の調査終了。19号溝掘削開始。重機による掘削終了。重機搬出。

21日　19号溝断面図作成着手。

31日　２区で確認された土坑、ピットの掘削開始。

８月（２区）

１日　52～56号土坑全景写真撮影。同遺構調査完了。

２日　38～40号ピット全景写真撮影。同遺構調査完了。

３日　59・60号土坑全景写真撮影。同遺構調査完了。

７日　台風の接近予報対策として調査区内・外の安全確認と各所養生実施。

９日　57・58号土坑の全景写真撮影。同遺構調査完了。

10日　夏季(盆)休み期間中の安全対策として調査区内・外の安全確認と各所養生実施。

21日　（２区)空中写真撮影実施の為の、調査区清掃及び遺構マーキング作業実施。

22日　19号溝の全景写真撮影。ドローンによる２区空中写真撮影実施。２区調査終了。

24日　重機搬入。２区より埋戻し開始。

30日　埋戻し、整地完了。重機搬出。仮設施設の片付け全て完了。調査終了。

第３節　発掘調査の方法

１．調査区の設定

本報告書では、調査区を道路で区画される３区画に区分し(第４図)、北側より１区北、１区南、２区、３区と呼称して報告する。

但し１区と２区の東部と北部を調査した平成28年度調査では、全調査域を１区として、１区を１区北、２区を１区南と表記したものや、１区南を２区とするものがあり、平成29年度は２区南西部を２区、３区を３区として調査するなど多少の混乱が見られた。そこで、両年度の調査区の整合を図るに当たり、28年度の１区南と29年度の２区に重複部分があることも勘案して、上述のような調査区としたことを付記しておく。

２．グリッドの設定

本遺跡の発掘調査では、グリッドの設定は行わなかったが、測量は世界測地系国家座標(座標第Ⅸ系)に基づいて行い、図化した。

３．発掘調査の方法

本遺跡の発掘調査は、表土は土木機械(バックホー)を用いて掘削、除去した。その後、人力にて遺構確認面を精査し、遺構確認した後、個々の遺構等の調査を行った。

また、遺構は土層断面が観察できるようにベルトを設定し、あるいは半裁しながら掘削し、下記のように適宜記録化を実施した。

出土遺物は、一部出土状態を図化、記録し、全ての出土遺物について出土位置と取り上げ日等を記した荷札等を付した。

最後に調査区の埋め戻しを行った。

第４図　調査区と国家座標軸(Ｓ＝１/1000)

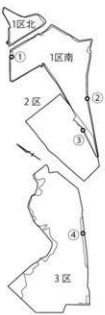
４．発掘調査の記録

発掘調査は記録保存を目的とし、その記録として測量図面の作成、写真撮影及び一部調査所見を作成した。

図面は調査区、遺構、基本土層について、適宜平面図と断面図を作成した。平面図は電子平板によるデジタル測量を委託し、個別遺構は1／10～1／40の個別平面図の紙出力図を作成した。断面図も同様に平面図に対応する縮尺で測量を委託し、土層記録を調査担当者が注記した。なお、アナログ作成の断面実測図等は、デジタルトレースを委託して、デジタル化した。また、土層の色調は個人差の補正を目途として、土色帳(凡例９)を極力使用した。

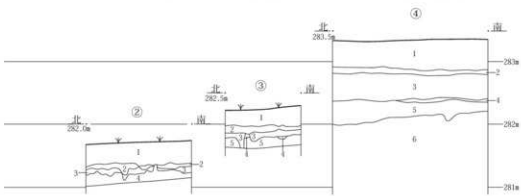
遺構等の記録写真は航空写真を除き、35㎜版デジタルカメラとモノクロフィルムを用いて撮影した。デジタル写真はＲＡＷデータで記録し、モノクロフィルムは120タイプを利用して、６×７サイズで記録した。また、委託して航空写真を撮影した。

第４節　基本土層



本遺跡での自然堆積状況は地点により異なる。しかし、榛名山火砕流堆積層を基盤としており、総じて右に示したような基本土層を示すことができる。

Ⅰ　暗灰黄色土　表土、現耕作土
Ⅱ　黒褐色砂質土
Ⅲ　浅間粕川テフラ(As-Kk)　大治３(1128)年噴出
Ⅳ　黒褐色砂質土
Ⅴ　黄褐色砂礫層土　榛名山火砕流堆積物。６世紀前半



① 1　暗灰黄色土（2.5YR4/2）　表土。
　2　黒褐色砂質土（10YR3/2）　小礫や白色小粒子（軽石か）見る。
　3　黒色土（2.5Y2/1）　小礫混じる。褐色粒子少し。As-Kk 目立つ。
　4　暗灰黄色砂質土（2.5YR4/2）　３～５の漸移層。
　5　浅黄色砂（2.5Y7/3）　榛名二ッ岳火砕流堆積層。

② 1　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　橙色粒子等僅かに入。やや粗い砂入る。
　2　黒色土（2.5Y2/1）　小礫等入り、部分的に As-Kk 多く混入。
　3　黒褐色土（2.5Y3/1）　褐色白色粒子（軽石）見る。小礫目立つ。
　4　黄褐色からにぶい黄色砂（2.5Y5/3-6/4）榛名二ッ岳火砕流堆積層。大小礫多量に含む。粘土状の部分もあり。

③ 1　暗灰黄色砂質土（2.5Y4/2）　表土。白色粒少し、小礫や砂粒多し。
　2　黒褐色砂質土（2.5YR3/2）　砂粒多く含み、褐色粒子少し。
　3　暗褐色砂質土（10YR3/3）　橙色・白色・褐色粒子目立つ。にぶい黄色砂ブロック状に入る。
　4　褐色砂質土（10YR4/4）　にぶい黄色砂（2.5Y6/3）目立つ。にぶい黄色砂ブロック状に入る
　5　にぶい黄色砂（2.5Y6/3）榛名二ッ岳火砕流堆積層の一部。細粒で砂状だが部分的にシルト状や粘土状。

④ 1　灰黄褐色土（10YR4/2）　砂質。軽石（浅間）多く、締りなし。
　2　にぶい黄褐色砂質土（10YR5/2）　軽石含。一部純堆積。締りなし。
　3　黒褐色土（10YR3/1）　軽石（As-B）多く含む。
　4　灰褐色粕川軽石層（10YR5/2、As-Kk）　灰層なし。
　5　黒褐色土（10YR2/2）　砂質性あり。小礫若干含む。
　6　黄褐色砂礫層（10YR5/6）　Hr-FP 泥流～Hr-FA火砕流。数メートル堆積。下位に径 50cm を超えるもの含む礫層あり。

第５図　基本土層観察位置と土層断面(位置図：S＝1/2000　断面図：S＝1/60)

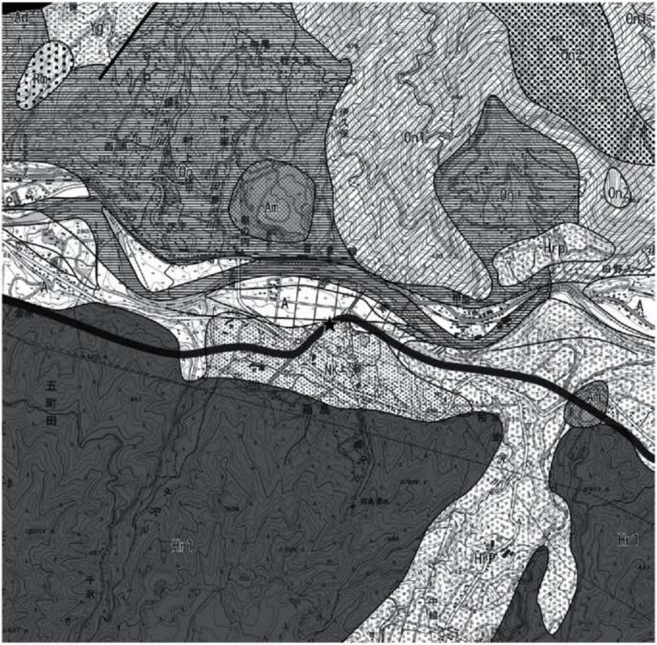
第２章　宮貝戸遺跡を廻る環境

第１節　地理的・地質的環境

１．地理的環境

本遺跡は群馬県中西部、関東平野の北西隅部の渋川市街地の北西11km余りに位置する。本遺跡付近は、共に火山である榛名山と小野子山がそれぞれ南側と北側から迫り、両山の裾野に接するところに、利根川支流の一級河川吾妻川がほぼ東方向に流下しており、本遺跡はその左岸段丘上に立地している。

河川は吾妻郡を東西に横断する吾妻川が、蛇行しなが



Hrp 二ッ岳火砕流　A 沖積　NK 中之条面　On1 成層火山噴出物　Doz 山頂溶岩
Hr1 榛名山第１期噴出物　On 小野上層　Yg 谷後層　Ad 安山岩岩脈　Am 安山岩岩体
Rm 流紋岩ないしデイサイト岩体　河岸段丘面　曲流帯　断層

第６図　宮貝戸遺跡周辺地質図（国土地理院2.5万分の１地形図「金井」平成21年５月１日発行を使用）

ら東流するが、この川は白樹山系の酸性質河川の流入による酸性河川として知られるため、上流部の水質改善がなされる以前は魚類の生息が見られなかったと言われている。この吾妻川に、南の榛名山頂のカルデラ湖である榛名湖を水源に流下する沼尾川(第６図右下)が流入する。この他、吾妻川へは北の小野子山麓、南の榛名山麓の渓間より湧き出る渓流が流入するが、第６図の範囲では吾妻川左岸の川下から田野沢、濁沢、不動沢、寺沢、田島沢川、鑼(けぬき)沢川、右岸では川下から金沢川、鳴沢川、千沢川が注がれている。

第６図に図示した範囲の行政区分は、本遺跡を含む吾妻川右岸(南側、第６図下半)は吾妻郡東吾妻町(旧吾妻郡東村)であり、その東端部の沼尾川以東は渋川市である。一方、吾妻川左岸(第６図上半分)は渋川市(旧北群馬郡小野上村)である。付近は榛名山や小野子山が迫り出して、平坦地や緩傾斜地は、およそ吾妻川流域の河岸段丘面や鑼沢川流域の扇状地のような形状の地形などに限られ、集落や農地も平坦地やその隣接地に集まる傾向がある。主たる産業は農林業であるが、工場等も散見される。

吾妻川の北側には国道353号、南側には県道35号渋川東吾妻線(通称「日蔭道」)が、吾妻川に沿いに並走し、東の渋川と西の中之条、原町(東吾妻町)を結んでいる。また、国道353号に沿って、単線のＪＲ吾妻線(昭和20年開業)が走り、本遺跡の対岸西寄りに小野上駅が設けられている。国道353号と県道35号線をつないで吾妻川を渡河する橋梁は多くなく、本遺跡付近で吾妻川を渡河する橋梁は中央橋のみである。

２．地質的環境

新生代第三紀中新世において、本遺跡付近は東京湾から日本海に続く海洋の一角にあり、その名残として渋川市北西部の谷後(やご)の集落の西側に、軽石凝灰岩及び凝灰質砂岩からなり、海棲貝化石も算出する中期中新世の谷後層(Yg)が見られる。

その後上地は隆起して陸地となるが、新生代第四紀更新世の前期には、吾妻川左岸側で、凝灰角礫岩、砂岩、泥岩からなる小野上層(On)の形成が確認される。また中期に至って吾妻川左岸に小野子山が誕生したことが、かんらん石含有普通輝石紫蘇輝石安山岩溶岩及び火砕物からなる成層火山噴出物(On1)、普通輝石紫蘇輝石安山岩からなる山頂溶岩(On2)により確認されている。また、同じころに本遺跡の南側でも紫蘇輝石普通輝石安山岩溶岩、火砕物からなる榛名山第１期噴出物(Hr1)の噴出により榛名山が誕生している。後期になると、吾妻川右岸に、本遺跡の乗る上部ローム堆積段丘面である、礫、砂、粘土からなる中之条面(NK)が形成される。

その後、第四紀後期更新世から完新世にかけて、吾妻川沿い同川右岸に沖積層(A)の形成が確認されている。

また榛名山東寄りで、A.D.６世紀初頭と前半期の榛名山二ッ岳の噴火に伴い噴出した軽石、火山岩、火山灰からなる二ッ岳火砕流の堆積が見られる。また吾妻川の曲流帯(Meander belt)において、第６図中では吾妻川左岸部では下流側より上宿、原で、右岸部では下流側より中小野子、甲里、共栄、塩川で河岸段丘が見られる。本遺跡付近の河岸段丘は、第１段丘面が上宿の段丘であり、第２段丘面は中之条面である。

第２節　歴史的環境

本遺跡周辺は山地が多くを占めており、平坦地や緩斜面地が少ない。このため遺物採集ができた区域も限定的で、発掘調査された遺跡も少ない。従って、周知の遺跡分布も、吾妻川沿いの段丘上や、その支流である小河川沿いの緩傾斜地、即ち集落や耕地付近にほぼ限定されている。また、吾妻川左岸部(北側)が小野子山南麓に当たるのに対し、右岸部は榛名山北麓に当たり、日照の影響か、付近の遺跡分布も左岸部の方に濃い。

なお、本遺跡周辺において、旧石器遺跡は確認されていない。従って以下に縄文時代以降の歴史的概要を記すこととする。

１．縄文時代

本遺跡付近(第７図)に於ける縄文時代の遺跡は、広く分布しているが、右岸部では僅かである。

草創期と早期の遺跡は第７図の範囲では確認されていないが、東方の旧小野上村東端部で、八木沢清水遺跡と藤田柿平遺跡が確認されている。八木沢清水遺跡では草創期の竪穴建物が確認されている。

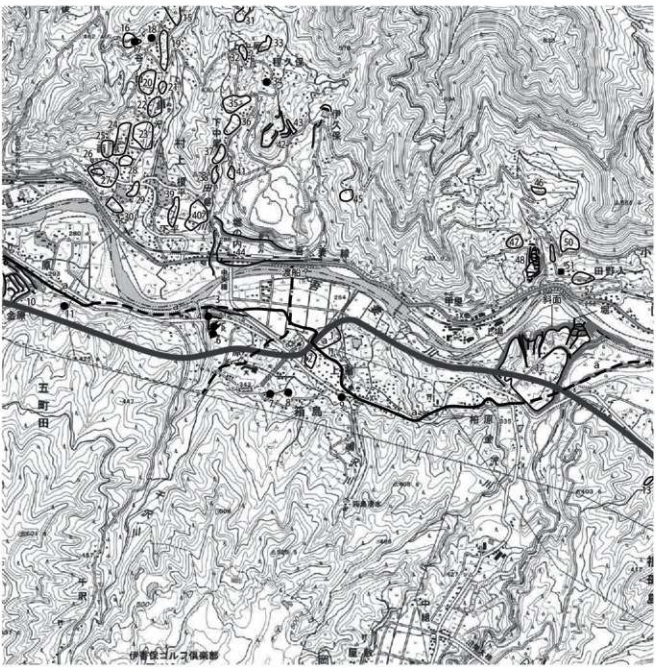
前期の遺跡には、吾妻川左岸部で谷ノ口上手遺跡(15)、谷ノ口下遺跡(19)、西原上遺跡(24)、榎平遺跡(40)、伊久保遺跡(43)が分布しており、黒浜式、関山式、諸磯Ｂ式土器などの出土が見られた。右岸部では東寄りの渋川市分で堀込遺跡(13)が確認されているに過ぎず、同遺跡からは黒浜式、関山式土器の出土が見られた。

当遺跡付近の中・後期の遺跡は吾妻川左岸に西原下遺跡(27)と榎平遺跡(40)があり、中期勝坂式、焼町式、加曽利Ｅ式、後期称名寺式土器の出土を見た。右岸部での遺跡の確認はなかった。

また、本遺跡付近での縄文時代晩期の遺跡は確認されなかった。

２．弥生時代

第７図の範囲での弥生時代の遺跡の分布は少ない。また、その分布は吾妻川左岸の旧田島沢川沿いに限られ、下中尾北遺跡(36)と榎平遺跡(40)が確認されているに過ぎない。両遺跡は共に小規模だという。



第７図　宮貝戸遺跡周辺遺跡分布図(国土地理院2.5万分の１地形図「金井」平成21年５月１日発行を使用)

３．古墳時代

古墳時代の様相はつまびらかでないが、吾妻川の両岸で古墳が確認されている。その分布は段丘上や緩傾斜部に限られ、その数も第７図の範囲では、左岸部で２基に、

表１　周辺遺跡一覧

No.	遺跡名	市町村遺跡番号・総覧番号	所在地	時代								備考
				旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	
1	宮貝戸遺跡	東吾妻 0127	東吾妻町箱島宮貝戸					○	○	○		本遺跡
2	茅貝戸遺跡	東吾妻 0122	東吾妻町箱島茅貝戸							○		
3	寄居城跡	東吾妻 0110	東吾妻町箱島寄居							○		箱島城（寄居館解由）
4	総覧東村12号墳	総覧 東吾妻85	東吾妻町箱島十二下				○					
5	総覧東村10号墳	総覧 東吾妻83	東吾妻町五町田十二下				○					
6	総覧東村11号墳	総覧 東吾妻84	東吾妻町箱島十二下				○					
7	五輪塚古墳	総覧 東吾妻69	東吾妻町箱島諏訪の久保				○					
8	薬師塚古墳	総覧 東吾妻70	東吾妻町箱島諏訪の久保				○					
9	総覧東村15号墳	総覧 東吾妻86	東吾妻町箱島鳴沢				○					
10	金原城跡	東吾妻 0109	東吾妻町五町田金原							○		白狐城（金原左衛門）
11	総覧東村９号墳	総覧 東吾妻82	東吾妻町町田十二ノ前				○					
12	岡崎根小屋城跡	東吾妻 0111	東吾妻町岡崎根小屋							○		柏原城、吾妻地衆金子美濃守
13	堀込遺跡	渋川 S0039	渋川市祖母島堀込		○							前期集落
14	岡崎陣屋		東吾妻町岡崎屋敷								○	
15	谷ノ口上手遺跡	渋川 O0016	渋川市村上谷ノ口		○							
16	別当遺跡	渋川 O0056	渋川市村上谷ノ口		○							
17	御塚	渋川 O0006	渋川市村上谷ノ口									古墳
18	小野上1号墳	総覧 渋川547	渋川市村上谷ノ口				○					
19	谷ノ口下遺跡	渋川 O0017	渋川市村上谷ノ口		○							
20	石臼上遺跡	渋川 O0018	渋川市村上石臼		○							
21	石臼中遺跡	渋川 O0019	渋川市村上石臼		○				○			
22	石臼下遺跡	渋川 O0020	渋川市村上石臼		○							
23	東原上遺跡	渋川 O0021	渋川市村上東原		○				○			
24	西原上遺跡	渋川 O0011	渋川市村上西原		○				○	○		
25	西原岩岸遺跡	渋川 O0022	渋川市村上西原		○							
26	西原遺跡	渋川 O0008	渋川市村上西原							○	○	
27	西原下遺跡	渋川 O0003	渋川市村上西原		○				○			
28	東原中遺跡	渋川 O0023	渋川市村上東原						○			
29	鍋沢遺跡	渋川 O0024	渋川市村上東原		○							
30	鍋沢下遺跡	渋川 O0025	渋川市村上東原		○				○			
31	上中尾北遺跡	渋川 O0029	渋川市村上上中尾		○				○			
32	上中尾遺跡	渋川 O0028	渋川市村上上中尾						○			
33	程久保遺跡	渋川 O0027	渋川市村上程久保		○							
34	小野上２号墳	総覧 渋川548	渋川市村小野子				○					
35	中尾遺跡	渋川 O0030	渋川市村上上中尾		○				○			
36	下中尾北遺跡	渋川 O0031	渋川市村上下中尾		○	○			○			
37	下中尾遺跡	渋川 O0032	渋川市村上下中尾						○			
38	下中尾南遺跡	渋川 O0033	渋川市村上下中尾						○			
39	榎平西遺跡	渋川 O0026	渋川市村上榎平		○							
40	榎平遺跡	渋川 O0004	渋川市村上榎平		○	○			○			
41	細田遺跡	渋川 O0035	渋川市小野子細田						○			
42	突尾根の砦	渋川 O0064	渋川市小野子細田							○		山田氏
43	伊久保遺跡	渋川 O0034	渋川市村上伊久保		○							
44	田の保屋敷	渋川 O0061	渋川市村上堀ノ内							○		
45	大平遺跡	渋川 O0036	渋川市小野子大平						○			
46	三田野遺跡	渋川 O0041	渋川市小野子三田野		○				○		○	
47	田野遺跡	渋川 O0037	渋川市小野子田野		○						○	
48	田野城	渋川 O0060	渋川市小野子城の腰							○		小野子の砦、平形氏
49	長福寺遺跡	渋川 O0038	渋川市小野子長福寺		○						○	
50	東落釜遺跡	渋川 O0040	渋川市小野子落釜		○							
51	柿原経塚	渋川 O0012	渋川市小野子								○	
52	長福寺田野入遺跡	渋川 O0039	渋川市小野子長福寺		○							
a	三国裏街道										○	

右岸部で７基に止まる。このうち吾妻川右岸部の古墳は綜覧東村９号墳(11)・10号墳（５）・11号墳（６）・12号墳（４）・15号墳（９）、五輪塚古墳（７）、薬師塚古墳（８）があり、箱島周辺の段丘上に分布しており、左岸部の古墳は小野上１号墳(18)、小野上２号墳(34)が確認されているが、共に鑪沢沿いの緩傾斜地の上流寄りにある。確認できない五輪塚古墳と綜覧東村９号墳を除く古墳の墳形は全て円墳であり、その規模も、綜覧東村10号墳が25ｍ、小野上１号墳が９ｍを測る以外は、記録のない五輪塚古墳、薬師塚古墳、綜覧９号墳を除く古墳ではいずれも５ｍ以下と規模も小さい。

一方、古墳時代の集落の状況は不明である。

４．奈良・平安時代

律令期に入ると郷(里)制が施行された、本遺跡付近では、吾妻川左岸と右岸の沼尾川以東が群馬郡、上記以外の吾妻川右岸は吾妻郡に属していたと想定されている。しかし本遺跡付近が、どの郷(里)は属したかはつまびらかではない。

また、集落遺跡は、吾妻川左岸地域では西寄りの田島沢川、鑪沢川流域を中心に、田島沢川流域で上中尾遺跡(32)、鑪沢川流域で石臼中遺跡(21)等の平安時代の遺跡分布が見られるが、右岸地域においては、本遺跡（１）で確認されるのみである。水田遺構等も現時点では確認されていない。

５．中・近世

本遺跡付近は、恐らく中世の頃に、吾妻川左岸地域を北箱島、右岸地域を南箱島と呼称していた時期があり、両地域は交流も多かったという。鎌倉時代、『吾妻鏡』に吾妻に吾妻氏がおり、渋川には建暦３(1213)年の和田合戦で没落した渋川氏がいたことが知られているが、本遺跡付近の様相はつまびらかでない。室町時代に入ると、山内上杉氏の家宰あるいは上野守護代となった白井長尾氏が渋川市白井に入り、本遺跡付近も白井長尾氏の支配地域となっていたようである。江戸時代に入ると、白井藩領、前橋藩領、天領などが複雑に入っている。岡崎陣屋(14)は岡上氏の陣屋跡である。

また第７図には室町～戦国時代の城館が幾つか見られる。このうち寄居城（３）は箱島地樂の寄るところであるが、寄居の名から、長尾氏(山内上杉氏)との関係が窺われる。また、吾妻川右岸の岡崎根小屋城(12、別称「柏原城」)と左岸の田野城(48、別称「小野子の砦」)は共に東の白井長尾氏と西の吾妻氏(斎藤氏)にとっての境目の城である。一方、岡崎根小屋城は城域も広いが、永正６(1509)年の折、長尾景春が白井を追われた際に一時拠った城とみられている。

天明２(1782)年銘の碑書供養塔の下から一字一石経、多字一石経の礫石経が出土した椿原経塚(51)があるが、旧小野上村域からは小野子地区で２基、村上地区で１基礎の一字一石供養塔の建立が見られる。この他、吾妻川右岸の県道35号線に沿って、近世、三国裏街道（ａ）が東西に走行していた。またその渡河点は現時点では判然としないが、少なくとも近代には箱島と対岸の堀之内を結ぶ渡船が設置されていた。

〔参考文献〕
新井房夫監修『群馬県10万分の１地質図 1999』(1999)、群馬県地質図作成委員会、内外地図株式会社
小野上村誌編纂委員会『小野上村誌』(1978)
群馬県教育委員会『吾妻の諸街道』(1983)、pp87-105
群馬県教育委員会文化財保護課『群馬県の中世城館跡』(1991)
群馬県教育委員会文化財保護課『群馬県古墳総覧』(2017)
群馬県史編さん委員会『群馬県史　通史編１　原始古代１』(1990)
小林　修『渋川市の経塚とその出土遺物』(2007)、「渋川市赤城歴史資料館紀要」第９集、pp41-58
渋川市教育委員会『渋川市小野上地区埋蔵文化財分布地図』(2011)、渋川市埋蔵文化財発掘調査報告書第24集
渋川市市誌編さん委員会『渋川市市誌　第二巻　通史編・上　原始～近世』(1993)
萩原進監修『上野国郡村誌６　群馬郡（３）』(1985)、群馬県文化事業振興会
萩原進監修『上野国郡村誌11　吾妻郡』(1985)、群馬県文化事業振興会
山崎　一『群馬県古城塁址の研究　下巻』(1972)、群馬県文化事業振興会

第３章　発見された遺構と遺物

第１節　本遺跡の調査概要

既に本遺跡の調査区は１章に、立地は２章に記載しており、各区の概要は第２節以降に述べ、記載内容が重複することになるが、本節では、遺跡の立地と調査区、および調査区全体の遺構の概要を記すこととする。

１.遺跡の立地と調査区(第８図)

前章に記したように、本遺跡は吾妻川右岸の上位段丘面の中之条面上に立地し、西側から北側にかけて下位段丘面が広がり、その境には段丘崖が形成されている。本遺跡は、この段丘崖と東側は鳴沢川により開析された谷地形に挟まれた舌状台地状の地形上に在る。本遺跡の立地するこの地形は、北行に従い幅員が減ずる平面形態を成し、その先端部は尾根状を呈している。

本遺跡の調査区は北端尾根状部の南側に設定されている。調査区は上信自動車道の路線に沿って北東－南西方向に延び、その北西－南東方向の範囲は上信自動車道の路線幅に限られる。

さて繰り返しになるが、本遺跡の区の呼称は「１区北」「１区南」「２区」「３区」であるが、以下にその銘々の経緯を示す。本遺跡の調査は平成29年１月に着手したが、平成28年度調査は調査区の北東側を対象とした。このとき調査区全体の呼称を「１区」としたが「１区」は、区の北東寄りに北西－南東方向に道路が横断し、調査区を分割していたため、道路の北東側、調査区北東端を「１区北」とし、道路の南西側を「１区南」と呼称することとした。また、平成29年度調査では「１区南」の西側隣接部から南西にかけての区域の調査を行ったが、この調査区域の北東寄りには南北に縦貫する道路があったため、その東側でかつ「１区南」の西側に隣接する調査区を「２区」とし、「２区」の西側に接し道路を挟んで位置する(南西側)調査区を「３区」と呼称することとした。

表２　宮貝戸遺跡遺構数量一覧

遺構＼区	１区北	１区南	２区	３区	計
竪穴建物		1			1
掘立柱建物				3	3
竪穴状遺構				2	2
土坑	3	33	9	16	61
ピット	2	16	3	10	31
溝		16(畑2)	1	2	19
畠	1	2(溝14)	2	6	11
谷	2	1			3

２.調査した遺構(第８図)

本遺跡の各区の遺構については第２節以降に詳述するが、本節では調査区全体の遺構状態の概要を記す。

本遺跡で調査した遺構は、６世紀の榛名山の爆発に伴う火砕流で被覆した堆積層の上に形成されたものである。従ってその時期は６世紀以降の所産のものに限られるが、実態としては中世を中心とした律令期以降の所産のものであった。出土遺物は多くなかったが、おおむね遺構の時期に伴う遺物が出土している。しかし出土遺物の中には縄文時代の遺物も若干含まれていたが、これらは上記火砕流堆積以降の流入品である。

検出した遺構は、竪穴建物１棟、掘立柱建物３棟、竪穴状遺構２基、土坑61基、ピット31基、溝19条、畠11面、谷３箇所であった。このうち、溝19条のうちの14条は畠２面にも振り分けられるものである。

このうち、律令期の竪穴建物は調査区北東部(１区南)の東寄りに在り、中世の所産と判断される掘立柱建物と竪穴状遺構は調査区南西隅部(３区南部)に分布している。一方、土坑は調査区全体に広く分布しているが、ピットの分布は散見される状態に留まる。溝は１区南の北端部の１区北との境に在る道路に並行して在る１条と、１区南南端部の１条、２区に在って２・３区の境付近を走行する１条、３区中ほどの区画溝と思われる２条がある。これらを除く、１区南の中ほどに位置する溝群は、開削時の可能性も有する、重複する２面の畠に関連した遺構として判断されるものである。また、畠は１区南の北部を除く区域の広い範囲に分布している。このうち11面は、掘削深度の深浅はあるが通常のサク(溝)の掘削を伴うものであったが、残る２面は桑等の植栽が想定される坪掘りによるものであった。

第８図　宮貝戸遺跡　調査区と調査遺構全体図

第２節　１区の遺構と遺物

１．１区の遺構(第９～29図、PL.１～12・24)

本節では、平成28年度調査分の１区の遺構、遺物について報告する。後述のように１区は、「１区北」と「１区南」分けていたが、本書では一括して報告することとする。

前節にも述べたように、本遺跡は東側が鳴沢川により開析され、また西側は吾妻川の下位段丘面との境の段丘崖で削られた、舌状台地状の土地に立地している。また繰り返しになるが、この土地のプランは、北に向かって狭まる形状を呈している。その先端部の形状は尾根状を呈しているが、１区はこの尾根状の土地のすぐ南に位置している。しかし、１区は道路を挟んで南北に分かれており、平成28年度の発掘調査では、北側を「１区北」、南側を「１区南」と呼称している。

さて、１区北では、その南端に東側から２号谷、西側から１号谷が湾入しており、その谷頭にはそれぞれ４号土坑と37号土坑が掘削されている。この１・２号谷の存在により、土地は南北に分けられている。また、４・37号土坑の間には、南側１区南に分布する土坑群に属する１号土坑が掘削されている。そして、谷の北側には１号畠が広がっており、その中には１・２号ピットが残されている。

一方、１区南では、中部北寄りに竪穴建物が１棟あり、その東には竪穴建物あるいは竪穴状遺構の可能性を有する土坑１基がある。これを含め、33基の土坑が点在するが、北部には短冊形のものが多く分布しており、中部では隅丸方形様のものが多く分布している。また、16基のピットが散在しているが、北西部に６基、中南部に７基、南部に３基がまとまってある。この他、16条の溝が分布するが、１区南の北端と南端に１条ずつあった。この他の14条は中部北寄りに集中して分布していたが、これらの溝群は２群の耕作痕と解釈される遺構群であった。

なお、１区南の中部西側に位置し、かつ後述の２区北側に位置する区画は、25×20mほどの範囲で大きく削平されており、調査対象外となっている。(６頁の第４図参照、14頁の第８図参照)

２．２号竪穴建物(第10～12図、PL.２・３・24)

概要　本建物は、竈付の竪穴建物である。調査時点では「２号住居」と呼称していた。なお、１号竪穴建物(１号住居)は埋没谷と確認されたため、その呼称は欠番となっていることを付記しておく。

位置　本建物は１区南の東部中ほどにあり、161～166－099～103グリッドに位置する。

重複　本建物は33号土坑と３・４・５号溝と重複するが、33号土坑との新旧関係は特定できなかったが、３～５号溝は本建物より新しい。

規模　長径：3.89m　短径：3.46m　深さ：0.48m

竈１　幅：0.62m　奥行き：1.33m

　燃焼部　幅：0.63m　奥行：0.89m　深さ：0.04m

　煙道　幅：0.17m　長さ：0.21m

　奥壁高：0.36m

竈２　幅：0.92m　奥行き：1.25m

　右袖　幅：0.22m　長さ：0.44m　高さ：0.34m

　燃焼部　幅：0.81m　奥行：0.89m　深さ：0.05m

　奥壁高：0.35m

ピット１　径：0.52×0.45m　深さ：0.05m

ピット２　径：0.63×0.63m　深さ：0.04m

ピット３　径：0.20×0.19m　深さ：0.10m

ピット４　径：0.11×0.11m　深さ：0.09m

ピット５　径：0.20×0.17m　深さ：0.08m

ピット６　径：0.18×0.11m　深さ：0.07m

埋没状況　黒褐色土や黄褐色土で埋没し、上位に粕川テフラ(As-Kk)が堆積する。いわゆる三角堆積層は黒褐色土で形成される。

構造　〔竪穴〕竪穴は横長方形プランを呈し、主軸方向はN81°Wを向く。

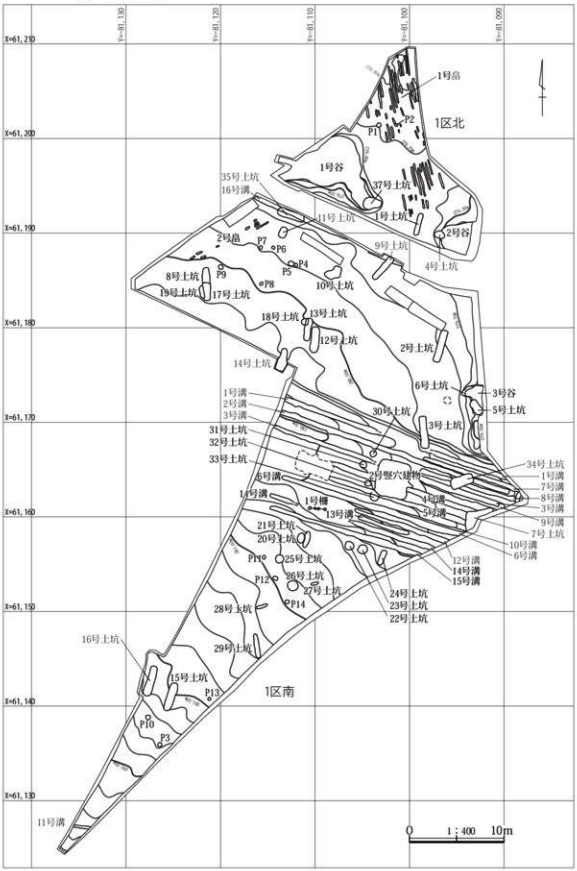
〔掘り方〕掘方は確認されなかった。いわゆる地床である。

〔竈〕竈は２基あり、東壁の中央やや南寄り(竈１)と東南隅(竈２)の２か所に設けられる。遺構の遺存状態から同時併存の可能性が考えられる。

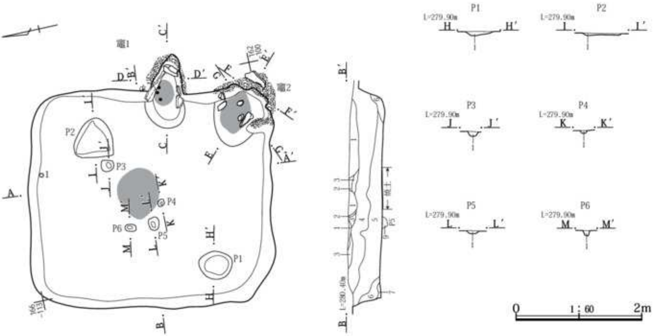
（竈１）主軸方位はN85°Wを向く。径0.74×1.22m、深さ0.10mの盾形プランを呈する浅い掘り込みを伴う掘り方を有する。

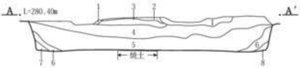
壁面をやや跨ぐ位置に、楕円形プランの浅い掘り込み

１区全体図



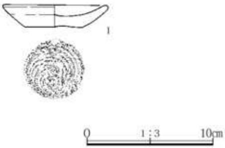
第９図　１区全体図





（２号竪穴建物）
1　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　黒褐色土に３層の軽石や２層の火山灰が多量に混じる。
2　灰色火山灰(7.5Y6/1)　青く見えるシルト状の火山灰。
3　灰白～淡黄色軽石(5Y8/2～8/4)　As-Kk 。径２～５㎜ほどの軽石が50㎜ほどの層になる部分もある。下部のやや黄色がかってる層はAs-B軽石かもしれないが、間層がないため不明。
4　黒褐色土(2.5Y3/2)　にぶい黄色砂を多く混入し、部分的にブロック状を呈する。砂質。径３～５㎜ほどの白色軽石を含む(目立つ)。
5　黄褐色土(2.5Y5/3)　黄褐色(にぶい黄色)砂を非常に多く含む。砂質。褐色粒子が目立つ。褐色土がブロック状には入る。
6　黒褐色土(2.5Y3/1)　黒色土がブロック状に入る。にぶい黄色砂が多く混入し、部分的にブロック状を呈する。
7　黒褐色土(2.5Y3/2)　多量の細かい砂が入り、砂質。崩落した土か。
8　にぶい黄色砂(2.5Y6/4)　榛名二ツ岳火砕流堆積物の一部。壁面(掘り方)の砂。
9　黒褐色土(2.5Y3/2)　砂質。灰黄色砂が多量に混入し、部分的にブロック状を呈する。炭化物が少し混入。黒色土がブロック状に混入する部分も見られる。（Ｐ５）

（２号竪穴建物Ｐ１）
1　暗褐色土(10YR3/3)　黄色砂を多量に含み、ブロック状のところもある。炭化物、褐色粒子が少し見られる。
（２号竪穴建物Ｐ２）
1　黒褐色土(2.5Y3/2)　砂質。径３～６㎜ほどの小礫(軽石)を多く含む。にぶい黄色砂ブロックが少し見られる。
（２号竪穴建物Ｐ３～Ｐ６）
1　黒褐色土(2.5Y3/2)　砂質。灰黄色砂が多量に混入し、部分的にブロック状を呈する。炭化物が少し混入。黒色土がブロック状に混入する部分も見られる。



第10図　１区南２号竪穴建物と出土遺物

が掘削されており、壁面を跨ぐ位置に燃焼部が設けられている。

袖は壊されていたが、燃焼部の縁に、端部を下に、表裏面を燃焼部に向けてた河床礫を左側で３個、右側に２個縦列に立てて袖石とし、袖石の背面と上側には褐色あるいは黄褐色の粘土で袖が作られる。

手前側の袖石の上には、やや柱状の形態を呈する天井石を渡し、天井石の奥には表裏面を上下置いた平石を袖の上と煙道部に各１枚が置かれているが、この２枚の礫の間の直下に、燃焼部奥壁に接して柱状の礫が横位に渡されている。なお、これら３個の礫は、天井石のすぐ奥のものは竈の口を、また中間の礫は燃焼部と煙道部の境を閉塞しているため、元の位置からずれている可能性を考えたい。奥の平石は位置的に煙道部を、閉塞しているため、使用時の位置との相違の可能性が考えられるが、あるいは排煙はその上を通して行われた可能性も考慮される。

竈1

D　D'

C　C'

D　D'

竈1

竈2

竈1

竈2

（２号竪穴建物竈１）

1　灰黄褐色土(10YR4/2)　褐色粒子(砂)が多量に混入。砂質。焼土・粘土粒が目立つ。

2　暗褐色土(10YR3/3)　褐色粒子がやや多く入る。砂質。黄褐色粘土がブロック状に見られる。白色粒子が見られる(軽石？)。径３～５㎜ほどの礫が目立つ。

3　オリーブ褐色砂(2.5Y4/3)　地山の砂(榛名二ツ岳火砕流堆積物)に４層の粘土や５層等が混じって積もっている感。竈掘り方壁の崩落。

4　褐色粘土(10Y4/4)　褐色粒子が多量に混入。５層の粘土ブロックが目立つ。５層とともに竈を構築する材。

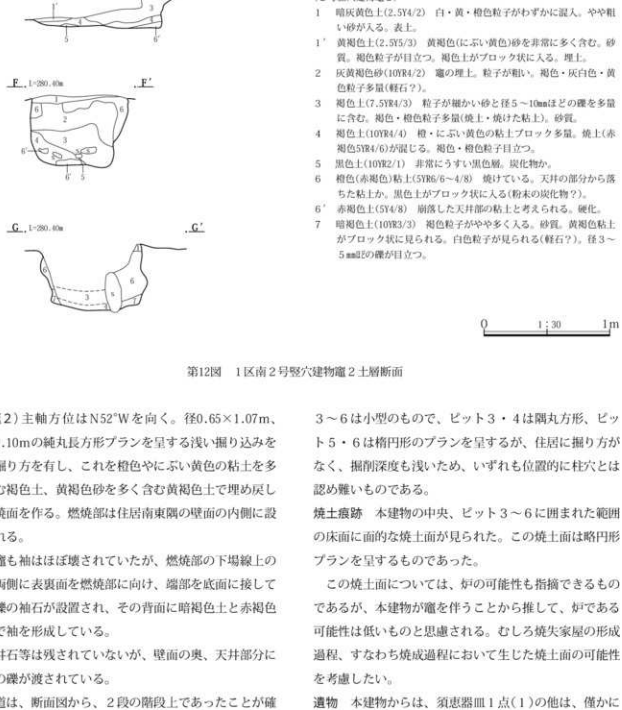
5　黄褐色粘土(2.5Y5/3)　竈を形成する粘土。砂粒が少し入る。黒色粒子(黒色土)が少し見られる。

6　灰黄褐色土(10YR4/2)　１層に似るが灰白色砂が多量に混入し、砂質。

7　黒褐色土(2.5Y3/1)　黒色土がブロック状に入る。にぶい黄色砂が多く混入し、部分的にブロック状を呈する。

0　1:30　1m

第11図　１区南２号竪穴建物竈と竈１土層断面



（２号竪穴建物竈２）

1　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　白・黄・橙色粒子がわずかに混入。やや粗い砂が入る。表土。

1'　黄褐色土(2.5Y5/3)　黄褐色(にぶい黄色)砂を非常に多く含む。砂質。褐色粒子が目立つ。褐色土がブロック状に入る。埋土。

2　灰黄褐色砂(10YR4/2)　竈の埋土。粒子が粗い。褐色・灰白色・黄色粒子多量(軽石？)。

3　褐色土(7.5YR4/3)　粒子が細かい砂と径５～10mmほどの礫を多量に含む。褐色・橙色粒子多量(焼土・焼けた粘土)。砂質。

4　褐色土(10YR4/4)　橙・にぶい黄色の粘土ブロック多量。焼土(赤褐色5YR4/6)が混じる。褐色・橙色粒子目立つ。

5　黒色土(10YR2/1)　非常にうすい黒色層。炭化物か。

6　橙色(赤褐色)粘土(5YR6/6～4/8)　焼けている。天井の部分から落ちた粘土か。黒色土がブロック状に入る(粉末の炭化物？)。

6'　赤褐色土(5Y4/8)　崩落した天井部の粘土と考えられる。硬化。

7　暗褐色土(10YR3/3)　褐色粒子がやや多く入る。砂質。黄褐色粘土がブロック状に見られる。白色粒子が見られる(軽石？)。径３～５mmほどの礫が目立つ。

第12図　１区南２号竪穴建物竈２土層断面

（竈２）主軸方位はN52°Wを向く。径0.65×1.07m、深さ0.10mの純丸長方形プランを呈する浅い掘り込みを伴う掘り方を有し、これを橙色やにぶい黄色の粘土を多く含む褐色土、黄褐色砂を多く含む黄褐色土で埋め戻して燃焼面を作る。燃焼部は住居南東隅の壁面の内側に設けられる。

本竈も袖はほぼ壊されていたが、燃焼部の下場線上の左右両側に表裏面を燃焼部に向け、端部を底面に接して河床礫の袖石が設置され、その背面に暗褐色土と赤褐色粘土で袖を形成している。

天井石等は残されていないが、壁面の奥、天井部分に板状の礫が渡されている。

煙道は、断面図から、２段の階段上であったことが確認される。

〔柱穴・貯蔵穴〕柱穴・貯蔵穴は明確に確認されていないが、浅い掘り込みのピットが６基確認されている。このうちピット１は楕円形、ピット２は純丸三角形のプランを呈するものであり、ピット１は位置的には貯蔵穴の可能性が考慮されるものの、いずれのピットも形態的に柱穴や貯蔵穴とは認め難い形状をしている。また、ピット３～６は小型のもので、ピット３・４は隅丸方形、ピット５・６は楕円形のプランを呈するが、住居に掘り方がなく、掘削深度も浅いため、いずれも位置的に柱穴とは認め難いものである。

焼土痕跡　本建物の中央、ピット３～６に囲まれた範囲の床面に面的な焼土面が見られた。この焼土面は略円形プランを呈するものであった。

この焼土面については、炉の可能性も指摘できるものであるが、本建物が竈を伴うことから推して、炉である可能性は低いものと思慮される。むしろ焼失家屋の形成過程、すなわち焼成過程において生じた焼土面の可能性を考慮したい。

遺物　本建物からは、須恵器皿１点（１）の他は、僅かに土師器甕片４片が出土したに過ぎない。

所見　本建物の時期は、僅か一点の遺物である須恵器皿（１）からの所見ではあるが、11世紀の所産として把握されるものと思慮される。

ピットはいずれも浅く、本建物に伴うものであるか否かは特定できなかった。このうちピット３～６は、その配置から樹木の根の可能性も考慮されるが、その中に入

る焼土面の存在から、炉に伴う構造物の痕跡の可能性も考慮される。

また、建物中央の焼土面は、上述のように炉の可能性を有するが、本建物が焼失家屋であった可能性も示唆するものである。

３．１号柵(第13図、PL.４)

概要　１号柵は一列に並ぶ、15(Ｐ１)・16(Ｐ２)・17(Ｐ３)・18(Ｐ４)号ピットで構成される。

位置　１号柵は１区南区域の中東部にあり、160～161－108～110グリッドに位置する。

規模・主軸方位　〔規模〕長さ：1.94m　幅：0.30m

柱(ピット)径：0.22～0.34m(平均：0.2725m)

深さ：0.05～0.10m(平均：0.075m)

柱間：0.35～0.72m(平均：0.5567m)

個々のピットの規模は表３に記した。

〔主軸方位〕Ｎ６°Ｅ

個々のピットの規模主軸方位は表３に記した。

重複　本柵は単独であり、他の遺構との重複は見られなかった。

覆土　いずれのピットも小礫混じりの黒褐色砂質土で埋没する。

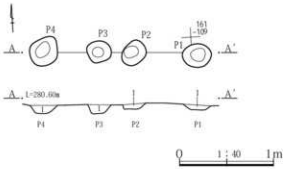
構造　４基のピットが比較的狭いスパンで、直列に掘削されている。

ピットのプランは15・16号ピットが楕円形、17・18号ピットが隅丸方形を呈している。

遺物　出土遺物は得られなかった。

所見　出土遺物もなく、１号柵の細かい時期の特定はできなかったが、ピットの規模から推して中世の所産の可能性がある。

また、本柵の設置意図は特定できなかったが、ピットが近接して掘削されていることから、垣根のような構造物の設置が想定され、掘削位置等から本遺跡の乗る、東西を沢と段丘崖で区画された段丘面を南北に仕切るために設置されたものと想定される。



１号柵(Ｐ１～Ｐ４)
1　黒褐色土(2.5Y3/2)　砂質。ブロック状に黄褐色砂が入る。
　小礫が目立つ。

第13図　１区南１号柵

４．７号土坑(第14図、PL.５・24)

概要　７号土坑は土坑番号を付して処理しているが、竪穴建物を含む竪穴状遺構と認識される遺構である。

本土坑は過半が調査区外に出ていて、北西部寄りを調査できたに過ぎなかった。

位置　１区南中東部東端にあり、158～160－091～094グリッドに位置する。

規模・主軸方位　〔規模〕径：2.92×(1.88)m

深さ：0.25m

〔主軸方位〕Ｎ80°Ｅ

重複　本土坑は４・５号溝と重複するが、本土坑の方が古い。

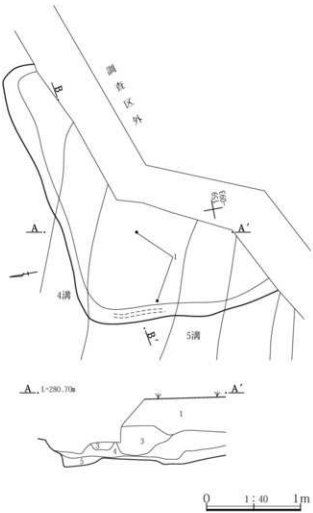
覆土　礫混じりの黄褐色土、暗褐色土、黒褐色土で埋没する。

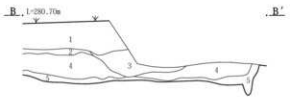
なお、いわゆる三角堆積は確認できなかった。

構造　上述のように本土坑は過半が調査区外にあるため、その構造をつまびらかにすることはできなかった。本土坑のプランは、東西に長い隅丸長方形を呈するものと想定される。また掘削形態は箱状で、底面は平底を呈する。

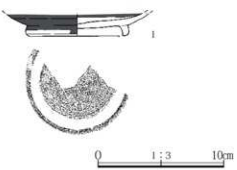
遺物　本土坑からは灰釉陶器椀(１)が出土した。

所見　本土坑の出土遺物から、本土坑はおおむね10世紀前半の所産の可能性が想定されるものの、時期特定には至らなかった。また、掘削意図も特定できなかった。





（７号土坑）
1　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　基本土層の１層。
2　黄褐色土(10YR5/6)　シルト状の微細粒子でロームのような外見。黄色粒子が入る。周辺の泥流層に同様の部分が見られる。
3　黒褐色土(2.5Y3/1)　径10～30mmほどの礫が見られる。褐色粒子がわずかに入るが、混入物が少ない。砂質。基本土層の４層。
4　暗褐色土(10YR3/3)　径５～20mmほどの礫が多く見られる。褐色砂が混じり、部分的にブロック状に入る。
5　黄褐色土(10YR5/8)　黒褐色土がブロック状に入る。褐色、橙色粒子が見られる。白(灰白)色軽石が少し入る。ロームのような外見。



第14図　１区南７号土坑と出土遺物

５.短冊形・長方形・溝形の土坑群

（第15～19図、PL.５～９）

概要　本項では１区の土坑のうち、短冊形・長方形・溝形プランの土坑について報告する。

位置　１区北地区に１号土坑、１区南地区の北西部に８・９・11・12・13・14・17・19・35号土坑、北東部に２・３・５・34号土坑、中・南部に15・16・21・24・27・28・29号土坑が分布している。

表４に所在グリッドを記した。

規模・主軸方位　〔規模〕長径：0.83～3.45m

（平均：2.1738m）

短径：0.27～1.22m（平均：0.6929m）

深さ：0.05～0.83m（平均：0.3168m）

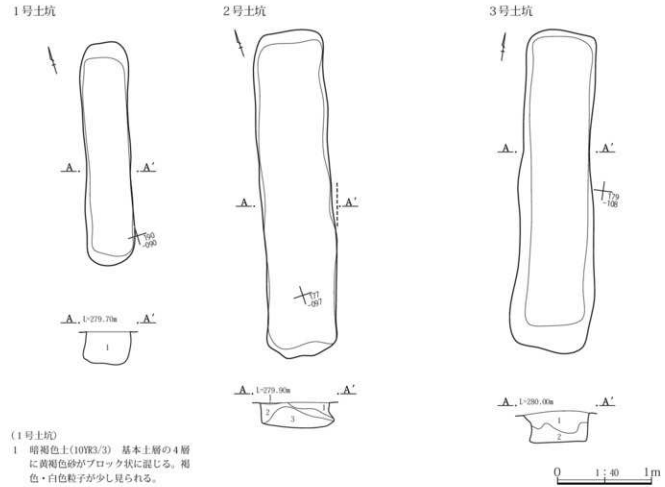
〔主軸方位〕28・35号土坑がほぼ東西方向に向く他は、いずれもほぼ南北方向に主軸を向けている。

なお、個々の土坑の規模と主軸方位は表４に記した。

重複　本土坑群のうち５号土坑は３号谷と、８号土坑は17・19号土坑と、９・35号土坑は16号溝と、34号土坑は２・３・８号溝と重複するが、他の土坑は単独であり、他遺構との重複関係はなかった。

このうち５号土坑は３号谷より新しく、８・17・19号土坑は８→17→19号土坑の順に後者になるほど新しい。また、35号土坑は16号溝より、34号土坑は２・３・８号溝よりいずれも古いが、９号土坑と16号溝の新旧関係は特定できなかった。

覆土　個々の土坑の覆土は、各遺構図に記入した土層注記を参照願いたいが、主たる覆土で見ると、表土層に近い暗灰黄色土で埋没しているのは、19・27・28号土坑であり、As-Kk前後の黒褐色土で埋没しているものが、８・９・11・12・14・21・24・29・35号土坑であり、暗褐色土で埋没しているものは２・５・16号土坑、標準土層下



（1号土坑）
1　暗褐色土(10YR3/3)　基本土層の４層に黄褐色砂がブロック状に混じる。褐色・白色粒子が少し見られる。

（2号土坑）
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　ブロック状に黄褐色砂が混入。褐色粒子目立つ。橙色粒子少し見られる。
2　暗褐色土(10YR3/3)　基本土層の４層に１層がブロック状に混じる。褐色・白色粒子が少し見られる。炭化物が少し見られる。
3　暗灰黄褐色土(10YR4/2)　１層と同様だが、黄褐色砂のブロックが多い。基本土層の１層混流が混入。

（3号土坑）
1　暗灰黄褐色土(10YR4/2)　ブロック状に黄褐色砂が混入。褐色粒子目立つ。橙色粒子少し見られる。
2　暗褐色土(10YR3/3)　基本土層の４層に１層がブロック状に混じる。褐色・白色粒子が少し見られる。

第15図　１区北１号土坑、１区南２・３号土坑

位層土で埋没しているものが13・15・17・34号土坑である。

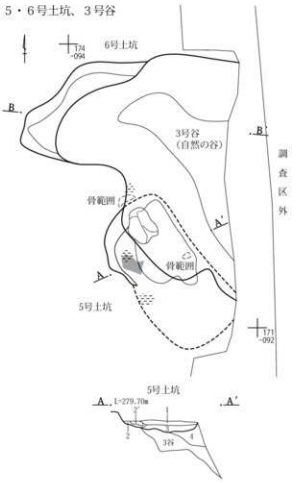
構造　本土坑群の土坑のプランは、２・３号土坑は短冊形、１・８・９・12～16・21号土坑は隅丸短冊形を呈していた。28・29号土坑は溝状を呈し、34・35号土坑は長方形を呈し、５・11・17・19・24・27は隅丸長方形を呈していた。掘削形態はいずれも箱状で、掘削底面は平底を呈していた。

また、その規格には大小があり、大小それぞれに分けて概要を述べる。大型のものは２・３・５・８・９・11～17・34号土坑で、長径は1.17～3.45m(平均2.5792m)、短径は0.51～1.22m(平均0.8769m)、深さ0.11～0.83m(平均0.4046m)を測る。一方、小型のものは１・19・21・24・27～29・35号土坑で、長径は0.83～2.57m(平均1.56m)、短径は0.27～0.57m(平均0.3771m)、深さ0.05～0.45m(平均0.2138m)を測る。

遺物　15号土坑から土師器甕片１点出土遺物が得られたが、他の土坑からの出土遺物は見られなかった。

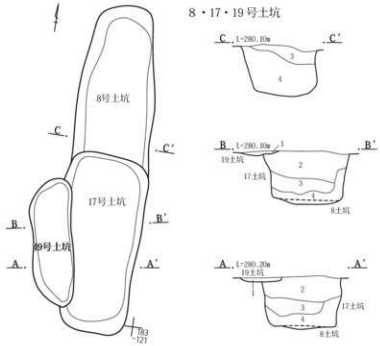
所見　15号土坑を除き本土坑群からの出土遺物はなく、15号土坑出土遺物も破片であったため、本土坑群の時期を特定するには至らなかった。なお、土層記録からは、３・19・27・28号土坑は中近世、８・９・11・12・14・21・24・29・35号土坑は中世、１・２・５・13・15・16・17・34号土坑は古代以降の所産の可能性を有する

が、短冊形、長方形プランの箱形の掘削形態を呈する土坑は、中・近世の所産であることが多く、貯蔵穴と想定されているため、本土坑群はおおむね中近世所産の貯蔵穴と想定される。



(６号土坑・３号谷)Ｂ―Ｂ′
1　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　表土。As-Ksと考えられる軽石が多量に混入。
2　黒褐色土(2.5Y3/2)　褐色粒子が多く見られる。径１～５㎜の軽石を含む。
3　暗褐色土(10YR3/3)　灰白(浅黄)色軽石が目立つ。径３～10㎜の礫が多く混入。
4　黄褐色土(2.5Y5/4)　榛名二ツ岳火砕流堆積物の一部。部分的に暗褐色土が混入。

(５号土坑)Ａ―Ａ′
1　黒褐色土(10YR3/1)　小礫目立つ。骨片を含む(小片が少し)。
2　黒色土(10YR2/1)　混入物少ない。骨片を多く含む。骨片には大きめのものもある。
3　暗褐色土(10YR3/3)　砂質。大粒の砂(軽石？)が多く、ザラザラしている。
4　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　黄褐色砂(2.5Y5/3)が多く入り、部分的にはブロック状に入る。

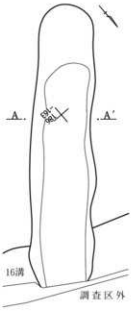


(８・17・19号土坑)
1　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　基本土層の１層。
2　黒褐色土(2.5Y3/2)　黄褐色砂がブロック状に入る。白色・橙色粒子が少し見られる。基本土層の３層に１層や泥流砂が混じる。
3　オリーブ褐色土(2.5Y4/3)　砂質。黄褐色土(砂)がブロック状に入る。２層より黄褐色土(砂)が多い。
4　黒褐色土(2.5Y3/1)　径20～40㎜の礫が目立つ。黄色砂がブロック状に入る。橙色・褐色粒子が見られる。砂質。

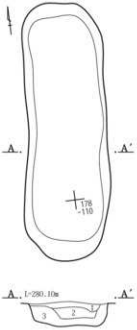
0　1:40　1m

第16図　１区南５・６・８・17・19号土坑と３号谷

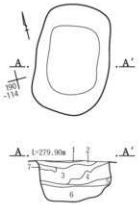
9号土坑



12号土坑



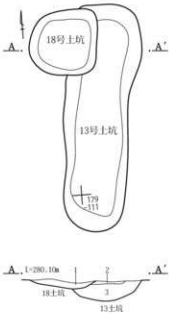
11号土坑



（11号土坑）
1　暗灰黄色土(2.5Y5/２)　基本土層の１層に似る。
2　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　褐色粒子がごくわずか見られる。基本土層の５層に似る。
3　オリーブ褐色土(2.5Y4/3)　黄色砂が多量に入り、部分的にはブロック状。砂質。
4　黒褐色土(2.5Y3/2)　にぶい黄色粒子や砂がわずかに混入。粒子の荒い砂(軽石？)が少し混入。
5　にぶい黄色砂(2.5Y6/3)　砂層。黒褐色土中に多量にあり、層状になっている。
6　黒褐色土(2.5Y3/2)　黄褐色砂がブロック状に入る。

（９号土坑）
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　砂質。褐色粒子目立つ。径２～20mmの礫混入(目立つ)。明黄褐色砂がブロック状に入る。
2　灰黄色砂(2.5Y6/2)　下位の泥流内に見られる細粒の砂。
3　黒褐色土(2.5Y3/1)　細粒の砂質。砂、礫、粒子などの混入物がとても少ない。

13・18号土坑

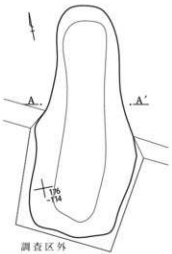


（12号土坑）
1　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　細粒の砂質。混入物(礫、粒子等)が少ない。
2　オリーブ褐色土(2.5Y4/3)　黄褐色砂が多量に入る。部分的にブロック状になる。
3　黒褐色土(2.5Y3/2)　黄褐色砂がブロック状に入る。径２～20mmほどの礫(軽石？)が見られる。

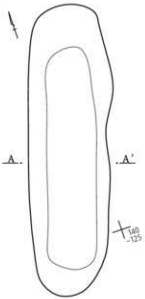
（13・18号土坑）
1　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　基本土層の１層に似る。
2　黒褐色土(2.5Y3/2)　黄褐色砂がブロック状に入る。径２～４mmほどの礫(軽石？)が多く入る。
3　オリーブ褐色土(2.5Y4/3)　黄褐色砂が多量に入る。部分的にブロック状になる。

第17図　１区南９・11～13・18号土坑

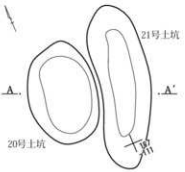
14号土坑

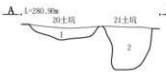


15号土坑



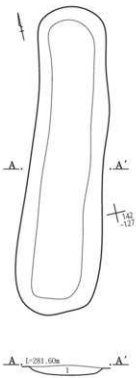
20・21号土坑





(20・21号土坑)
1　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　径10～50mmの礫数個。
　砂質。径３～５mmほどの礫多く含まれる。(20号土坑)
2　黒褐色土(2.5Y3/2)　径２～４mmほどの礫多く含まれる。砂質。(21号土坑)

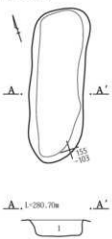
16号土坑



(16号土坑)
1　暗褐色土(10YR3/3)　褐色粒子がわずかに見られる。
　径５mmほどの礫が少し見られる。砂質。

(24号土坑)
1　黒褐色土(2.5Y3/2)　径２～４mmの小礫多量。やや砂質。

24号土坑



(14号土坑)
1　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　径３～５mmほどの礫(砂粒)多い。やや砂質。
2　黒褐色土(2.5Y3/2)　褐色粒子目立つ。径１～３mmほどの砂質多い。
3　黄褐色土(2.5Y5/4)　にぶい黄色砂がブロック状に入る。砂質。
4　にぶい黄色砂(2.5Y6/3)　泥流の砂に暗褐色土が混入。崩落。
5　黒褐色土(2.5Y3/1)　砂質。暗褐色土に多量の砂が入る。
6　暗灰黄色砂(2.5Y5/2)　榛名二ツ岳火砕流堆積物の一部。

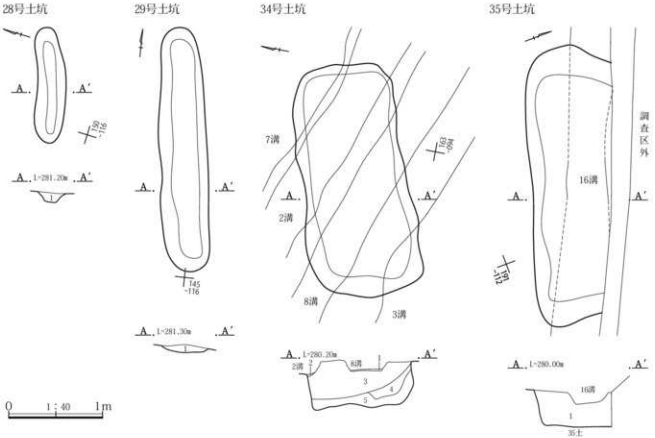
(15号土坑)
1　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　径２～10mmの礫(軽石？)多量に入る。
　径20～50mmの礫が目立つ。やや砂質。褐色、橙色粒子が少し入る。
2　暗褐色土(10YR3/3)　径２～３mmほどの粒子(褐色)が少し入る。
　砂質。黄褐色砂を多量に含む。
3　灰黄色砂(2.5Y6/2)　砂が多量に層状に入る。
4　にぶい黄色砂(2.5Y6/4)　ローム(シルト)のように微細粒子。榛名二ツ岳火砕流堆積物の一部。

27号土坑

(27号土坑)
1　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　にぶい黄色砂が多量に混入し、部分的にブロック状を呈する。基本土層の１層に似る。

0　1:40　1m

第18図　１区南14～16・20・21・24・27号土坑



(28号土坑)
1　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　にぶい黄色砂が多量に混入し、部分的にブロック状を呈する。基本土層の１層に似る。27号土坑の１層と同じだが、混入した砂がより多い。

(29号土坑)
1　黒褐色土(2.5Y3/2)　砂質。にぶい黄色砂がブロック状に見られる。礫、粒子などの混入物がとても少ない。

(35号土坑)
1　黒褐色土(2.5Y3/2)　褐色粒子が多く見られる。径２～５㎜ほどの礫(軽石？)が多量に入る。

(34号土坑)
1　暗褐色土(10YR3/4)　黄色、褐色粒子目立つ。ブロック状ににぶい黄色砂が混入。
2　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　褐色粒子少し(わずか)。基本土層の１層に似る。
3　暗褐色土(10YR3/3)　ブロック状に黄褐色砂が少し入る。径２～５㎜の小礫が含まれる。褐色、橙色粒子が少し含まれる。
4　にぶい黄褐色砂(10YR4/3)　にぶい黄色砂に暗褐色土が混じる。崩落。
5　にぶい黄色砂(2.5Y6/4)　榛名二ツ岳火砕流堆積物の一部。

第19図　１区南28・29・34・35号土坑

６．円形・楕円形・方形の土坑群

（第17・18・20・21図、PL.６～８）

概要　本項では１区の土坑のうち、上述の７号土坑と後述の４号土坑を除く円形、楕円形、方形プランの土坑について記載する。これらの土坑は上述の短冊形、長方形プランの土坑群と異なり、小型で、プランの縦横比が小さい。

位置　１区南地区の北西部に18号土坑、中北部に30・31・32・33号土坑、中・南部に20・22・23・25・26号土坑が分布している。

表４に所在グリッドを記した。

規模・主軸方位　〔規模〕長径：0.68～1.17m

（平均：0.8613m）

短径：0.52～1.10m（平均：0.8067m）

深さ：0.05～0.43m（平均：0.18m）

なお、個々の土坑の規模と主軸方位は表４に記している。

重複　本土坑群のうち18号土坑は13号土坑と、33号土坑は５号溝と重複するが、他の土坑は単独であり、他遺構との重複関係はなかった。

このうち18号土坑は13号土坑より新しく、33号土坑と５号溝の新旧関係は特定できなかったが、覆土の比較から本土坑の方が古いものと判断される。

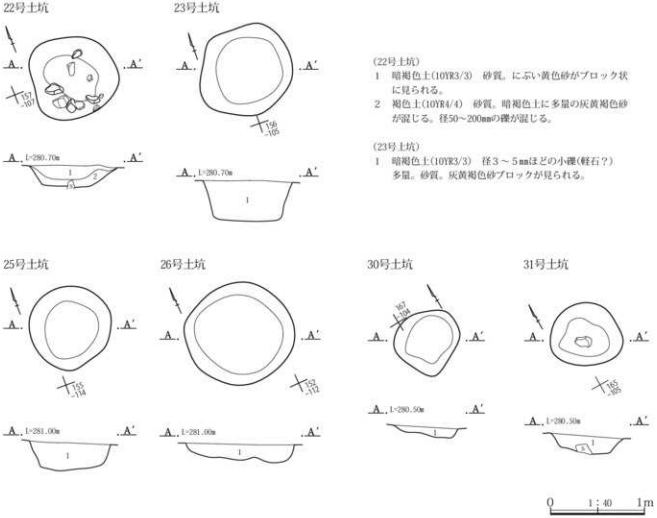
覆土　個々の土坑の覆土は、各遺構図に記入した土層注記を参照願いたいが、主たる覆土で見ると、18号土坑は表土層に近い暗灰黄色土で埋没しているが、23・25号土坑は暗褐色土で埋没し、26・33号土坑は黒褐色土、30～32号土坑は灰黄褐色土で埋没するものの黒褐色土が入る。

構造　本土坑群の土坑のプランは、18・30・33号土坑は方形、25・26号土坑は円形、20・22・23・31・32号土坑は楕円形を呈していた。掘削形態はいずれも箱状で、掘削底面はおおむね平底を呈していた。

遺物　いずれの土坑からも出土遺物は得られなかった。

所見　本土坑群からの出土遺物はなく、時期特定には至らなかった。なお、土層記録からは、18号土坑は中近世、26・30～33号土坑は中世、22・23・25号土坑は古代以降の所産の可能性を有する。

また、本土坑群各土坑の掘削意図は特定できなかった。



(22号土坑)
1　暗褐色土(10YR3/3)　砂質。にぶい黄色砂がブロック状に見られる。
2　褐色土(10YR4/4)　砂質。暗褐色土に多量の灰黄褐色砂が混じる。径50～200mmの礫が混じる。

(23号土坑)
1　暗褐色土(10YR3/3)　径３～５mmほどの小礫(軽石？)多量。砂質。灰黄褐色砂ブロックが見られる。

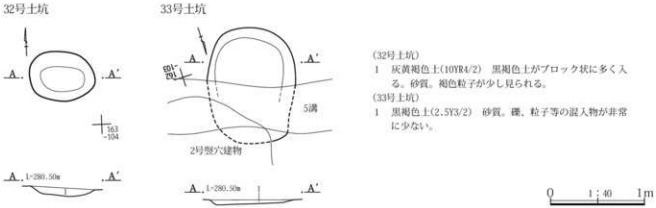
(25号土坑)
1　暗褐色土(10YR3/3)　径４～15mmほどの小礫が多く見られる。暗灰黄褐色砂(泥炭)がブロック状に入る。上面に黒褐色土(2.5Y3/2)が薄くのる。

(26号土坑)
1　黒褐色土(2.5Y3/1)　径５mmほどの小礫(軽石)を多量に含む。砂質。

(30号土坑)
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　黒褐色土がブロック状に多く入る。砂質。褐色粒子が少し見られる。

(31号土坑)
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　黒褐色土がブロック状に入る。下位に行くほど黄褐色が強くなる。やや砂質。褐色粒子が少し見られる。

第20図　１区南22・23・25・26・30・31号土坑



(32号土坑)
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　黒褐色土がブロック状に多く入る。砂質。褐色粒子が少し見られる。
(33号土坑)
1　黒褐色土(2.5Y3/2)　砂質。礫、粒子等の混入物が非常に少ない。

第21図　１区南32・33号土坑

７．10号土坑(第22図、PL.６)

概要　10号土坑は不整形なプランの土坑である。

位置　１区南地区の北西部、185～186－107～108グリッドに位置する。

規模・主軸方位　〔規模〕長径：1.85m　短径：1.19m
深さ：0.34m
〔主軸方位〕N41°E

重複　本土坑は単独であり、他遺構との重複はなかった。

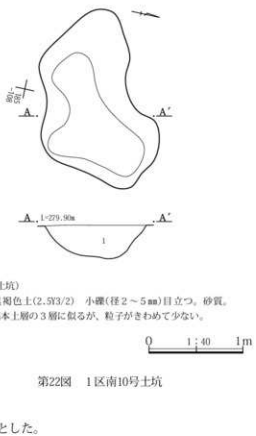
覆土　本土坑は、黒褐色土等で埋没する。

構造　本土坑は南側がN63°E、北側がN26°Eに軸線方向を取る土坑が接続したような、羽形のプランを呈する。掘削形態は船形を呈し、屈曲部の底面が南東方向に突出する。

遺物　出土遺物は得られなかった。

所見　本土坑からの出土遺物はなく、時期は特定できなかったが、土層記録から推して、おおむね中世の所産と想定される。

また、本土坑の掘削意図は特定できなかった。



(10号土坑)
1　黒褐色土(2.5Y3/2)　小礫(径２～５mm)目立つ。砂質。
基本土層の３層に似るが、粒子がきわめて少ない。

第22図　１区南10号土坑

８．４・37号土坑と１・２号谷
(第23・24図、PL.５・９)

概要　東側の２号谷とその谷頭に掘削された４号土坑、西側の１号谷とその谷頭に37号土坑は、左右対称の配置を見せており、一連の遺構群と拝察せられる。

なお、１号谷は当初竪穴建物(１号住居)として調査に着手したが、掘削の結果、谷であることを確認したため、竪穴建物(竪穴住居)としての遺構番号は欠番として処理することとした。

位置　１号谷は194～200－103～113グリッド、２号谷は187～193－092～095グリッドに位置する。４・37号土坑は表４に所在グリッドを記した。

規模・主軸方位　１号谷の確認範囲は東西10.8m、南北5.8mを測り、確認範囲の最深高は1.53mである。主軸方位はN81°Eであるが、谷頭近くの3.7mの範囲では時計回りに屈曲してN33°Wを向く。

２号谷の確認範囲は東西3.1m、南北3.3mを測り、確認範囲での最深高は1.1mである。主軸方位はN68°Wである。

４・37号土坑の規模、主軸方位は表４に記した。

重複　上述のように１号谷は37号土坑、２号谷は４号土坑と重複するが、断面観察では37号土坑は１号谷より新しい可能性があり、４号土坑は２号谷の埋没と連動しているようにも見受けられるものの、両者ともに新旧関係は特定できなかった。なお、これ以外の遺構との重複は見られなかった。

覆土　37号土坑の覆土下位には灰黄色砂層が堆積するが、１号谷の埋没層の上位にはAs-Kkが確認されるものの、最下層は二ツ岳火砕流堆積物主体の土で覆われる。４号土坑と２号谷では、埋没層の上位にはAs-Kkが確認されるものの、最下層は共に二ツ岳火砕流堆積物主体の土で覆われている。

構造　１号谷は堀状に湾入し、その形態から推して人為的掘削の可能性も考慮される。また、先端部は屈曲して堀状に延びる。２号谷は一部を確認したに過ぎないが、全体的形状も、堀状に湾入するような形状を呈しているように見受けられる。

１・２号谷共に谷頭には４・37号土坑が掘削されているが、４・37号土坑は共に確認面からは0.4mほどの深さでしかないが、谷頭を鋭角に落とす効果を有している。

４号土坑と37号土坑の間隔6.2mを測るが、４・37号土坑のプランは、楕円形を呈する。掘削形態は箱状である。掘削底面は平底を呈する。

遺物　37号土坑からは古墳時代以降の土師器甕片１点、１号谷からは平安時代のものと思われる土師器甕片１点が出土したに過ぎない。また、４号土坑と２号谷からの出土遺物は得られなかった。

所見　出土遺物から推して、37号土坑は古墳時代以降、１号谷は平安時代以降からの所産と判断される。遺構の位置関係から４・37号土坑と１・２号谷は同時期の所産と想定されるため、一連の遺構は平安時代頃の所産と想定される。また、４号土坑と37号土坑との間隔は6.2mを測り、１号谷の先端が東側に延びるようにあり、これを人為的と解釈するならば、一連の遺構によって土地の幅員は減ぜられ、南北方向の通行を抑制する効果があり、谷頭の土坑の掘削により、谷からの侵入も抑制する効果があったものと思慮される。

９．ピット(第25・26図、PL.10)

概要　本項では柱穴状のピットについて報告する。

なお、15～18号ピットについては、１号柵として上述のように報告した。

位置　１区では１区北地区に１・２号ピットがあり、１区南地区の北西部に４・５・６・７・８・９号ピット、中部に11・12・14号ピット、南部に３・10・13号ピットがある。表５に所在グリッドを記した。

規模・主軸方位　径は0.30～0.64m(平均0.4121m)

深さ0.14～0.35m(平均0.2107m)

個々のピットの規模等については表５に記した。

重複　本ピット群の各ピットは単独にあり、他の遺構との重複関係は見られなかった。

覆土　個々のピットの覆土は、各遺構図に記入した土層注記を参照願いたいが、主たる覆土で見ると、９・12～14号ピットは黒褐色土、他のピットは二ツ岳火砕流起源の土壌あるいは砂で埋没している。

構造　本ピット群のピットのプランは、１・２号ピットは不整形、３・４・11号ピットが円形、５～10・12～14号ピットは楕円形を呈する。掘削形態は、１・８号ピットは杭状を呈するが、他のピットは柱穴状を呈する。また掘削底面は、１・８号ピットは尖底、２・４・９・12～14号ピットは丸底を呈し、３・５～７・10・11号ピットは平底を呈する。

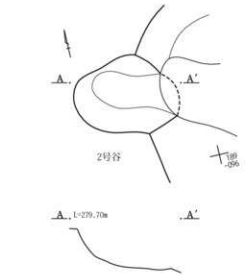
遺物　出土遺物は得られなかった。

所見　本ピット群の各ピットからの出土遺物はなく、時期は特定できなかったが、覆土の状態から３・９・11～14号ピットはおおむね中世、他のピットは古代から中世の所産と想定されるに過ぎない。

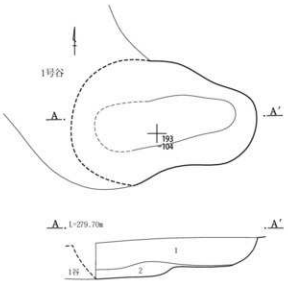
10．11号溝(第27図、PL.11)

概要　11号溝は東側が調査区外にあり、１区南において限定的な範囲で調査できたに過ぎなかったため、全容はつまびらかでない。また、西側が２区に現れているが、調査段階で新しい遺構と判断したため、詳細な調査は行われなかったのではあるが、この２区の部分も併せて報告する。

４号土坑



37号土坑



(37号土坑)１区
1　黒褐色土(2.5Y3/2)　径３～５mmほどの黄色軽石を少し含む。径30～50mmの礫が少し入る。褐色粒子がわずかに入る。
2　灰黄色砂層(2.5Y6/2)　径20～50mmの礫が多量に入る。水性堆積か。

0　1:40　1m

第23図　１区北４・37号土坑

位置　１区南地区の南端から、２区南東隅部にかけてある。127－133～138グリッドに位置する。

規模・主軸方位　〔規模〕長さ：4.9m（１区南：1.88m、２区：2.6m）　幅：0.3m（１区南、２区：0.6m）
　深さ：0.08m（１区南）
〔主軸方位〕N83°W

重複　本溝は単独であり、他遺構との重複はなかった。

覆土　黒褐色土の入る暗灰黄色砂質土で埋没する。

構造　本溝は直線的な走行を取る。掘削形態は箱堀状を呈し、底面は平底を呈する。また勾配はほとんどなかった。

遺物　出土遺物は得られなかった。

所見　本溝からの出土遺物はなく、時期は特定できなかったが、土層記録推して、おおむね中近世の所産と想定される。
　また、本溝は直線的に掘削されているため、土地区画に供されたものと想定されるが、明確な掘削意図は特定できなかった。

11.　16号溝(第27図、PL.11・24)

概要　16号溝は東西両側と北縁側が調査区外に出ているため、全容はつまびらかでない。

位置　１区南地区の北端中・西部にある。186～193－100～116グリッドに位置する。

規模・主軸方位　〔規模〕長さ：17.2m　幅：(0.42m～0.70m以上)　深さ：0.16m
〔主軸方位〕N65°W

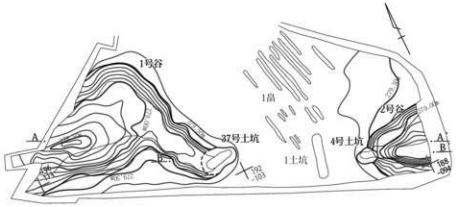
重複　本溝は９・35号土坑と重複するが、本溝は35号土坑より新しいが、９号土坑との新旧関係は特定できなかった。

覆土　多量の砂が入る暗灰黄色砂質土で埋没する。

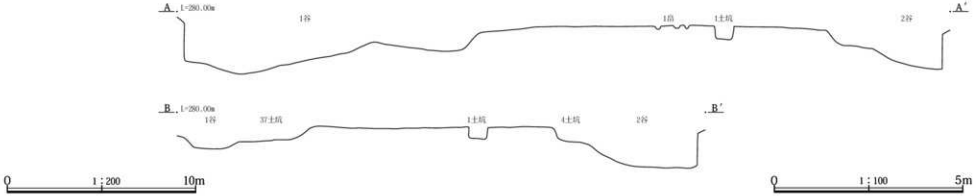
構造　本溝は直線的な走行を取る。掘削形態は箱堀状を呈し、底面は平底を呈し、勾配はほとんど見られない。

遺物　磁器瀬戸・美濃碗（１）が出土した。

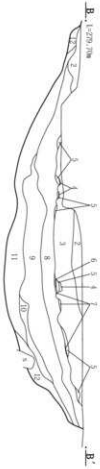
所見　出土遺物からは、近・現代の所産ということはできるが、これは破片であり流れ込みの可能性も残ることから、現時点では近世以降の所産と捉えたい。

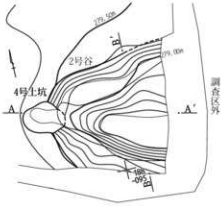


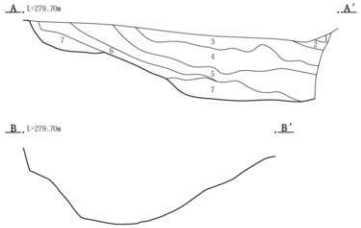
37号土坑・１号谷



4号土坑・２号谷

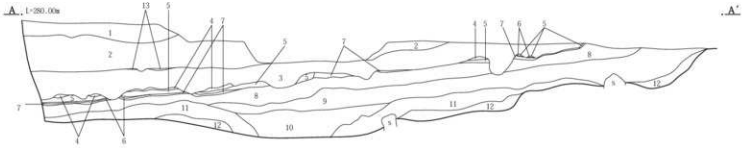






0 1:100 5m

0 1:50 2m



第24図　１区北４・37号土坑と１・２号谷

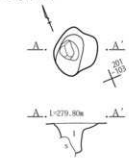
（４号土坑・２号谷）

1　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　表土。２層の軽石が多量に混入。
2　灰白色軽石(5Y7/1)　As-Ks。上面にわずかに灰色火山灰が見られる。
3　黒褐色土(2.5Y3/2)　褐色粒子が多く見られる。径３～５mmの軽石を含む。
4　暗褐色土(10YR3/3)　灰白（浅黄）色軽石が目立つ。径３～10mmの礫が多く混入。
5　褐色土(10YR4/4)　にぶい黄色の砂が多量に混入。砂質。砂はブロック状に固まっているところもある。
6　黒褐色土(10YR3/2)　径３～50mmの礫が目立つ。砂質。黒色土がブロック状に入るところもある。
7　黄褐色土(2.5Y5/4)　榛名二ツ岳火砕流堆積物の一部。部分的に暗褐色土が混入。

（１号谷）

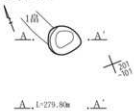
1　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　表土。
2　黒褐色土(10YR3/2)　径10～30mmの礫が少し入る。褐色・橙色・白色粒子が少し入る。砂(褐色)ブロックが少し見られる。
3　黒色土(2.5Y2/1)　径１～３mmの白(黄白)色粒子(As-Ksと考えられる)が多量に混じる。褐色砂(火山灰？)がブロック状に見られる。
4　灰色火山灰(7.5Y6/1)　As-Ksの火山灰。非常に粒子が細かく、青く見える。部分的には層厚15mm。
5　灰白色軽石(5Y7/1)　As-Ks軽石。径２～６mm程。部分的には層厚40mm。
6　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　砂質。As-KsとAc-Bの間の薄い間層。
7　にぶい黄色火山灰(2.5Y6/4)と灰黄色軽石(2.5Y6/2)　非常に細粒の火山灰(ローム状)とやや明るい色の径１～25mm程の軽石からなる。火山灰が上、軽石が下。As-Bの噴火に伴う火山灰と軽石。
8　黒褐色土(2.5Y3/2)　径10～50mm程の礫(軽石)を含む。褐色(白色)粒子を少し含む。
9　オリーブ褐色土(2.5Y4/3)　黄白色(白色)軽石(FP?)を少し含む。にぶい黄色砂のブロックが少し見られる。
10　黒褐色土(2.5Y3/1)　にぶい黄色砂のブロックが少し見られる。軽石が大きく目立つ。
11　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　黄褐色砂(火砕流堆積物の一部)が多く混入し部分的にブロック状を呈する。径３～５mm程の白色軽石が少し見られる。
12　黄褐色土(2.5Y5/6)　榛名二ツ岳火砕流堆積物の一部。非常に粒子が細かくローム(粘土)状。

1号ピット



（1号ピット）
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　小礫・褐色粒子が少し見られる。

2号ピット



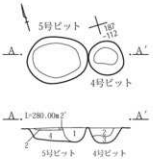
（2号ピット）
1　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　表土にぶい黄色砂(火砕流堆積物)がブロック状に混入している。
2　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　基本上層５層に似るが、混入物(粒子)がとても少ない。

3号ピット

（3号ピット）
1　黒褐色土(2.5Y3/2)　砂質。小礫(径５mm)がわずかに見られる。混入物がとても少ない。
2　黄褐色土(2.5Y5/3)　１層と３層が混じる。３層が多い。
3　にぶい黄色砂(2.5Y6/3)　榛名二ツ岳火砕流堆積物の一部。

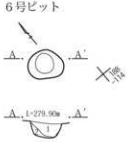
（6号ピット）
1　灰黄褐色土(10YR4/2)　砂質。褐色粒子が少し見られる。黄褐色砂がブロック状に入る。
2　黄色砂(2.5Y7/8)　榛名二ツ岳火砕流堆積物の一部。

4・5号ピット

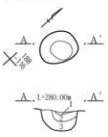


（4・5号ピット）
1　黒褐色土(2.5Y3/2)　砂質。褐色粒子がわずかに見られる。
2　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　砂質。黄褐色砂が混じり、部分的に黄色のブロック状に見える。
2′　黄褐色砂(2.5Y5/4)　４層の地山がブロック状に入っている。
3　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　とても粒子が細かい砂質。黄色の砂がブロック状に入る。基本上層の６層。
4　黄褐色砂(2.5Y5/4)　榛名二ツ岳火砕流堆積物の一部。

6号ピット

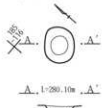


7号ピット



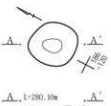
（7号ピット）
1　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　砂質。褐色粒子が見られる。黄色砂がブロック状に入る。基本上層の５層に似る。
2　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　砂質。黄色砂に黒褐色土が混じる。基本上層の６層。
3　黄色砂(2.5Y7/8)　榛名二ツ岳火砕流堆積物の一部。

8号ピット



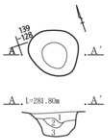
（8号ピット）
1　暗灰黄色砂(2.5Y4/2)　基本上層の６層。砂質。黄褐色砂に黒褐色が混じる(漸移層的な色、質)。

9号ピット



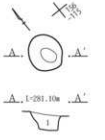
（9号ピット）
1　黒褐色土(2.5Y3/2)　砂質。褐色粒子が少し見られる。基本上層の３層に似るが、白色粒子(軽石)が目立たない。

10号ピット



（10号ピット）
1　暗褐色土(10YR3/3)　砂質。砂が多量に混入している。部分的に黄褐色砂がブロック状に入る。
2　にぶい黄色砂層(2.5Y6/3)　下層の砂層に暗褐色土が混じる。
3　暗灰黄色砂(2.5Y5/2)　榛名二ツ岳火砕流堆積物の一部。

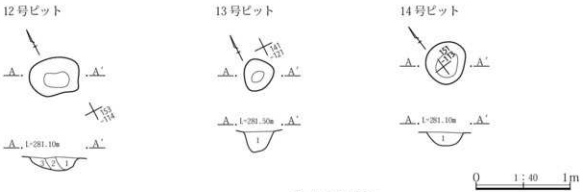
11号ピット



（11号ピット）
1　黒褐色土(2.5Y3/2)　砂質。小礫粒子など混入物がとても少ない。

0　1:40　1m

第25図　１区北１・２号ピット、１区南３～11号ピット



(12号ピット)
1　黒褐色土(2.5Y3/2)　褐色粒子が少し見られる。径２～５mmほどの礫が少し見られる。
2　暗褐色土(10YR3/3)　やや砂質。径２～５mmほどの礫が見られる。
3　褐色土(10YR4/4)　砂質。にぶい黄色砂が多量に入る。径２～３mmほどの小礫多量。

(13号ピット)
1　黒褐色土(2.5Y3/2)　砂質。粒子、礫などの混入が少ない。

(14号ピット)
1　黒褐色土(2.5Y3/2)　褐色粒子が少し見られる。径２～５mmほどの礫(軽石?)少し混入。

第26図　１区南12～14号ピット

また、本溝は砂を多く含むため、水が流れた可能性が考慮されるが、底面の高さから水路としての可能性は低い。また、直線的に掘削され、上述の１・２号谷に並走していることも含めて、土地区画に供された可能性が想定される。

12. 耕作遺構群(１～10・12～15号溝)

(第28図、PL.11・24)

概要　１～10・12～15号溝の14条の溝は、個別の遺構として調査し、溝の掘削位置と配置から推して、１～６・13号溝(以下「Ａ群」とする)と７～10・12・14・15号溝(以下Ｂ群とする)の２群の耕作遺構として把握される。このため､本項において一括の遺構群として報告する。

位置　〔Ａ群〕155～172－088～114グリッド
〔Ｂ群〕154～166－089～106グリッド
個々の溝の所在グリッドは表６に記した。

規模〔規模〕南北：16.6m　東西：26.7m
(Ａ群)南北：16.6m　東西：26.7m
(Ｂ群)南北：16.6m　東西：26.1m
〔長さ〕26.5m以下
〔幅〕0.27～0.82m(平均：0.6361m)
〔深さ〕0.02～0.24m(平均：0.1021m)
〔サク間〕(Ａ群)1.35～1.69m(平均：1.53m)
(Ｂ群)1.06～1.40m(平均：1.198m)
個々の溝の規模と主軸方位は表６に記した。

主軸方位　(Ａ群)N70°W
(Ｂ群)N72°W

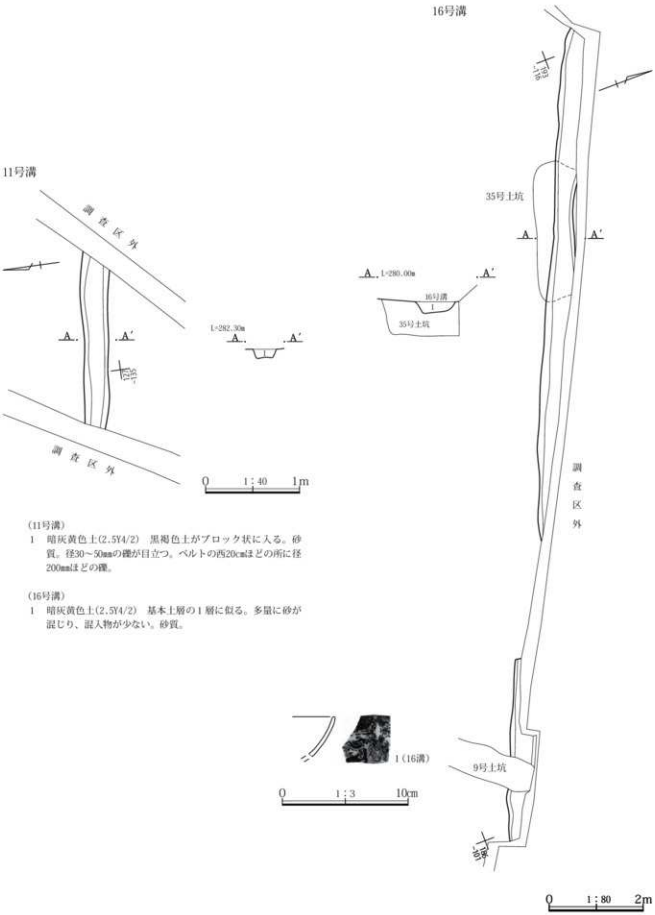
重複　本耕作遺構は２号竪穴建物、33・34号土坑と重複するが、いずれに対しても本遺構群の方が新しい。
また本遺構群のＡ・Ｂ群でも重複関係があるが、Ｂ群の方が新しい。

覆土　暗灰黄色土、黄褐色土、暗褐色土で覆われる。

構造　本耕作遺構を構成する各溝は、直積的な走行を呈し、箱堀状を呈する壁は鋭角に立ち上がるものと鈍角に立ち上がるものがある。壁面の立ち上がりは、概してＡ群は鋭角に立ち上がる傾向があり、Ｂ群は鈍角に立ち上がる傾向がある。また、掘削底面は平底を呈するものが多い。

遺物　６号溝からは陶器瀬戸・美濃すり鉢(１)、15号溝からは陶器瀬戸・美濃碗(２)が出土したが、他の溝からの出土遺物は得られなかった。

所見　本耕作遺構群の時期は特定できず、覆土の状態からＢ群はおおむね近世頃の所産と想定されるに過ぎなかった。また、重複関係からＡ群もおよそ、中近世の所産として把握されるに過ぎなかった。
また、Ｂ群は壁面がやや開く掘削形態から推して、畠として掘削されたものと思慮され、Ａ群は壁面が垂直に近いものが多いため、天地返しのために掘削された可能性が考慮される。
なお、Ａ・Ｂ両群ともに、一筆の畠地に掘削されたものである。



（11号溝）
1　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　黒褐色土がブロック状に入る。砂質。径30～50mmの礫が目立つ。ベルトの西20cmほどの所に径200mmほどの礫。

（16号溝）
1　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　基本土層の１層に似る。多量に砂が混じり、混入物が少ない。砂質。

第27図　１区南11・16号溝と出土遺物

13. １号畠(第29図、PL.12)

概要　本畑は１区北、１・２号谷の北側に広く分布する。サクが確認されたが、畝は確認されなかった。

しかし遺存状態は不良であり、全容はつまびらかにできなかった。

位置　191～209－096～104にグリッドに位置する。

規模　〔規模〕南北：17.9m　東西：8.4m

〔サク長さ〕0.25～4.5m(平均：0.7765m)

〔サク幅〕0.05～0.33m(平均：0.1600m)

〔サク深さ〕0.02～0.04m(平均：0.026m)

〔サク間〕0.2～0.43m(平均：0.3433m)

主軸方位　北部：N６°W　南部：N14°W

重複　本畠は１・２号ピットと重複する。１号ピットとの新旧関係は特定できなかったが、２号ピットの方が新しい。

覆土　サクは、表土層に似る暗灰黄色砂質土で覆われる。

構造　遺存状態が良くないので、全容はつまびらかでないが、サクの底面は平底を呈する。その分布と端部の並びの状態から推して、中・北部と南部のものは別区画の可能性がある。サクの幅は、中・北部は11～33cm、平均17.69cm、南部は５～26cm、平均12.82cmと中北部の方が僅かだが広いが、サクの間隔は中・北部は20～43cm、平均32.73cm、南部は22～45cm、平均33.3cmと大差ない。

遺物　出土遺物は得られなかった。

所見　本遺構の時期は、覆土の状態から近世以降の所産と想定されるに過ぎない。

また、１区は１区北側の調査区外の区画と合わせて一筆の区画であるが、上述のように南部と中・北部の畠は別区画の可能性がある。また、中・北部のサク群は、南東隅部と北西部が分離できる可能性を有する。

14. ２号畠(第29図、PL.12)

概要　本畑は１区南北西隅部に確認、調査された。畝は確認されなかった。

なお、遺存状態は不良であり、南北に分かれて部分的に残り、全容はつまびらかにできなかった。

位置　187～191－114～123にグリッドに位置する。

規模　〔規模〕南北：4.26m　東西：8.24m

〔サク長さ〕0.35～1.45m(平均：0.6244m)

〔サク幅〕0.07～0.22m(平均：0.1367m)

〔サク深さ〕0.02～0.06m(平均：0.0378m)

〔サク間〕0.25～0.58m(平均：0.3575m)

主軸方位　北部：N60°E　南部：N65°E

重複　本畠は単独であり、他遺構との重複は見られなかった。

覆土　サクは、表土層に似る暗灰黄色砂質土で覆われる。

構造　その分布は南北に分かれるが、遺存状態は不良なため全容はつまびらかでない。南北のサクの規格に大きな相違はなく、底面は平底を呈する。サクとサクの間隔は北側に対して南側(１箇所)は２倍であるが、その間隔は北側の平均35.75cmが基準になっていると思慮される。

遺物　出土遺物は得られなかった。

所見　本遺構の時期は、覆土の状態から近世以降の所産と想定されるに過ぎない。

15. ３号谷(第16図、PL.５)

概要　本谷は埋没谷である。

調査段階で６号土坑として調査を開始し、記録を取ったが、調査の進捗に伴って谷遺構として認識されたものであり、「谷３」としても記録されている。

本谷は谷頭にあたる部分が調査されたに過ぎず、全容をつまびらかにすることはできなかった。

位置　１区南171～173－092～094グリッドに位置する。

規模・主軸方位　〔確認範囲〕東西2.3m　南北2.6m

〔確認最深度〕0.85m

〔主軸方位〕(谷頭)N83°W　(谷本体)N53°W

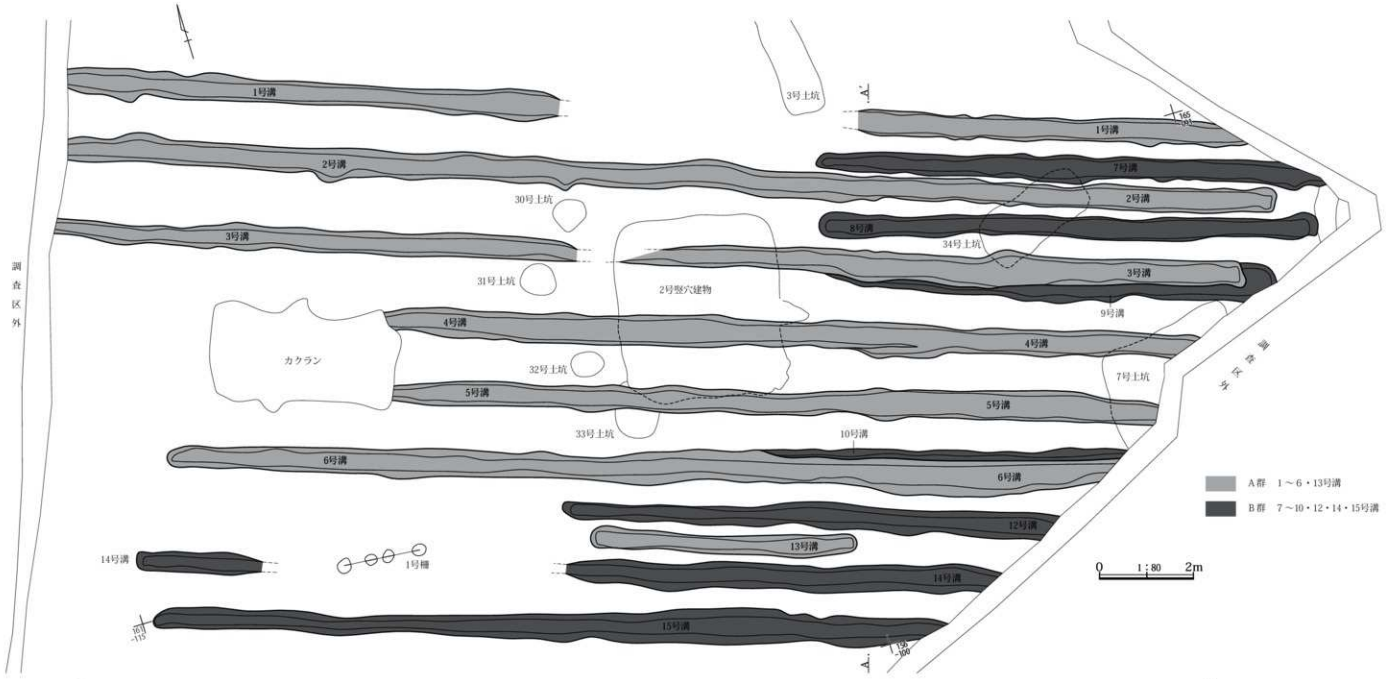
重複　本谷は５号土坑と重複するが、本谷の方が古い。

覆土　暗褐色土、黒褐色土で埋没し、その上にAs-Kkを多量に含む暗灰黄色土が堆積する。

構造　本谷は南東方向から堀状に湾入し、ほぼ西方方向に屈曲して1.7mほど延びて谷頭に達する。底面は平底場を呈し、調査区内ではおよそ278.95mほどの高さにある。

遺物　出土遺物は得られなかった。

所見　本谷の時期は特定できなかったが、土地の形成と覆土の状態から、古代にはあったものと判断され、中世初めには埋没がほぼ完了していたものと判断される。



1
(6溝A群耕作痕)

2
(15溝B群耕作痕)

0　1:3　10cm

(1～10・12・14・15号溝)

1　黄褐色土(2.5Y5/3)　2層より明るく褐色がかった色調。砂質。褐色粒子が少し混入。黄色・黄褐色の砂が混入。

2　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　径3～6mm程の礫(軽石？)が目立つ。褐色粒子が少し混入。ブロック状に黄色砂(火砕流堆積物)が入る。ブロック状に黒褐色土が入る。

3　黄褐色土(2.5Y5/4)　2層から4層の漸移層。

4　にぶい黄色砂(2.5Y6/3)　榛名二ツ岳火砕流堆積物の一部。

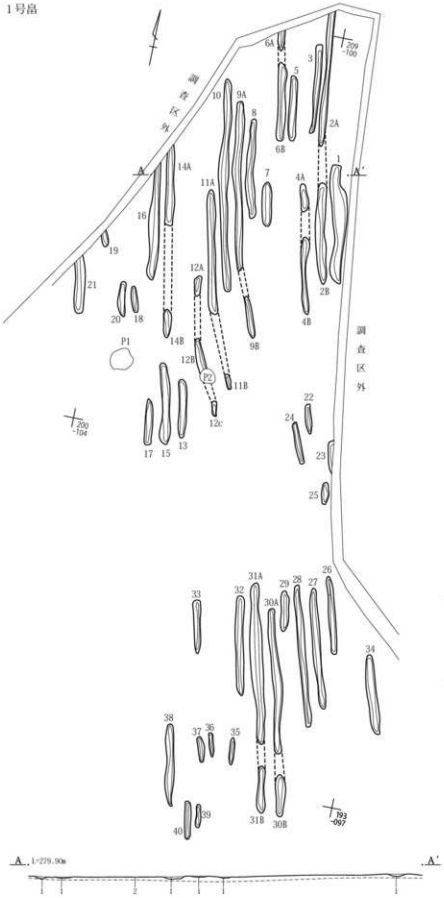
5　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　混入粒子少ない。砂質。にぶい黄色砂が多量に混じる。ブロック状の所もあり。基本土層の1層に似る。

6　暗褐色土(10YR3/3)　径2～4mm程の小礫(軽石？)混入。砂質。ところどころブロック状に黄褐色砂が入る。

第28図　1区南耕作遺構群(1～10・12～15号溝)と出土遺物

１号畠

２号畠



（１号畠）

１　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　砂質。基本土層１層に似る。混入粒子少ない。

２　黄褐色砂(2.5Y5/3)　棒名二ツ居火砕流堆積物の一部。部分的に粘土状。

（２号畠）

１　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　粒子等の混入が少ない。砂質。基本土層の１層に似る。

0　1:80　2m

0　1:40　1m

第29図　１区北１号畠、１区南２号畠

表４　１区土坑一覧　　寸法内（　）は残存値

番号	所在グリット	形状	長さ×幅×深さ(cm)	主軸方位
1	189～192 ― 098・099	隅丸短冊形	236×51×35	N 16°E
2	176～179 ― 095～097	短冊形	345×51×28	N 17°E
3	167～170 ― 107・108	短冊形	339×86×33	N 6°W
4	189・190 ― 096・097	短冊形	111×82×46	N 74°W
5	170～172―092・093	隅丸長方形	167×86×20	N 30°W
6	171～173―092～094		東西230×南北260×85	N 53°W
7	158～160 ― 091～094	隅丸長方形	292×(188)×25	N 80°E
8	182～186 ― 121	隅丸短冊形	299×85×60	N 2°E
9	185～187―101～103	隅丸短冊形	(297)×71×83	N 41°E
10	185・186―107・108	不整形	185×119×34	N 41°E
11	189・190―112・113	隅丸長方形	117×78×43	N 22°E
12	177～180―109・110	隅丸短冊形	271×90×25	N 7°E
13	178～181 ― 110・111	隅丸短冊形	240×71×21	N 8°E
14	175～177―112～114	隅丸短冊形	244×104×27	N 14°E
15	139～142―124・125	隅丸短冊形	309×90×67	N 19°E
16	141～144―126～128	隅丸短冊形	327×89×11	N 16°E
17	182～184―121	隅丸長方形	188×91×55	N 2°E
18	180―110・111	方形	72×72×５	N 10°E
19	183・184―121・122	隅丸長方形	135×44×５	N 25°W
20	157・158―111	楕円形	109×73×12	N 12°E
21	156～158―110・111	隅丸短冊形	174×54×45	N 13°E
22	156・157―105・106	楕円形	95×93×22	N 32°W
23	156・157―104・105	楕円形	103×92×43	N 82°E
24	154～156―102・103	隅丸長方形	164×57×18	N 22°E
25	155―102・103	円形	88×84×31	N 0°
26	152・153―111・112	円形	117×114×19	N 0°
27	152・153―109・110	隅丸長方形	83×27×14	N 77°E
28	150―115・116	溝状	123×31×10	N 71°E
29	145～147―115・116	溝状	257×51×８	N 9°W
30	166―103・104	方形	68×62×10	N 59°E
31	165―104・105	楕円形	76×67×18	N 42°W
32	163―104	楕円形	70×52×８	N 84°W
33	161・162―103・104	方形	(61)×94×６	N 19°E
34	162～164―093～095	長方形	249×122×53	N 71°E
35	191・192―111～113	長方形	298×(92)×36	N 79°W
37	192・193―102～104	短冊形	(196)×(133)×40	N 87°W

表３　１区南１号柵ピット一覧　　寸法内（　）は残存値

番号	所在グリット	形状	長さ×幅×深さ(cm)	主軸方位
P 1	160 ― 108・109	楕円形	長31×25×５	N 84°W
P 2	160 ― 109	楕円形	29×22×６	N 46°E
P 3	160・161 ― 109・110	隅丸方形	25×22×９	N 69°E
P 4	160・161 ― 110	隅丸方形	34×30×10	N 33°E

表５　１区ピット一覧　　寸法内（　）は残存値

番号	所在グリット	形状	長さ×幅×深さ(cm)	主軸方位
1	201―103	不整形	47×42×30	N 47°E
2	201―101	不整形	35×30×18	N 46°W
3	135・136―126	円形	45×43×35	N 0°
4	186―111・112	円形	38×37×16	N 0°
5	186・187―113	楕円形	64×49×23	N 73°W
6	188―114	楕円形	39×30×15	N 50°W
7	188―115	楕円形	40×33×20	N 15°E
8	184―115	楕円形	38×32×27	N 49°E
9	186―119・120	楕円形	52×46×22	N 28°E
10	138・139―127	楕円形	52×46×22	N 67°W
11	155―115	円形	40×38×16	N 0°
12	153―113・114	楕円形	52×39×15	N 63°W
13	140―121	楕円形	35×31×22	N 45°W
14	150・151―112・113	楕円形	45×41×14	N 37°E

表６　１区溝一覧　　寸法内〔　〕は推定値

番号	所在グリット	規模(m)			主軸方位
		検出長さ	最大幅	最大深さ	
1	163～172―089～113	[24.78]	0.70	0.21	N70°W
1西	168～172―103～113	10.67	0.70	0.17	N70°W
1東	163～167―089～097	8.32	0.59	0.21	N71°W
2	162～171―089～113	25.59	0.71	0.24	N71°W
3	161～169―090～114	[25.14]	0.77	0.24	N71°W
3西	165～169―103～114	11.36	0.58	0.08	N70°W
3東	161～165―090～103	13.48	0.77	0.24	N72°W
4	160～165―091～108	16.93	0.76	0.16	N71°W
5	158～164―093～108	16.21	0.69	0.20	N72°W
6	157～164―094～113	20.00	0.77	0.15	N73°W
7	162～166―088～098	10.68	0.60	0.18	N72°W
8	161～165―088～098	10.57	0.56	0.20	N73°W
9	160～165―089～104	9.58	0.82	0.16	N71°W
10	158～160―094～101	7.76	0.27以上	0.09	N73°W
11	127―133～138	1.88	0.30	0.08	N83°W
12	157～160―100～105	10.31	0.58	0.10	N70°W
13	158～160―100～105	5.65	0.50	0.07	N72°W
14	156～162―097～114	[18.06]	0.62	0.11	N71°W
14西	161・162―111～114	3.30	0.49	0.06	N70°W
14東	156～159―097～106	9.30	0.62	0.11	N71°W
15	155～161―098～114	16.52	0.77	0.12	N73°W
16	186～193―100～116	17.20	0.70以上	0.16	N65°W

表７　１区南A群耕作痕(１～６・13溝)サク間一覧

サク間番号	サク間(cm)	位置
1	135	1－2 溝間西部
2	169	2－3 溝間西部
3	169	3－4 溝間西部
4	148	4－5 溝間西部
5	148	5－6 溝間西部
6	144	1－2 溝間東部
7	161	2－3 溝間東部
8	152	3－4 溝間東部
9	137	4－5 溝間東部
10	133	5－6 溝間東部
11	142	6－13溝間

表８　１区南B群耕作痕(７～10・12・14・15溝)サク間一覧

サク間番号	サク間(cm)	位置
1	140	7－8 溝間西部
2	106	8－9 溝間西部
3	127	12－14溝間西部
4	121	14－15溝間西部
5	119	7－8 溝間東部
6	113	8－9 溝間東部
7	125	10－12溝間東部
8	127	12－14溝間東部
9	113	14－15溝間東部

表９　１区北１号畠サク一覧　　寸法内（　）は残存値

サク番号	所在グリット	長さ×幅×深さ(cm)	主軸方位
1	203～206－109	250×32×2	N13°W
２A	206～209－109・100	(285)×16×3	N12°W
２B	203～205－109	(214)×22×1	N８°W
3	206～208－100	188×14×3	N８°W
４A	205－100	58×17×2	N17°W
４B	203・204－109	165×17×5	N13°W
5	206・207－100	137×16×2	N10°W
６A	208－101	(43)×14×2	N９°W
６B	206～208－101・102	166×18×3	N10°W
7	204・205－100	93×20×3	N12°W
8	204～206－101	209×19×3	N10°W
９A	203～207－101	359×19×2	N12°W
９B	202・203－100	90×13×3	N22°W
10	203～207－101・102	448×22×1	N11°W
11A	202～205－101・102	264×18×2	N12°W
11B	201－100	32×10×2	N26°W
12A	203－101	43×15×3	N12°W
12B	201・202－101	(67)×18×1	N27°W
12C	201・101	32×10×2	N15°W
13	200・201－101	124×16×2	N11°W
14A	204～206－102・103	(165)×19×2	N10°W
14B	202・102	61×16×4	N10°W
15	199～201－101・102	172×22×3	N14°W
16	203～205－102・103	(241)×22×2	N10°W
17	199・200－102	97×16×2	N７°W
18	202－103	56×13×3	N19°W
19	203－104	(30)×14×4	N22°W
20	202－103	75×15×3	N９°W
21	202・203－104	(117)×21×1	N11°W
22	200・201－099	63×13×2	N16°W
23	200－098	(69)×(12)×4	N14°W
24	200－099	89×13×3	N23°W
25	199－098	46×16×2	N８°W
26	196・197－097・098	166×15×3	N16°W
27	195～197－097・098	256×17×2	N16°W
28	194～197－097・098	300×16×3	N16°W
29	196・197－098	85×17×1	N10°W
30A	193～196－098・099	307×20×5	N14°W
30B	192・193－098	90×22×3	N13°W
31A	194～197－098・099	344×26×2	N13°W
31B	192・193－098	100×19×1	N12°W
32	194～196－099	211×16×4	N11°W
33	195・196－100	114×16×1	N14°W
34	194～196－096	170×20×1	N19°W
35	193・194－099	58×10×1	N５°W
36	193・194－099	51×9×1	N17°W
37	193－099・100	54×14×1	N19°W
38	192～194－100	174×19×1	N12°W
39	192－099	49×10×6	N10°W
40	191・192－099・100	81×13×3	N10°W

表10　１区北１号畠サク間一覧

サク間番号	サク間(ｃｍ)	位置
1	20	２A－３間
2	43	３－５間
3	24	５－６B間
4	28	８－９A間北部
5	27	９A－10間
6	37	１－２B間北部
7	35	２B－４A間
8	33	７－８間
9	26	８－９A間中部
10	32	９A－10間中部
11	27	10-11A間北部
12	28	１－２B間南部
13	41	２B－４B間
14	38	８－９A間南部
15	33	10-11A間南部
16	30	11A－12A間
17	36	13-15間
18	35	15-17間
19	38	26-27間
20	33	27-28間
21	30	28-29間
22	29	29-30A間
23	35	30A－31A間
24	32	31A－32間
25	43	30B－31B間
26	23	39-40間
27	37	40-38間

第３節　２区の遺構と遺物

１．２区の遺構(第30～36図、PL.13～16・24)

本節では、平成29年度調査区域のうち「２区」の遺構、遺物について報告する。

２区は東側を１区南(地区)に接するが、北側が１区北(地区)との間で約20m間、大きく削平されていたため、調査することができなかった。

また、２区は北西部が、50～60cmの比高差を以て一段落ちており、上位面では区の中央やや南西寄りに径4.5mの範囲に、30～40cmほどの高さで高まる部分がある。

２区では９基の土坑が散在し、区北寄りに１基、南部に２基のピットが残されている。また、調査区西壁に沿うように、その中部から南部にかけて１条の大溝が掘削されている。区北部と中北部に、新しい時期の所産と認識される、ほぼ東西走行のサクからなる耕作痕が残る。

２．長方形の土坑群(第31図、PL.13・14・24)

概要　本項では、２区の土坑のうち、長方形プランを呈する６基の土坑、すなわち52・56～60号土坑について記す。

位置　２区北部に58・59・60号土坑、２区中東部に57号土坑、中部に56号土坑、南部に52号土坑が分布する。表11に所在グリッドを記した。

規模・主軸方位　〔規模〕長径：1.14～2.4m(平均：1.875m)

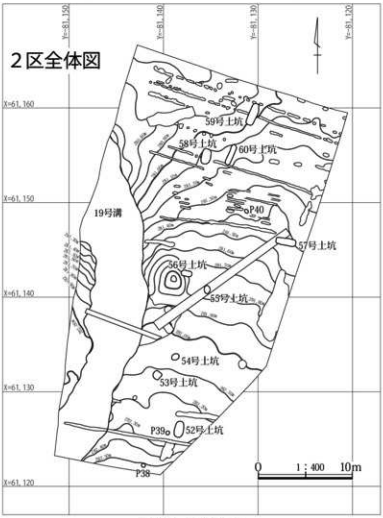
短径：0.58～0.97m(平均：0.7933m)

深さ：0.15～0.82m(平均：0.4937m)

〔主軸方位〕57号土坑がほぼ東西方向に向ける他は、いずれもほぼ南北方向に主軸を向けている。

なお、個々の土坑の規模と主軸方位は表11に記した。

重複　本土坑群の土坑のうち58～60号土坑は、上述の耕作痕に切られるが、52・56・57号土坑は他遺構との重複関係はなかった。



第30図　２区全体図

覆土　個々の土坑の覆土は、各遺構図に記入した土層注記を参照願いたいが、52号土坑が暗褐色土で埋没している他は、黒褐色土を含む土壌で埋没する傾向が見受けられた。

構造　本土坑群の土坑のプランは、57・59・60号土坑は隅丸の短冊形、52・56・58号土坑は隅丸の長方形を呈する。

また、掘削形態はいずれも箱状で、掘削底面は平底を呈していた。

なお、56号土坑は他の土坑に比して規模が小さい。

遺物　本土坑群からの出土遺物は60号土坑から陶器瀬戸・美濃碗(１)が得られたに過ぎなかった。

所見　出土遺物もなく、本土坑群各土坑の時期を特定するには至らなかった。埋土は中世以前の傾向を示すが、掘削形態からは中・近世の所産である可能性が考慮される。

また、本土坑群各土坑は、掘削形態から貯蔵穴と推定することができる。

３．楕円形・方形の土坑群

（第32図、PL.14）

概要　本項では楕円形、方形プランの３基の土坑、すなわち53～55号土坑について記す。

位置　これらの土坑は２区中南部に位置する。

表11に所在グリッドを記した。

規模・主軸方位　〔規模〕径：0.63～0.86m（平均：0.785m）

深さ：0.29～0.40m（平均：0.3267m）

なお、個々の土坑の規模と主軸方位は表11に記した。

重複　本土坑群の土坑はいずれも単独であり、他遺構との重複関係は見られなかった。

覆土　個々の土坑の覆土は、各遺構図に記入した土層注記を参照願いたいが、いずれも黒色土を含んでいる。

構造　本土坑群の土坑のプランは、53号土坑は方形、54・55号土坑は楕円形を呈する。掘削形態は53号土坑は箱状で掘削底面はおおむね平底を呈し、54・55号土坑は丸底場の掘削形態を呈する。

遺物　本土坑群各土坑からの出土遺物は得られなかった。

所見　本土坑群各土坑の時期を特定するには至らなかった。覆土の状態からは中世以前の所産の可能性が考慮される。

また、各土坑の掘削意図は想定されなかった。

４．ピット（第33図、PL.14）

概要　本項では柱穴状のピットについて報告する。

位置　２区では区中北部で40号ピットがあり、区南端近くに38・39号ピットがある。

各ピットの所在グリッドは表12に記した。

規模・主軸方位　径は0.38～0.47m（平均：0.425m）

深さ　0.15～0.33m（平均：0.25m）

個々のピットの規模等については表12に記した。

重複　本ピット群の各ピットは単独にあったが、40号ピットは新しい耕作痕の範囲内にあるものの、重複関係は見られなかった。またいずれのピットも他の遺構との重複関係は見られなかった。

覆土　個々のピットの覆土は、各遺構図に記入した土層注記を参照願いたいが、全体としてはいずれのピットも黒褐色土で埋没している。

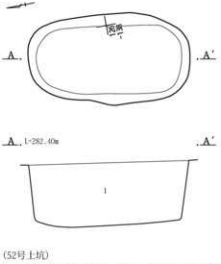
構造　本ピット群のピットのプランいずれも楕円形を呈し、掘削底面は38・39号ピットは丸底、40号ピットは平底を呈する。

遺物　出土遺物は得られなかった。

所見　本ピット群の各ピットからの出土遺物もなく、時期は特定できなかったが、覆土の状態から中世以前の所産の可能性が考慮される。

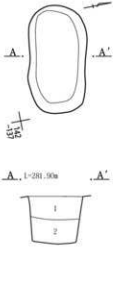
２区を東から望む

52号土坑



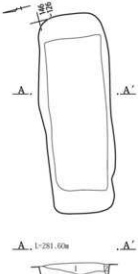
(52号土坑)
1　暗褐色土(10YR3/4)　径２～５㎜の軽石少量含む。
　径10～70㎜の礫少量含む。

56号土坑



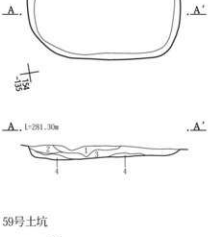
(56号土坑)
1　暗褐色土(10YR3/3)　径２㎜以下の黄橙色軽石多量に含む。
2　黒褐色土(10YR2/2)　径１～10㎜の軽石多量に含む。径100㎜
　の礫１つ含む。

57号土坑



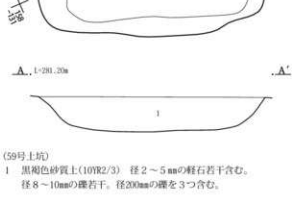
(57号土坑)
1　黒褐色土(10YR2/2)　径２～５㎜の軽石若干。径10～20㎜の礫若干含む。
2　地山の２次堆積。
3　黒褐色土(10YR2/2)　径２～10㎜の軽石多量に含む。
4　地山の２次堆積。
5　暗褐色砂礫層(10YR3/3)　径５～20㎜の礫少量含む。粒状の軽石若干含む。
6　暗褐色砂礫層(10YR3/3)　径300㎜大の礫大量に含む。小さい礫はほぼ無し。砂層に近い。

58号土坑



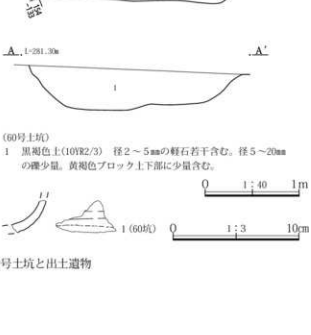
(58号土坑)
1　黒褐色土(10YR3/2)　耕作痕の掘り込み。径２～10㎜の軽石若干含む。径200㎜ほどの礫含む。
　径10～50㎜の礫多量に含む。
2　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　地山の２次堆積。
3　黒褐色土(10YR2/2)　径２～10㎜の軽石多量に含む。小礫若干含む。
4　黄褐色砂質土(10YR5/6)　地山。

59号土坑



(59号土坑)
1　黒褐色砂質土(10YR2/3)　径２～５㎜の軽石若干含む。
　径８～10㎜の礫若干。径200㎜の礫を３つ含む。

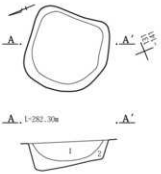
60号土坑



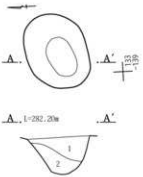
(60号土坑)
1　黒褐色土(10YR2/3)　径２～５㎜の軽石若干含む。径５～20㎜
　の礫少量。黄褐色ブロック上下部に少量含む。

第31図　２区52・56～60号土坑と出土遺物

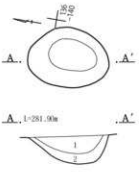
53号土坑



54号土坑



55号土坑



0　1：40　1m

（53号土坑）
1　黒褐色砂質土(10YR2/2)　径50mmの礫１つ含む。
　　黄橙色粒若干含む。
2　暗褐色砂質土(10YR3/3)　径５～10mmの礫若干含む。
　　地山の２次堆積。

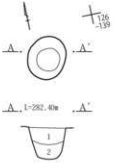
（54号土坑）
1　黒褐色土(10YR2/2)　径２～５mmの軽石少量含む。
　　径50mmの礫若干含む。
2　黄褐色砂礫層(10YR5/6)　径２～５mmの軽石多量
　　に含む。

（55号土坑）
1　黒褐色土(10YR2/2)　径２～５mmの軽石少量含む。
2　暗褐色砂質土(10YR3/3)　径２～10mmの礫少量含む。

第32図　２区53～55号土坑

38号ピット

39号ピット



40号ピット

0　1：40　1m

（38号ピット）
1　黒褐色土(10YR2/2)　径５～10mmの礫若干含む。
　　砂ブロック若干含む。

（39号ピット）
1　黒褐色土(10YR3/2)　径２～10mmの軽石少量含む。
　　径５～10mmの礫若干含む。
2　黄褐色砂質土(10YR5/6)　黒色土混じり。地山の
　　２次堆積。

（40号ピット）
1　黒褐色砂質土(10YR2/3)　径50mmほどの礫若干含む。
　　黄橙粒若干含む。

第33図　２区38～40号ピット

５．19号溝(第34図、PL.15・24)

概要　本溝は弧状に走行する大型の溝遺構である。

南北端共に調査区外に出ていて、全容はつまびらかでない。

また、南西接する３区に現れていない。

位置　本溝は２区南西部にあり、122～156－141～151グリッドに位置する。

規模・主軸方位　〔規模〕確認長：29.2m　幅：3.8～6.2～11.6m以上　深さ：0.4～2.23m

〔主軸方位〕N33°W～ N36°E

重複　本溝は単独であり、他遺構との重複は見られなかった。

覆土　黒褐色土等で埋没し、上位に粕川テフラ(As-Kk)が堆積する。

構造　本溝はほぼ南南西方向から調査区へ入り、弱く東に膨らむ弧状の走行を取って北行し、北西方向調査区外に出ている。

箱堀状の掘削形態を呈し、溝の幅員の過半は3.8～6.2mの範囲に収まる。底面は平底状を呈するが、北側に向かう傾斜見られ、調査区の中ほどで30cmほどの段差が設けられて北側が低くなる。この段差を境に、南側の勾配率は5.98%、北側の勾配率は11.1%を測る。

遺物　本溝からは、土師器杯の口縁破片(１)、微細剥離痕ある剥片が出土したに過ぎない。

所見　本溝の出土遺物と土層の堆積状況から推して、本溝はおよそ平安時代(９世紀)の所産と判断される。

本溝の掘削意図は判然としないが、底面近くの土層に礫層や礫を多く含む層が見られることから、流水の可能性を有するものの、その形態から用水であった可能性は低いように思われため、土地の排水を目的とした溝であった可能性が考慮される。

また、本溝の南側は３区東縁以東を南方に延伸していると判断される。

６．耕作痕(第35図、PL.16)

概要　２区北半部では耕作痕が確認された。これらは近・現代に係る可能性を有するものである。

なお、走行の違いから北側のものをＡ群、南側のものをＢ群に分けられる。

位置　146～164－120～141にグリッドに位置する。

(Ａ群)153～164－120～141グリッド

(Ｂ群)146～151－127～141グリッド

規模　(全体)〔規模〕ほぼ南北：19.5m　ほぼ東西：21.0m

(Ａ群)〔規模〕ほぼ南北：11.5m　ほぼ東西：21.0m

〔サク長さ〕20.9m以下

〔サク幅〕0.18～0.6m(平均：0.3665m)

〔サク間〕1.0～1.39m(平均：1.22m)

(Ｂ群)〔規模〕ほぼ南北：4m　ほぼ東西：12.4m

〔サク長さ〕12.4m以下

〔サク幅〕0.18～0.5m(平均：0.2842m)

〔サク間〕0.18～0.73m(平均：0.4449m)

主軸方位　(Ａ群)N73°W　(Ｂ群)：N81°W

重複　本耕作痕のうちＡ群は59・60号土坑と重複してこれらを切る。

Ｂ群は他の遺構との重複は見られなかった。

覆土　サクは、Ａ群、Ｂ群共に表土層土に似た土壌で埋没している。

構造　本耕作痕の遺存状態は良好とは言い難く、その構造はつまびらかにできなかった。

サクの幅はＡ群はＢ群の1.29倍と、両者の規格に大きな相違はなかったが、サクとサクの間隔はＡ群はＢ群の2.7倍あった。

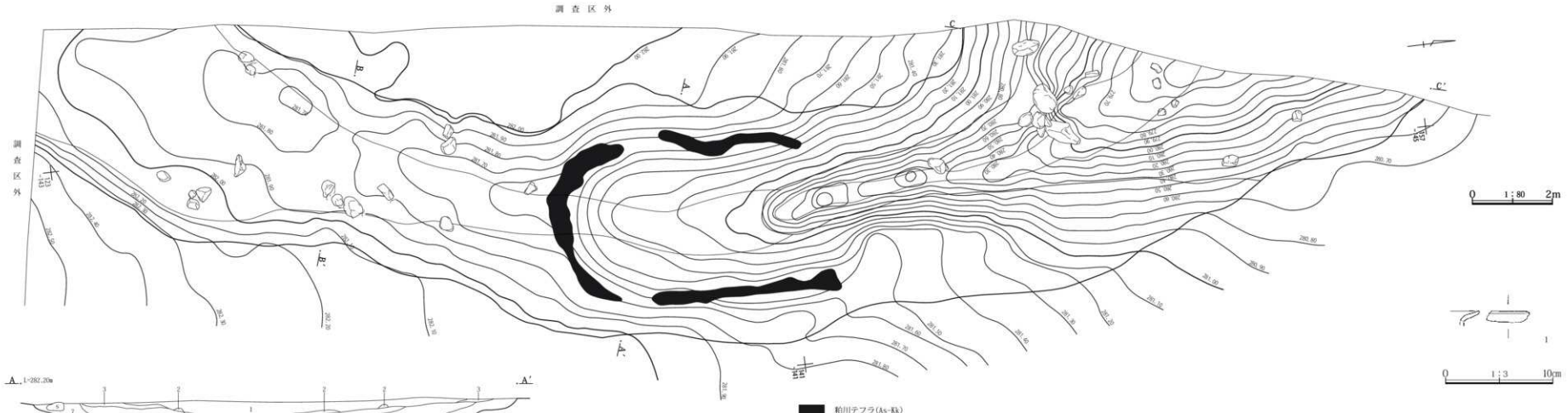
遺物　出土遺物は得られなかった。

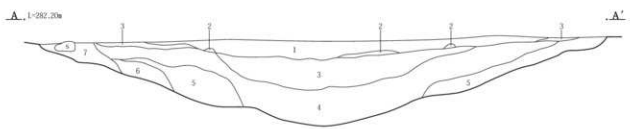
所見　本遺構の時期は、覆土の状態から近世以降、近・現代に近い時期の所産と想定される。

本遺構はサクの集合体であり、畠等の耕作痕と判断される。

７．遺構外の出土遺物(第36図、PL.24)

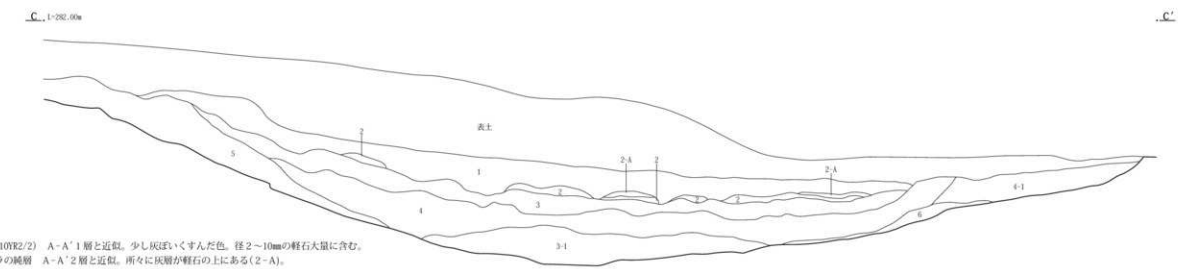
概要　２区の遺構外の出土遺物としては円筒埴輪と思われる埴輪片(１)と土師器甕片３片があった。





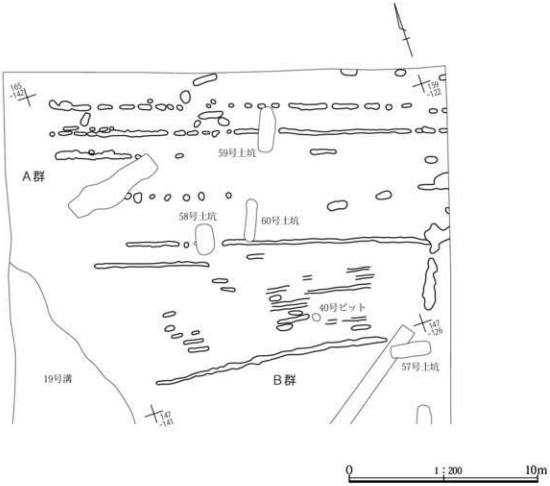
(19号溝)A－A'
1　黒褐色砂質土(10YR3/2)　締りあまりなし。径２～10mmの軽石多量に含む。
2　柏川テフラの純層　締りあまりなし。径２～５mmの軽石。砂質土。
3　黒褐色砂質土(10YR2/2)　締りあまりなし。径５～50mmの礫多量に含む。
4　黒褐色砂質土(10YR3/2)　締りあまりなし。径５～50mmの礫若干含む。
5　黒褐色砂質土(10YR2/2)　４と６層の混在層。やや明るい。径10mmの礫若干含む。
6　黄褐色土(10YR5/6)　砂礫層。径10～50mmの礫少量含む。２次堆積の層か。

(19号溝)B－B'
1　A－A'４層と近似。径１～５mmの軽石少量含む。
2　A－A'５層と近似。黒色と黄褐色の混土層。



(19号溝)C－C'
1　黒褐色土(10YR2/2)　A－A'１層と近似。少し灰ぽいくすんだ色。径２～10mmの軽石大量に含む。
2　柏川テフラの純層　A－A'２層と近似。所々に灰層が軽石の上にある(2－A)。
2－A　柏川の灰層(5BG5/1)　青灰色。
3　黒褐色土(10YR2/2)　A－A'３層と近似。径２～10mmの軽石少量含む。径５～50mmの礫。
3－1　黒褐色土(10YR2/2)　径200～300mm大の礫を多量に含む。最深部に特に多く含む。
4　黒褐色土(10YR2/2)　A－A'４層と近似。砂混じりの径５～200mmの礫多量に含む。
4－1　礫が少量含む。
5　黒褐色と黄褐色の混土層　A－A'５層と近似。

第34図　２区19号溝と出土遺物



第35図　２区耕作痕

第36図　２区遺構外の出土遺物

表11　２区土坑一覧

番号	所在グリット	形状	長さ×幅×深さ(cm)	主軸方位
52	137・138－125・126	隅丸長方形	171×97×71	N 11°E
53	131・132－140・141	方形	85×84×29	N 41°E
54	133・134－138・139	楕円形	85×68×40	N 58°E
55	140・141－135	楕円形	86×63×29	N 5°W
56	142－137・138	隅丸長方形	114×62×50	N 62°W
57	145・146－126～128	短冊形	211×76×82	N 70°W
58	154・155－134～136	隅丸長方形	163×97×15	N 9°E
59	158～160－129～131	短冊形	240×86×36	N 21°E
60	153～156－132・133	短冊形	226×58×44	N 21°E

表12　２区ピット一覧

番号	所在グリット	形状	長さ×幅×深さ(cm)	主軸方位
38	122－141・142	楕円形	44×41×15	N 60°W
39	125－139	楕円形	47×39×33	N 29°E
40	148・149－131	楕円形	46×38×27	N 37°W

第４節　３区の遺構と遺物

１．３区の遺構(第37～50図、PL.17～23・24)

本節では、平成29年度調査区域のうち「３区」の遺構、遺物について報告する。

３区は、東側が現道を隔てて２区に接する。

また３区は、北西縁沿いの区画が、北部で3.43％、南西部で5.81％の勾配で、北西側方向に落ちている。また中部(南東部)では北東－南西9.3m、北西－南東4.8mを測る範囲で、長方形プランに0.5～１mほど削られ、その西側はさらに40cmほど低く、北東－南西10m、北西－南東５m以上を測る平坦面が設けられている。

３区では掘立柱建物３棟、竪穴状遺構２基、土坑16基、ピット10基があった。このうち掘立柱建物は３区南部、竪穴状遺構は南部と南部に近い中部、土坑は北部南端から中・南部、ピットは掘立柱建物周辺に確認された。

また、形態と走行の違いから６面を数える近世以降の新しい時期の耕作痕が、区全域で確認された。

２．１号掘立柱建物・１号竪穴状遺構

(第38・39図、PL.19・20・24)

概要　１号掘立柱建物は、１×２間の掘立柱建物であり、１号竪穴は竪穴状遺構であるが、両者は位置的に単一の遺構である可能性を有するため、併せて報告する。

位置　１号掘立柱建物と１号竪穴状遺構は３区南西部中央に位置する。

１号掘立柱建物：104～109－205～210グリッド

１号竪穴状遺構：105～108－206～209グリッド

規模・主軸方位

［１号掘立柱建物］〔規模〕4.84×4.42m

〔主軸方位〕N87°W

〔Ｐ１〕径：0.3×0.27m　深さ：0.34m

〔Ｐ２〕径：0.37×0.33m　深さ：0.23m

〔Ｐ３〕径：0.28×0.26m　深さ：0.16m

〔Ｐ４〕径：0.3×0.27m　深さ：0.31m

〔Ｐ５〕径：0.36×0.34m　深さ：0.23m

〔Ｐ６〕径：0.3×0.28m　深さ：0.33m

〔梁間〕Ｐ１－Ｐ６：4.03m　Ｐ２－Ｐ５：3.95m

Ｐ３－Ｐ４：3.93m

〔桁間〕Ｐ１－Ｐ２：2.25m　Ｐ２－Ｐ３：2.21m

Ｐ４－Ｐ５：2.22m　Ｐ５－Ｐ６：2.29m

［１号竪穴状遺構］長軸：2.84m　短軸：2.79m

深さ：0.45m

重複　１号竪穴状遺構は１号掘立柱建物の中に納まるように重複しているが、新旧関係は特定できなかった。

なお、１号掘立柱建物と１号竪穴状遺構は、新しい時期の耕作遺構と重複してこれに切られるが、共にその他の遺構との重複関係は認められなかった。

覆土　１号掘立柱建物の柱穴は、暗褐色土で覆われている。

また、１号竪穴状遺構は小礫を多く含む暗褐色砂質土で埋没しているが、小礫を含まない暗褐色砂質土がいわゆる三角堆積を形成していた。

構造　１号掘立柱建物は、梁間１間型の建物で、その柱穴の径は0.26～0.37mで平均0.305m、深さは0.16～0.34mで平均0.2667mを測る。また、梁間は3.93～4.03m、平均3.97m、桁間は2.21～2.29m、平均2.24mを測る。その間尺は、梁間の測定値が２間分であることを加味すれば、桁間が梁間に対して３割増しで長い。柱の配置は東縁を底辺とした台形を呈するが、ほぼ整った配置を示している。

一方、１号竪穴状遺構は、隅丸方形のプランを呈する。掘削形態は箱形で、底面は平底を呈する。

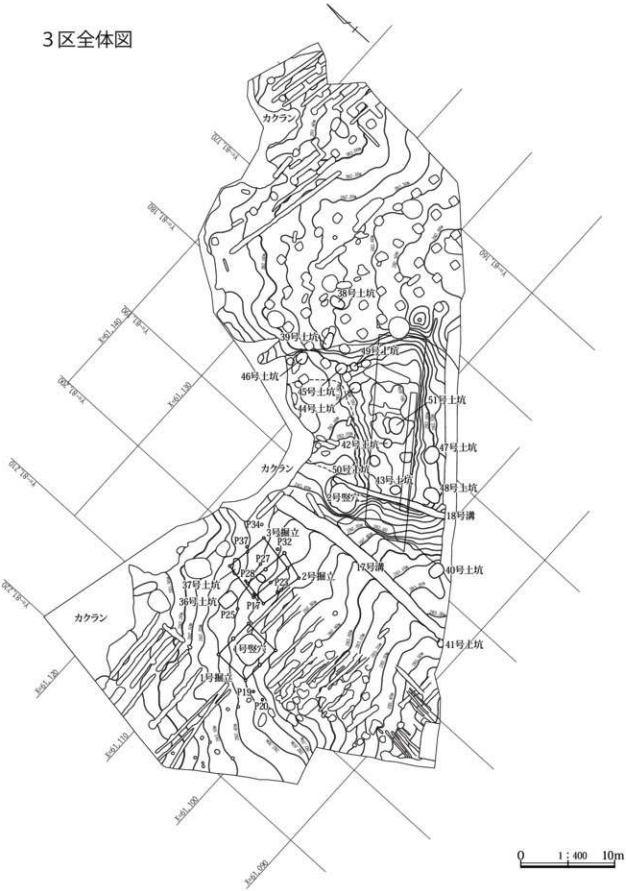
また１号竪穴状遺構の中心は、１号掘立柱建物の棟のライン上にあり、１号掘立柱建物の中心より0.35m東に寄る位置にある。また竪穴状遺構の壁のラインは、１号掘立柱建物の南北いずれの桁から0.4m、東の梁からは0.5m、西の梁からは1.2mほどの位置にある。

遺物　１号掘立柱建物からの出土遺物は得られなかった。また、１号竪穴状遺構からは在地系内耳鍋片(１)が出土した。

所見　１号掘立柱建物は梁間１間型の建物であり、柱穴の径が30cm前後であることから推して、中世の所産と認識される。また、１号竪穴状遺構は出土遺物から中世の所産の可能性があり、１号掘立柱建物と一括の遺構の可能性が認識されることから、本竪穴状遺構も中世の所産の可能性が考慮される。

また、１号掘立柱建物の棟方向と１号竪穴状遺構の主

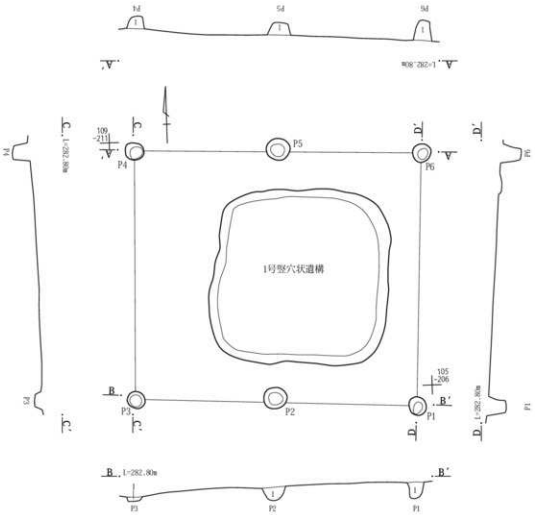
３区全体図



第37図　３区全体図

軸方向は、２・３号掘立柱建物の棟方向と近似した方位を示すことから、同時代の建物であった可能性が考慮される。

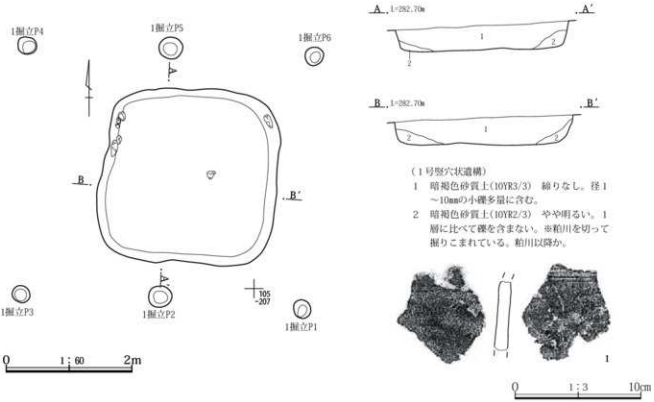
１号掘立柱建物の建築意図と、１号竪穴状遺構の掘削意図は特定できなかったが、竪穴状遺構が中世の竪穴建物であると考えるならば、本竪穴状遺構は倉庫の可能性が考慮され、１号掘立柱建物はその上屋の可能性が考慮される。



（１号掘立Ｐ１～Ｐ６）
１　暗褐色土(10YR3/3)　径１～３mmの軽石少量含む。

0　1:60　2m

第38図　３区１号掘立柱建物



第39図　３区１号竪穴状遺構と出土遺物

３．２号掘立柱建物(第40図、PL.19)

概要　２号掘立柱建物は、１×２間の掘立柱建物である。

本建物は、調査途中で掘立柱建物と認識されたもので、18号ピット(Ｐ３)、21号ピット(Ｐ４)、24号ピット(Ｐ２)、26号ピット(Ｐ５)、30号ピット(Ｐ１)、31号ピット(Ｐ６)で構成されている。

位置　本建物は３区南西部中央部のやや北東よりに位置する。

107～111－197～203グリッドに所在する。

規模・主軸方位

〔規模〕5.36×3.36m

〔主軸方位〕N78°W

〔Ｐ１〕径：0.28×0.25m　深さ：0.45m

〔Ｐ２〕径：0.29×0.29m　深さ：0.28m

〔Ｐ３〕径：0.29×0.27m　深さ：0.37m

〔Ｐ４〕径：0.3×0.24m　深さ：0.35m

〔Ｐ５〕径：0.35×0.35m　深さ：0.39m

〔Ｐ６〕径：0.35×0.31m　深さ：0.39m

〔梁間〕Ｐ１－Ｐ６：3.06m　Ｐ２－Ｐ５：2.69m

Ｐ３－Ｐ４：2.77m

〔桁間〕Ｐ１－Ｐ２：2.25m　Ｐ２－Ｐ３：2.39m

Ｐ４－Ｐ５：2.39m　Ｐ５－Ｐ６：2.71m

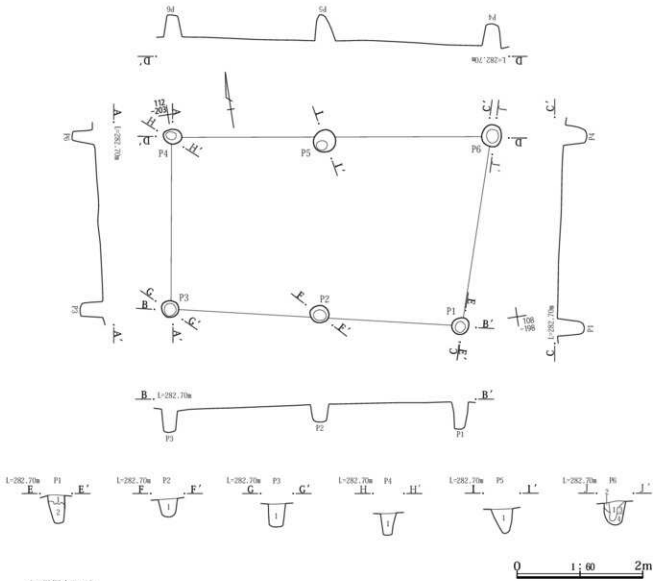
重複　本建物は３号掘立柱建物、17・23号ピットと重複するが、いずれに対しても新旧関係を特定することはできなかった。

覆土　各ピットの覆土は、Ｐ１は軽石少量含む暗褐色砂質土、Ｐ２・３は軽石多く含む暗褐色砂質土、Ｐ４・５は軽石多く含み黄褐色土を多く含む黒褐色土であり、Ｐ６は柱痕に暗褐色砂質土が入り、黄褐色砂質土と黒褐色が入る。

構造　２号掘立柱建物は、梁間１間型の建物で、その柱穴の径は0.24～0.35mで平均0.2975m、深さは0.28～0.45mで平均0.3717mを測る。また、梁間は2.69～3.06m、平均2.84m、桁間は2.25～2.71m、平均2.435mを測る。その間尺は、梁間の測定値が２間分であることを加味すれば、桁間が梁間に対して７割増しで長い。柱の配置は東縁を底辺とした台形を呈するが、東縁がやや開く。

遺物　いずれの柱穴も、出土遺物は得られなかった。

所見　本掘立柱建物は梁間１間型の建物であり、柱穴の径が30cm前後であることから、中世の所産と認識される。



（２号掘立Ｐ１）
1　暗褐色砂質土(10YR3/3)　径２～50mmの軽石少し含む。
2　黒褐色土(10YR2/2)　黄褐色ブロック土多量に含む。

（２号掘立Ｐ２）
1　暗褐色砂質土(10YR3/3)　径２～10mmの軽石多く含む。

（２号掘立Ｐ３）
1　暗褐色砂質土(10YR3/3)　径２～10mmの軽石多く含む。

（２号掘立Ｐ４）
1　黒褐色土(10YR3/2)　径１～10mmの軽石多量に含む。黄褐ブロック多量。

（２号掘立Ｐ５）
1　黒褐色土(10YR3/2)　径１～10mmの軽石多量に含む。黄褐ブロック多量。

（２号掘立Ｐ６）
1　暗褐色砂質土(10YR3/3)　径30mmの炭化物１つ含む。径２～10mmの軽石混じり。
2　黄褐色砂質土(10YR5/6)　地山。２次堆積。
3　黄褐色砂質土(10YR5/6)　地山。２層に黒褐色ブロック大量に含む。
4　黒褐色砂質土(10YR2/3)　黄褐色ブロック大量に含む。径２～10mmの軽石少量含む。

第40図　３区２号掘立柱建物

また、本建物は１・３号掘立柱建物と近似した棟方向を有することから、同時代の建物であった可能性が考慮される。

２号掘立柱建物の建築意図は特定できなかったが、１・３号掘立柱建物に対して本建物は幅狭であることから、履としての使用の可能性が考慮される。

本建物は北東隅のＰ６(31号ピット)がやや北にずれているため、あるいはＰ６(31号ピット)は別遺構で、北東隅の柱穴が確認できなかったものである可能性も残される。

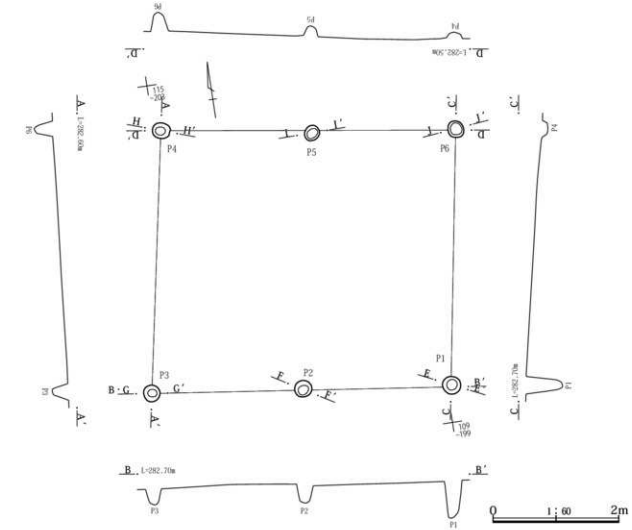
４．３号掘立柱建物(第41図、PL.19)

概要　３号掘立柱建物は、１×２間の掘立柱建物である。

本建物は、調査途中で掘立柱建物と認識されたもので、16号ピット(Ｐ３)、22号ピット(Ｐ２)、29号ピット(Ｐ４)、33号ピット(Ｐ１)、35号ピット(Ｐ６)、36号ピット(Ｐ５)で構成されている。

位置　本建物は３区南西部中央部のやや北東よりに位置する。

109～114－198～203グリッドに所在する。



（３号掘立Ｐ１）
１　暗褐色砂質土(10YR3/3)　径２～10mmの軽石多く含む。

（３号掘立Ｐ２）
１　黒褐色土(10YR3/2)　径１～10mmの軽石多量に含む。黄褐ブロック多量。

（３号掘立Ｐ３）
１　黒褐色砂質土(10YR3/2)　径１～20mm大の礫若干。黄褐粒少量。

（３号掘立Ｐ４）
１　黒褐色土(10YR3/2)　径１～10mmの軽石多量に含む。黄褐ブロック多量。

（３号掘立Ｐ５）
１　黒褐色砂質土(10YR3/2)　白色粒多量に含む。下部に地山混じる。

（３号掘立Ｐ６）
１　暗褐色砂質土(10YR3/3)　地山の混じりが多い。

第41図　３区３号掘立柱建物

規模・主軸方位

〔規模〕4.95×4.59m

〔主軸方位〕N80°W

〔Ｐ１〕径：0.3×0.3m　深さ：0.55m

〔Ｐ２〕径：0.27×0.26m　深さ：0.29m

〔Ｐ３〕径：0.27×0.26m　深さ：0.25m

〔Ｐ４〕径：0.28×0.25m　深さ：0.3m

〔Ｐ５〕径：0.25×0.22m　深さ：0.17m

〔Ｐ６〕径：0.26×0.25m　深さ：0.09m

〔梁間〕Ｐ１－Ｐ６：4.07m　Ｐ２－Ｐ５：4.07m
Ｐ３－Ｐ４：4.17m

〔桁間〕Ｐ１－Ｐ２：2.35m　Ｐ２－Ｐ３：2.42m
Ｐ４－Ｐ５：2.41m　Ｐ５－Ｐ６：2.28m

重複　本建物は２号掘立柱建物、37号土坑、17・27・28号ピットと重複するが、いずれに対しても新旧関係を特定することはできなかった。

覆土　各ピットの覆土は、Ｐ１は軽石多く含む暗褐色砂質土、Ｐ２・４は軽石と黄褐色土多く含む黒褐色土、Ｐ３は黒褐色砂質土、Ｐ５は白色粒多く含む黒褐色砂質土、Ｐ６は暗褐色砂質土であった。

構造　本掘立柱建物は、梁間１間型の建物で、その柱穴の径は0.22～0.3mで平均0.2642m、深さは0.09～0.55mで平均0.2642mを測る。また、梁間は4.07～4.17m、平均4.1033m、桁間は2.28～2.42m、平均2.365mを測る。その間尺は、梁間の測定値が２間分であることを加味すれば、桁間が梁間に対して１割５分増しで若干長い値を示す。柱の配置はほぼ長方形を呈する。

遺物　いずれの柱穴も、出土遺物は得られなかった。

所見　本掘立柱建物からの出土遺物は確認できなかったが、梁間１間型の建物であること、柱穴の径が25cm前後と小さいことから、中世の所産と認識される。

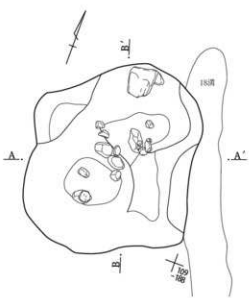
なお、３号掘立柱建物の建築意図は特定できなかった。

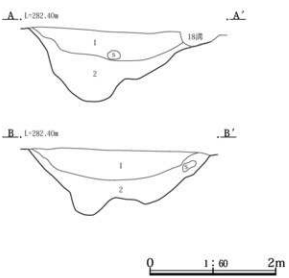
５．２号竪穴状遺構(第42図、PL.20)

概要　２号竪穴は竪穴状遺構である。

位置　２号竪穴状遺構は南西部から中部の窪地に落ちる斜面に位置する。

108～111－188～191グリッドに所在する。





（２号竪穴状遺構）
1　黒褐色土(10YR2/3)　径５～200mm大の礫少量含む。
　径５mmほどの黄橙色軽石(松川テフラ?)を若干含む。
2　黄褐色土(10YR5/6)　砂層。黒色ブロック少量含む。
　地山の崩れによる２次堆積か。

第42図　３区２号竪穴状遺構

規模・主軸方位　長軸：3.08m　短軸：2.76m
深さ：1.01m

重複　２号竪穴状遺構は18号溝と重複するが、本竪穴状遺構の方が古い。

覆土　地山崩落土とみられる黄褐色土とAs-Kkを含むとみられる黒褐色土で埋没する。

構造　本竪穴状遺構はやや不整な隅丸長方形のプランを呈し、すり鉢状の掘削形態を示す。底面形態は尖底に近い形状を呈している。

遺物　出土遺物は得られなかった。

所見　出土遺物はなく本竪穴状遺構の時期を特定することはできなかったが、覆土の状態から、おおむね古代の所産と推定される。

また、本竪穴状遺構の掘削意図は把握されなかったが、その形態から氷室の可能性も考慮される。

６．長方形の土坑群（第43図、PL.20）

概要　本項では３区の土坑のうち、長方形、隅丸長方形プランを呈する36・37・38・39・40号土坑について報告する。

位置　３区北部に38・39号土坑、南西部に36・37・40号土坑が分布する。

なお、各土坑の所在グリッドは表13に記した。

規模・主軸方位　〔規模〕長径：1.61～1.84m
（平均：1.72m）
短径：0.77～1.4m（平均：1.068m）
深さ：0.14～0.43m（平均：0.306m）
〔主軸方位〕36・40号土坑がほぼ東西方向、37・39号土坑はほぼ北東－南西方向、38号土坑はほぼ北西－南東方向を向く。

なお、個々の土坑の規模と主軸方位は表13に記した。

重複　本土坑群のうち37号土坑は３号掘立柱建物と重複するが、新旧関係は特定できなかった。また、39号土坑は近現代と思しき耕作痕に切られている他は、他の遺構との新旧関係は見られなかった。

覆土　覆土は、36号土坑は暗褐色砂質土、37号土坑は黒褐色・暗褐色砂質土、38・39号土坑は黒褐色土、40号土坑は黒褐色砂質土である。

構造　本土坑群の土坑のプランは、36・39号土坑は長方形、37・38・40号土坑は隅丸長方形を呈する。掘削形態はいずれも箱形で、底面は平底状を呈する。

遺物　いずれの土坑からも、出土遺物は得ることはできなかった。

所見　本土坑群各土坑の時期は特定できなかったが、長方形プランで箱形を呈する掘削形態から、おおむね中近世所産の貯蔵穴と想定される。

７．円形・楕円形・方形の土坑群

（第44・45図、PL.21・22）

概要　本項では３区の土坑のうち、円形・楕円形・方形のプランを呈する41～51号土坑について報告する。

位置　円形・楕円形・方形プランの土坑は３区北部には分布せず、南西部に41号土坑が分布する他は、北部境から東南にかけての中部に分布する。

なお、各土坑の所在グリッドは表13に記した。

規模・主軸方位　〔規模〕径：0.73～1.95m
（平均：1.229m）
深さ：0.28～0.83m（平均：0.54m）

なお、個々の土坑の規模と主軸方位は表13に記した。

重複　本土坑群の各土坑は全て単独であり、他遺構との重複は見られなかった。

覆土　覆土は、41・49・50号土坑は黒褐色砂質土、42・43・46号土坑は黒褐色・黄褐色砂質土、44号土坑は黒褐色・にぶい黄褐色砂質土、45号土坑は礫多量に含む黒褐色土、47号土坑は黒褐色土・黄褐色砂質土、48号土坑は黒褐色土・にぶい黄褐色砂質土、51号土坑は礫多量に含む黒褐色・暗褐色土等である。

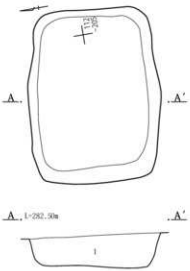
構造　本土坑群の土坑のプランは、43号土坑が方形、42・45号土坑が円形を呈する他は、楕円形を呈する。底面形態は41号土坑が平底、44号土坑が尖底を呈する他は丸底を呈する。

また、本土坑群の土坑は大型のものと小型のものに大別されるが、大型のものは47・48・51号土坑であり、他は小型である。その規模は大型のものは径1.48～1.95m、平均1.705m、深さは0.45～0.83m、平均0.62mを測り、小型のものは径0.73～1.36m、平均1.038m、深さは0.28～0.75m、平均0.51mを測る。径は小型１に対し大型1.64の規模の違いがある。

遺物　いずれの土坑からも出土遺物は得られなかった。

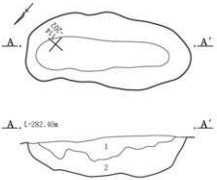
所見　本土坑群各土坑は古代以降の所産であるが、覆土から中世の早い時期の可能性が考慮されるものの、正確な時期を特定することはできなかった。

36号土坑



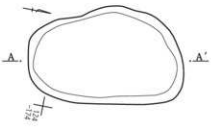
（36号土坑）
1　暗褐色砂質土(10YR3/3)　締りなし。
　径１～５mm大の軽石少量含む。

37号土坑

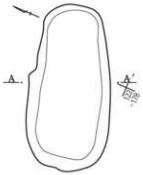


（37号土坑）
1　黒褐色砂質土(10YR2/2)　１～10mm大の軽石少量含む。
2　暗褐色砂質土(10YR3/4)　径10～300mmの礫多量に含む。
　下部に黄褐色砂質ブロック土多量に含む。

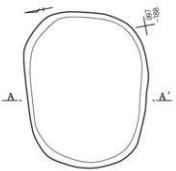
38号土坑



39号土坑



40号土坑



（38号土坑）
1　黒褐色土(10YR3/1)　径１～７mm浅間軽石、径１～10mm
　前後の円礫少量含む。

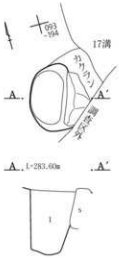
0　1:40　1m

（39号土坑）
1　黒褐色土(10YR3/1)　38号土坑に類似。
2　黒褐色土(10YR3/1)　１層の土に地山の砂礫層の土混じる。

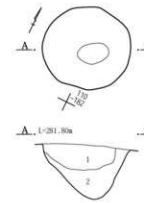
（40号土坑）
1　黒褐色砂質土(10YR3/2)　締りなし。径10mmの小礫若干含む。径
　１～５mmの軽石少量含む。

第43図　３区36～40号土坑

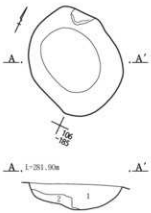
41号土坑



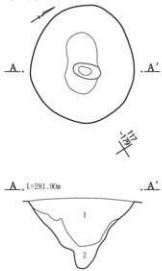
42号土坑



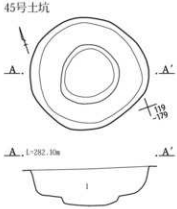
43号土坑



44号土坑



45号土坑



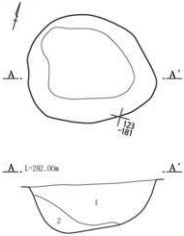
（41号土坑）
1　黒褐色砂質土(10YR3/2)　径10～20mmの礫少量含む。

（42号土坑）
1　黒褐色砂質土(10YR2/2)　径１～10mmの軽石多量に含む。
2　黄褐色砂質土(10YR5/6)　径１～５mmの黄橙軽石少量含む。
　黒褐色ブロック若干含む。下部に径10cm大の軽石あり。

（43号土坑）
1　黒褐色砂質土(10YR2/3)　径１～５mmの軽石多量に含む。
2　黄褐色土(10YR5/6)　地山の２次堆積。径10～20mmの礫少量含む。

（44号土坑）
1　黒褐色砂質土(10YR2/2)　径２～10mmの軽石多量に含む。
2　にぶい黄褐色砂質土(10YR4/3)　黄褐色、白色粒を多量に含む。

46号土坑



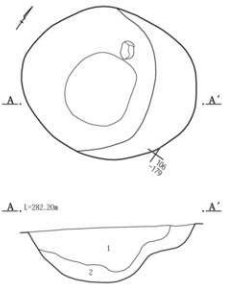
（45号土坑）
1　黒褐色土(10YR2/2)　径１～10mmの礫多量に含む。人為的埋没か。下部が２段になっている。

（46号土坑）
1　黒褐色砂質土(10YR2/3)　径３～50mmの礫多量に含む。下部に径１mmの軽石のブロックを少量含む。
2　黄褐色土(10YR5/6)　黒褐色混じり。白色粒多量に含む。砂質。

0　1：40　1m

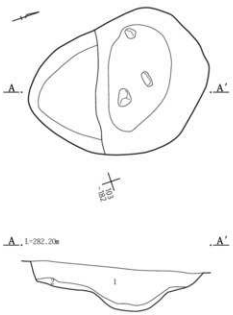
第44図　３区41～46号土坑

47号土坑



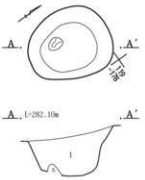
(47号土坑)
1　黒褐色土(10YR2/3)　径３～20mmの礫少量含む。
2　黄褐色土(10YR5/6)　黒褐色混じり。砂質。

48号土坑

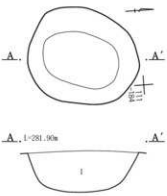


(48号土坑)
1　黒褐色土(10YR2/3)　径２～10mmの小礫少量含む。
2　にぶい黄褐色砂質土(10YR4/3)　径30mm大の礫を若干含む。

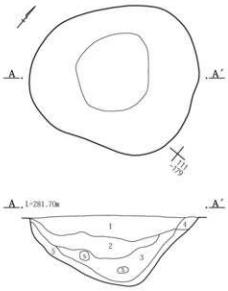
49号土坑



50号土坑



51号土坑



(49号土坑)
1　黒褐色砂質土(10YR3/2)　径５～７mmの浅間起源の軽石テフラ？を少量含む。

(50号土坑)
1　黒褐色砂質土(10YR3/2)　径５～７mmの浅間起源の軽石テフラ？を少量、ＦＰ軽石径60mmを僅かに含む。

(51号土坑)
1　黒褐色土(10YR2/2)　径２～100mm大の礫を多量に含む。
2　暗褐色土(10YR2/3)　径１mmほどの軽石をブロック状に多量に含む。
3　黒褐色土(10YR2/2)　径10～200mm大の礫を少量含む。
4　黒褐色土(10YR2/3)　径１～５mmの軽石を多量に含む。
5　にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3)　白色軽石粒を少量含む。底部には径50mm大の軽石若干。

0　1：40　1m

第45図　３区47～51号土坑

８．ピット（第46・47図、PL.19・22）

概要　本項では３区のピットのうち、２・３号掘立柱建物を構成すると判断されたものを除く、10基のピットについて報告する。

位置　本ピット群の各ピット、いずれも３区南西部に位置するが、19・20号ピットが３区南西部中央やや南西寄りにある他、同区域の北東寄り、２・３号掘立柱建物周辺に分布する。

なお、各ピットの所在グリッドは表14に記した。

規模・主軸方位　〔規模〕径：0.19～0.3m

（平均：0.2605m）

深さ：0.11～0.26m（平均：0.20m）

なお、個々のピットの規模と主軸方位は表14に記した。

重複　本ピット群のピットのうち23号ピットが２号掘立柱建物跡、27・28号ピットが３号掘立柱建物と重複するが、いずれも新旧関係は特定できなかった。

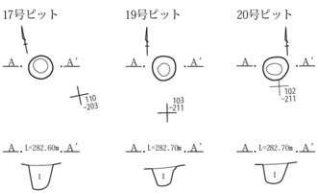
なお、上記以外の17・19・20・25・32・34・37号ピットは他遺構との重複は見られなかった。

覆土　各ピットの覆土は、17・23・25号ピットは軽石多く含む暗褐色砂質土。19号ピットは軽石を多く、20号ピットは川砂を含むにぶい黄褐色砂質土。27・28・32号ピットは軽石と黄褐色ブロック多く含む黒褐色土。34・37号ピットは暗褐色砂質土であった。

構造　本ピット群のピットのプランは、17・19・25・28・32・34号ピットは円形、20・23・27・37号ピットは楕円形を呈する。掘削形態はいずれも柱穴状で、底面の形態は34号ピットが平底、19号ピットが平底気味であるが、他のピットはいずれも丸底を呈する。

遺物　いずれのピットからの出土遺物はなかった。

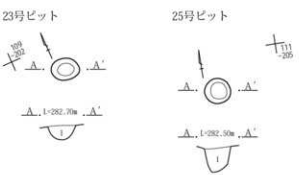
所見　本ピット群各ピットは、覆土と規模から推して、いずれも中世の所産と考慮される。



（17号ピット）
1　暗褐色砂質土(10YR3/3)　径２～10mmの軽石多く含む。

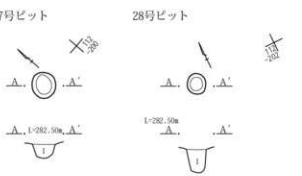
（19号ピット）
1　にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4)　川砂のような砂。
　径20mmの軽石１つ含む。

（20号ピット）
1　にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4)　川砂のような砂。



（23号ピット）
1　暗褐色砂質土(10YR3/3)　径２～10mmの軽石多く含む。

（25号ピット）
1　暗褐色砂質土(10YR3/3)　径２～10mmの軽石多く含む。

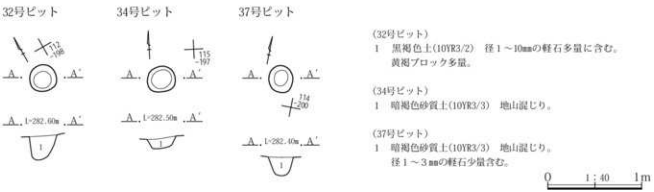


（27号ピット）
1　黒褐色土(10Y3/2)　径１～10mmの軽石多量に含む。
　黄褐色ブロック多量。径30mmの軽石１つ含む。

（28号ピット）
1　黒褐色(10YR3/2)　径１～10mmの軽石多量に含む。
　黄褐色ブロック多量。

0　1：40　1m

第46図　３区17・19・20・23・25・27・28号ピット



第47図　３区32・34・37号ピット

９．17号溝(第48図、PL.22)

概要　本溝は直線的にほぼ南北方向に走行する溝遺構である。

北側は攪乱により削平されているが、底面は端部であることを示している。一方、南側は調査区外に出ているため、溝としての全容はつまびらかでない。

位置　本溝は３区南西部東寄りに位置し、091～115－192～194グリッドに所在する。

規模・主軸方位　〔規模〕確認長：22.7m　幅：1.36～1.82m　深さ：0.45～0.77m

〔主軸方位〕Ｎ０°

重複　本溝は単独であり、他遺構との重複は見られなかった。

覆土　本溝は灰黄褐色川砂、黒褐色土、川砂を含むにぶい黄褐色砂質土等で埋没する。

構造　本溝は南側からＮ16°Ｗ方向で調査区に入り、0.3mで直ぐ北に走行を転ずる。その後曲僅かに東に膨らむもののほぼ直線的に北行して16.8m進み、僅かに反時計周りに屈曲してＮ14°Ｗに走行を転じ、1.2m走行したところで更にＮ３°Ｗに走行を転ずる。ここから2.6m走行したところで底面は端部となり、更に北側へ1.6m進んだ地点で上場は削平され失われる。

掘削形態は箱堀状を呈するが、底面の横断面形は丸底の箇所と平底の箇所がある。また、溝底面の勾配は北側に向かい傾斜し、その勾配率は6.29%を測る。

遺物　本溝からの出土遺物は得られなかった。

所見　本溝の掘削意図は、覆土に川砂を含み流水の痕跡が確認されるため、水路の可能性も考慮されるが、北端で止まることから、土地を東西に分割する区画溝であったものと思慮される。また、その走行がほぼ南北に向くことから、条里制に伴うものである可能性も考慮される。

本溝時期は特定できなかったが、覆土から推して中世前期以前の所産と想定されるが、条里制に伴う可能性を考慮すれば、律令期までさかのぼる可能性も考慮される。

また土層断面の観察から、中北部(Ａ－Ａ′)では２回(1-1・1-2・1-4層｜1-3・1-4層｜2層)、中南部(Ｂ－Ｂ′)では１回(1・2層｜2-1・3層)、南部(Ｃ－Ｃ′)でも１回(1-2・1-3層｜2・4層)の掘り直しの痕跡が見られることから、本溝は２回以上の掘り直しが行われたことが確認される。

10．18号溝(第48図、PL.23)

概要　本溝は、ほぼ北北西－南南東に走行する溝遺構である。

本溝の南側は調査区外に出ているため、全容はつまびらかにできなかった。

位置　本溝は３区中部南西寄りにあり、３区中部の窪地の南西縁に沿って掘削されており、099～112－183～188グリッドに位置する。

規模・主軸方位　〔規模〕確認長：12.38m　幅：0.56～0.62m　深さ：0.26～0.62m

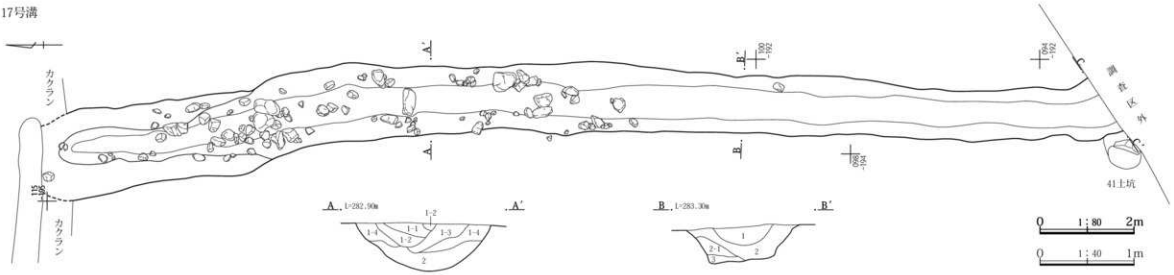
〔主軸方位〕Ｎ28°Ｗ

重複　本溝は２号竪穴状遺構と重複するが、本溝の方が新しい。

覆土　本溝はAs-Kkを多く含む黒褐色砂質土と黒褐色土で埋没する。

構造　本溝は南側から調査区に入り、曲ゆるやかに蛇行を以て、ほぼ北北西方向に走る。

17号溝

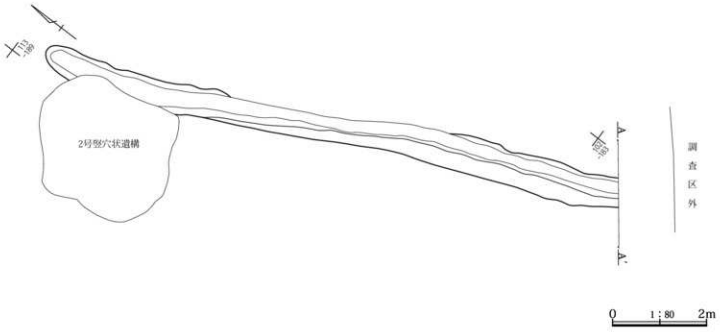


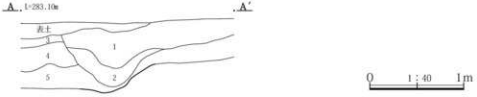
(17号溝)A-A'
1-1　にぶい黄褐色砂質土(10YR4/3)　B-B'1層に似た層。川砂混じり。
　　径1～10mmの軽石多量に含む。最近の水の流れの層。
1-2　1-1層の川砂が多量に含まれる層。多量の小礫含む。
1-3　川砂が少し混じる砂質土層。砂が細かい。(端)
1-4　1-3層より川砂が少し混じる砂質土層。砂が細かい。(端)
2　黒褐色土(10YR2/3)　径1～5mmの軽石多量に含む。

(17号溝)B-B'
1　にぶい黄褐色砂質土(10YR4/3)　川砂混じり。
　径1～10mmの軽石多量に含む。最近の水の流れの層。
2　黒褐色土(10YR2/3)　径1～5mmの軽石多量に含む。
　径10mm大の礫を2つ含む。
2-1　2層から3層への漸移層。
3　灰黄褐色土(10YR4/2)　川砂層。

(17号溝)C-C'
表土　現耕作土
1-1　にぶい黄褐色砂質土(10YR4/3)　B-B'1層に近似。
　径1～10mmの軽石多量に含む。最近の水の流れの層。
　川砂混じりの層。
1-2　川砂を多く含む。
1-3　川砂を少量含む。
2　黒褐色土(10YR2/3)　B-B'2層に近似。径1～5mmの
　軽石多量に含む。
4　黄褐色土(10YR5/6)　径2～5mm大の円礫多量含む。
　上部はB-B'3層と同じ川砂含む。

18号溝





(18号溝)
1　黒褐色土(10YR2/2)　径1～10mm大の軽石(粕川?)を多量に含む。砂礫層。
2　黒褐色土(10YR2/2)　径2～10mmの軽石(粕川?)を少量含む。
3　粕川テフラのほぼ純層。
4　黒褐色土(10YR2/3)　粕川混じりの層。
5　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　砂層。白色粒多量に含む。

第48図　3区17・18号溝

掘削形態は箱堀状を呈するが、底面の横断面形は丸底を呈する。また、溝の底面は中ほどが低くなり、南端より0.3m、北端より0.45mほど低い。

遺物　本溝からの出土遺物は得られなかった。

所見　本溝の時期は特定できなかったが、土層観察からは、中世の早い段階で埋没したものと認識される。

また、本溝の掘削意図は特定されなかったが、流水の痕跡もなかったが、３区中部の窪地の縁辺に沿って掘削されることから、土地の区画、あるいは排水溝としての機能が考慮される。

11．耕作痕(第49図、PL.23・24)

概要　３区では６群を数える耕作痕が確認された。これらは近・現代に係わる可能性を有するものである。

位置　(Ａ群)３区北部の北部に位置する。

133～144－155～178にグリッド

(Ｂ群)３区北部の南部

115～132－157～183グリッド

(Ｃ群)３区西南部の中北部

096～108－200～210グリッド

(Ｄ群)３区西南部の中南部

089～102－196～213グリッド

(Ｅ群)３区西南部の南部

086～094－198～205グリッド

(Ｆ群)３区西南部の西端部

104～116－211～223グリッド

規模　(Ａ群)〔規模〕ほぼ南北：12.0m　ほぼ東西：22.4m

〔サク長さ〕1.49～14.64m(平均：4.8543m)

〔サク幅〕0.44～0.66m(平均：0.5379m)

〔サク間〕1.0～1.22m(平均：1.129m)

(Ｂ群)〔規模〕ほぼ南北：12.5m　ほぼ東西：25.9m

〔壺径〕0.72～3.87×0.44～1.5m

(平均：1.077×0.9407m)

〔壺間〕東西：1.68～3.01m(平均：2.569m)

南北：1.97～6.9m(平均：3.3215m)

(Ｃ群)〔規模〕ほぼ南北：12.0m　ほぼ東西：22.4m

〔サク長さ〕1.4～7.72m(平均：4.3487m)

〔サク幅〕0.27～0.65m(平均：0.443m)

〔サク間〕0.4～2.38m(平均：1.165m)

(Ｄ群)〔規模〕ほぼ南北：11.9m　ほぼ東西：10.1m

〔壺径〕0.75～4.2m(平均：1.092m)

〔サク間〕1.15～4.45m(平均：2.31m)

(Ｅ群)〔規模〕ほぼ南北：11.4m　ほぼ東西：7.9m

〔サク長さ〕1.49～14.64m(平均：4.8543m)

〔サク幅〕0.44～0.66m(平均：0.5379m)

〔サク間〕1.0～1.22m(平均：1.129m)

(Ｆ群)〔規模〕ほぼ南北：12.2m　ほぼ東西：11m

〔サク確認長〕0.55～10.81m(平均：5.3286m)

〔サク幅〕0.3～0.98m(平均：0.541m)

〔サク間〕0.49～3.39m(平均：1.129m)

主軸方位　(Ａ群)Ｎ73°Ｗ　(Ｂ群)Ｎ81°Ｗ

(Ｃ群)Ｎ86°Ｗ　(Ｄ群)Ｎ83°Ｗ

(Ｅ群)Ｎ４°Ｅ　(Ｆ群)Ｎ89°Ｅ

重複　本耕作痕のうちＡ群とＢ群、Ｃ群とＤ群は重複するが、共に新旧関係を特定できなかった。

またＢ群は29・38・45・46・49号土坑と、Ｃ群は１号掘立柱建物と重複するが、いずれに対しても本耕作痕群の方が新しい。

覆土　サクの覆土の記録は残せなかったが、いずれのサク、あるいは壺も表土層土に似た土壌で覆われる。

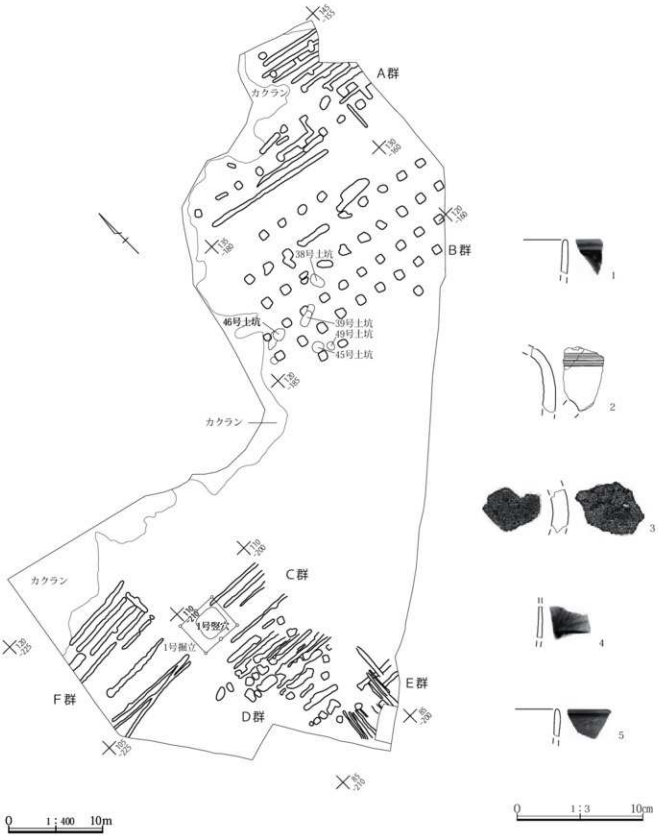
構造　本耕作痕のうちＡ・Ｃ・Ｅ・Ｆ群は並列したサクにより、Ｂ・Ｄ群は方形プランの壺堀状の耕作痕からなる。

また耕作痕跡の規模は、サク状のものではＦ群、Ａ・Ｃ群、Ｅ群の順に小さく、サクの間隔はＡ・Ｃ・Ｆ群は近似するがＥ群は狭い。一方、壺掘状のＢ・Ｄ群の規模は近似する。遺存状態は良好とは言い難く、その構造はつまびらかにできなかった。

遺物　Ｂ群からは肥前陶器陶胎染付碗(１)、瀬戸美濃産瓶(２)、搬入系の土管(３)、Ｆ群(あるいはＣ群)からは製作地不詳の碗(４)、肥前陶器陶胎染付碗(５)の出土があった。

所見　本耕作痕群の時期は、出土遺物からＢ・Ｆ(あるいはＣ)群は近・現代、他の耕作痕跡は、近・現代に近い時期の所産と想定されるが、Ｅ群は規模が小さいことから、近世の所産の可能性が考慮される。

また本耕作痕群は畠等の耕作痕と判断されるが、Ｂ・Ｄ群は桑等の植栽によるものと判断される。



1～3　B群耕作痕
4・5　F群耕作痕

第49図　3区耕作痕と出土遺物

12. 遺構外の出土遺物(第50図、PL.24)

概要　３区からは平安時代の須恵器椀か杯(１)が出土した。この他、土師器甕片50片が出土している。

第50図　３区遺構外の出土遺物

表13　３区土坑一覧　　寸法内（　）は残存値

番号	所在グリット	形状	長さ×幅×深さ(ｃｍ)	主軸方位
36	111・112－204～206	長方形	184×140×36	N82°W
37	113・114－201～203	隅丸長方形	175×77×43	N49°E
38	123～125－174・175	隅丸長方形	161×103×30	N11°W
39	121～123－177～179	長方形	176×85×30	N67°E
40	097・098－187～189	隅丸長方形	164×129×14	N80°W
41	091・092－193・194	楕円形	72×(39)×67	N21°E
42	110・111－181・182	円形	93×88×58	N54°E
43	106・107－184・185	方形	110×91×28	N62°W
44	116・117－179・180	楕円形	125×109×75	N51°W
45	118～120－178～180	円形	122×115×45	N64°W
46	122・123－180～182	楕円形	136×114×51	N75°E
47	105～107－178～180	楕円形	183×162×58	N54°E
48	102～104－182・183	楕円形	195×148×45	N 8°E
49	118・119－178	楕円形	89×73×41	N15°E
50	109・110－183・184	楕円形	118×102×43	N17°E
51	110～112－179・180	楕円形	179×156×83	N50°E

表14　３区ピット一覧　　寸法内（　）は残存値

番号	所在グリット	形状	長さ×幅×深さ(ｃｍ)	主軸方位
17	110－203	円形	26×23×26	N0°
19	103－210・211	円形	26×24×19	N0°
20	102－210・211	楕円形	27×25×21	N61°E
23	108－201	楕円形	30×24×15	N66°W
25	110－205	円形	29×27×25	N0°
27	111・112－200	楕円形	28×25×15	N47°E
28	111・112－202・203	円形	22×20×24	N0°
32	111－198	円形	28×28×25	N0°
34	114－197	円形	30×29×11	N0°
37	114－200	楕円形	29×25×20	N21°W

第５節　縄文時代の遺物

１．本遺跡と縄文時代遺物との関係

本遺跡は６世紀初頭の榛名山二ッ岳の噴火に伴い噴出した火砕流堆積物で厚く覆われているため、本来、表土に近い位置で、古墳時代中期以前の遺構、遺物を確認することは不可能である。

しかしながら、本遺跡においては少量であるものの、縄文時代の遺物を確認しているが、これらは本遺跡に元々存したものではなく、古墳時代後期以降の流れ込みにより、本遺跡より出土したと判断されるものである。

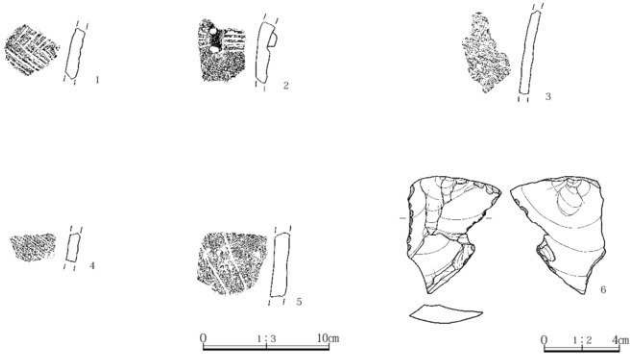
２．本遺跡出土の縄文時代遺物

（第51図、PL.24）

本遺跡における縄文時代の遺物は２区で縄文土器５点が出土し、剥片石器１点と３区で縄文土器９点が出土している。

縄文土器はいずれも小破片であり、その時期は早期から後期に属するものであった。これらは早期後半に属するもの１点（３）、前期の諸磯ａ式２点（４）、中期の焼町式１点、加曽利Ｅ式１点、後期の加曽利Ｂ２式１点（１）、堀之内Ｉ式４点（２・５）、時期不明のものが５点であった。

また、剥片石器は、微細剥離痕のある剥片（６）であった。



第51図　縄文時代の出土遺物

第４章　自然科学分析

第１節　自然科学分析の委託

１．自然科学分析資料

宮貝戸遺跡出土の２号竪穴建物および北部埋没谷では、覆土中から明確な層状を呈する灰白色軽石・火山灰等が出土している。本自然科学分析の対象資料は、これらの灰白色軽石・火山灰である。

２．自然科学分析の目的

本遺跡では竪穴建物覆土及び埋没谷に火山灰及び若干の間層を挟んでアッシュと軽石層が部分的に堆積していた。これまでの諸研究から、これは浅間粕川テフラ(As-Kk)または浅間Ｂ軽石(As-B)、あるいはそれらの両方と考えられる。両者の分布は当遺跡付近では重なるとされてきたが、周辺に同様の遺跡の調査・報告事例が少ないので、今回、この軽石等の自然化学分析をすることによってこれを明らかにする重要な資料が得られるものと考える。

３．自然科学分析の委託

こうした自然環境を理解することは遺跡立地や生業等を考えるうえで欠かせないため、これらについて専門家に同定を依頼することとした。

４．委託の成果

委託の報告書は、本章第２節に掲載したが、竪穴建物覆土及び埋没谷に堆積したアッシュ及び軽石は、下層のアッシュがAs-Bに伴うアッシュであること、間層を挟んで堆積した上層のアッシュ及び軽石がAs-Kkに伴うものであることが明らかにされた。

５．所見

確認された竪穴建物は平安期後半のものである。その他の遺構は時期判定することができる遺物に恵まれていないが、おおむね中・近世のものが中心である。地山となった火山性堆積物については明らかにすることができなかったが、いずれにしても榛名火山に由来する古墳時代の堆積物であることは確実で、山麓の谷を埋めるように扇状地堆積したのち、その先端を吾妻川が侵食、段丘地形を形成したと見られる。

第２節　宮貝戸遺跡火山噴出物分析業務

１．はじめに

関東地方北西部吾妻川流域に位置する東吾妻町とその周辺には、浅間、榛名、草津白根をはじめとする北関東地方とその周辺の火山のほか、御岳や妙高、さらには中国地方や九州地方など遠方に位置する火山から噴出したテフラ(火山砕屑物、いわゆる火山灰)が数多く挟在されている。これらの多くについては、層相や年代さらに岩石記載的な特徴がテフラ・カタログ(町田・新井、2011ほか)などに収録されており、露頭や考古遺跡などで調査分析を行いテフラを検出することで、地形や地層の形成年代さらには考古学的な遺物や遺構の年代などに関する研究を実施できるようになっている。

宮貝戸遺跡の発掘調査の際にも、起源や年代が不明なテフラ層やテフラ粒子が認められたことから、地質調査を実施してテフラ層を含む土層の層序や、テフラ粒子の岩相の記載を行うとともに、高純度で採取した試料を対象に、仕様で指示されたテフラ分析(テフラ検出分析)を実施して指標テフラとの同定を行い、土層の層位や年代を明らかにすることになった。調査分析の対象は、試掘トレンチおよび１号谷の２地点である。

２.土層の層序

（１）試掘トレンチ

宮貝戸遺跡の基盤の堆積物を観察できた試掘トレンチでは、下位より岩片を含む灰色砂質堆積物(層厚12cm以上、岩片の最大径37mm)、粗粒の礫を含む成層した灰色砂礫層(層厚19cm、礫の最大径238mm)、主体部が桃灰色の砂質堆積物(層厚42cm)、層理が発達した礫混じり灰色砂層(層厚５cm、礫の最大径191mm)、褐色砂質火山灰層(層厚５cm)、主体部がやや桃色がかった砂質堆積物(層厚35cm)、下部７cmが粗粒で灰～白色の軽石を含む灰色砂質堆積物(層厚19cm、軽石の最大径47mm、岩片の最大径28mm)、黄色砂質細粒火山灰層(層厚２cm)、褐色細粒火山灰層(層厚５cm)が認められる(図52)。

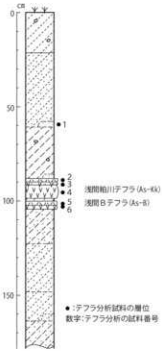
このうち、主体部が桃灰色の砂質堆積物は、最下部８cmが灰色粗粒火山灰層で、上部10cmにはかすかに層理が形成されている。また、主体部がやや桃色がかった砂質堆積物は、主体部がやや桃色がかった灰色火砕流堆積物(軽石の最大径28mm、岩片の最大径９mm)で、その上位に下位より灰色火山灰に富む部分(層厚７cm)と黄灰色粗粒火山灰に富む部分(層厚５cm)が認められる。

試掘トレンチに近接した９号土坑断面では、試掘トレンチ最上部の褐色細粒火山灰層中に粗粒の白色軽石(最大径78mm)や炭化物が含まれている。その上位には層理をもつ灰色砂層(層厚13cm)が認められ、それを切って円磨された白色軽石に富む黄色砂層(最大層厚16cm、軽石の最大径47mm)が堆積している。

第52図　試掘トレンチ・９号土坑断面の総合地質柱状図

（２）１号谷

宮貝戸遺跡の基盤の堆積物を浸食してできた谷は、おもに腐植質の堆積物により埋没している。１号谷におけるこの埋積堆積物は、下位より、暗灰褐色砂質土(層厚14cm以上)、黄褐色砂層(ブロック状、最大層厚３cm)、やや暗い灰褐色砂質土(層厚16cm)、灰褐色砂質土(層厚25cm)、砂混じりでとくに色調が暗い暗灰色土(層厚18cm)、成層したテフラ層(層厚４cm)、暗褐色土(層厚１cm)、成層したテフラ層(層厚11cm)、灰褐色砂質土(層厚２cm)、灰褐色軽石混じり暗灰褐色土(層厚25cm、軽石の最大径16mm)、やや暗い灰色砂層(層厚３cm)、灰褐色軽石混じりでやや暗い灰褐色砂質土(層厚36cm、軽石の最大径16mm)、表土(層厚22cm)が認められる(図53)。



第53図　１号谷の地質柱状図

このうち、下位のテフラ層は、下部の黄灰色軽石層(層厚２cm、軽石の最大径29mm、石質岩片の最大径４mm)と、上部の黄灰色砂質細粒火山灰層(層厚２cm)からなる。一方、上位の成層したテフラ層は、下位より褐色軽石混じり黄灰色軽石層(層厚７cm、軽石の最大径12mm、石質岩片の最大径３mm)、褐色軽石混じりで石質の暗灰色粗粒火山灰層(層厚２cm、軽石の最大径６mm、石質岩片の最大径３mm)、灰色砂質細粒火山灰層(層厚２cm)からなる。

３．テフラ検出分析

（１）分析試料と分析方法

１号谷で認められた２層の成層したテフラ層（試料６、試料４）と、その上位の砂層（試料１）に含まれるテフラ粒子の特徴を明らかにするために、テフラ検出分析を行って、テフラ粒子の量や特徴を定性的に把握した。分析方法は次のとおりである。

１）試料６ｇを電子天秤で秤量。
２）超音波洗浄装置により泥分を除去。
３）恒温乾燥器により80℃で恒温乾燥。
４）実体顕微鏡下で観察。

（２）分析結果

テフラ検出分析の結果を表15に示す。試料６には、淡灰色のほかに、淡褐色や褐色の比較的良く発泡した軽石（最大径29mm）や、それらの細粒物である淡灰色、淡褐色、褐色のスポンジ状軽石型火山ガラスが非常に多く含まれている。強磁性鉱物以外の重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が認められる。

試料４には、淡灰色、淡褐色、褐色、白色、さらにそれらが斑状に入り混じった比較的良く発泡した軽石（最大径10.6mm）や、それらの細粒物である同系色のスポンジ状軽石型火山ガラスが非常に多く含まれている。強磁性鉱物以外の重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が認められる。

試料１には、比較的良く発泡した淡灰色の軽石（最大径4.2mm）や、さほど発泡の良くない白色の軽石（最大径3.6mm）、さらにそれらの細粒物である淡灰色や白色のスポンジ状軽石型ガラスが比較的多く含まれている。強磁性鉱物以外の重鉱物としては、斜方輝石、角閃石、単斜輝石が認められる。淡灰色の軽石の斑晶鉱物としては斜方輝石や単斜輝石、白色の軽石の斑晶鉱物としては斜方輝石や角閃石が認められる。

４．考察

試掘トレンチおよび９号土坑断面で認められた堆積物のうち、粗粒の礫を含む砂礫層や成層した砂層は、おもに火砕流堆積物に由来する水成堆積物と考えられる。一方、砂質堆積物に関しては、吹き抜けパイプ構造が認められないことから泥流堆積物の可能性も否定はできないが、層相や一部には炭化物が含まれていることを考慮すると、火砕流堆積物の可能性の方が高いようにみえる。

この堆積物に関しては、地表面に近いことや遺跡近傍の沼尾川沿いの地層の堆積状況から、まず６世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ（Hr-FP、新井、1962、坂口、1986、早田、1989、町田・新井、1992）を構成する二ツ岳第２軽石流堆積物（FPF-2、新井、1979）に関係した堆積物の可能性が指摘される。

ただし、６世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA、新井、1979、坂口、1986、早田、1989、町田・新井、1992）を構成する二ツ岳第１軽石流堆積物（FPF-1、新井、1979）の最上部には軽石に富むフロー・ユニットがあること（Soda、1996・早田、1998など）や、観察地点で認められる細粒の褐色火山灰層の存在などは、観察した砂質堆積物の多くがFPF-1である可能性が考えられる。

いずれにしても、今回観察できた堆積物の範囲が比較的狭いことから、周辺露頭などの地層観察を継続して堆積様式や堆積物の由来に関しての検討を継続する必要がある。

一方、１号谷で認められた２層の成層したテフラ層は、層位、層相、含まれるテフラの岩相などから、下位より順に、1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間Ｂテフラ（As-B、荒牧、1968、、新井、1979、町田・新井、1991、2003、2011）と、1128（大治３）年に浅間火山から噴出したと考えられている浅間粕川テフラ（As-Kk、早田、1991、1996、2004）に同定される可能性が高い。下位

表15　１区南深掘地点南壁におけるテフラ検出分析結果

試料	軽石・スコリア			火山ガラス			重鉱物
	量	色調	最大径	量	形態	色調	
1	**	淡灰、白	4.2	**	pm (sp)	淡灰、淡褐、褐、白	opx、am、cpx
4	****	淡灰、淡褐、褐、白	10.6	**	pm (sp)	淡灰、淡褐、褐、白	opx、cpx
6	****	淡灰、淡褐、褐	29.1	**	pm (sp)	淡灰、淡褐、褐	opx、cpx

****：とくに多い、***：多い、**：中程度、*：少ない、最大径の単位はmm.
sc：スコリア型、bw：バブル型、pm：軽石型、md：中間型、sp：スポンジ状、fb：繊維束状
ol：カンラン石、opx：斜方輝石、cpx：単斜輝石、am：角閃石.（）内は量がとくに少ない鉱物.

のAs-Bは、層厚が薄いものの、粗粒の軽石が含まれており、テフラを生産した噴火の規模が、上位のAs-Kkより大きかったことを示唆している。

なお、試料１には、層位や層相から、1783(天明３)年に浅間火山から噴出した浅間Ａ軽石(As-A、荒牧、1968、新井、1979、町田・新井、1991、2003、2011)の混在が期待されたが、As-Aに特徴的なテフラ粒子は認められなかった。

５．まとめ

東吾妻町宮貝戸遺跡の発掘調査区において、地質調査とテフラ分析(テフラ検出分析)を実施した。その結果、古墳時代の榛名火山の噴火による火砕流や火山泥流に由来する堆積物を切って形成された谷の埋積土の中に、浅間Ｂテフラ(As-B、1108年)と浅間粕川テフラ(As-Kk、AD1128年)に同定される可能性が高いテフラ層を認めることができた。

文献

新井房夫(1962)関東盆地北西部地域の第四紀層年、群馬大学紀要自然科学編,10,p.1-79.

新井房夫(1979)関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層. 考古学ジャーナル、no.53,p.41-52.

荒牧重雄(1968)浅間火山の地質. 地団研専報、no.14,p.1-45.

町田　洋・新井房夫(1992)「火山灰アトラス」. 東京大学出版会、276p.

町田　洋・新井房夫(2003)「新編火山灰アトラス」. 東京大学出版会、336p.

町田　洋・新井房夫(2011)「新編火山灰アトラス(第２刷)」. 東京大学出版会,336p.

坂口　一(1986)榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器. 群馬県教育委員会編「笹硚北原遺跡・今井神社古墳群・笹硚青柳遺跡」, p.103-119.

早田　勉(1989)６世紀における榛名火山の２回の噴火とその災害. 第四紀研究、27、p.297-312.

早田　勉(1991)浅間火山の生い立ち. 佐久考古通信、no.53,p.2-7.

Soda,T.(1996)Explosive activities of Haruna Volcano and their impacts on human life in the 6th century A.D. Geogr. Rept. Tokyo Metropol. Univ., no.31,p.37-52.

早田　勉(1996)関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴－とくに御岳第１テフラより上位のテフラ　について－. 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書、７、p.256-267.

早田　勉(1998)榛名火山－古墳時代の大噴火をさぐる. 高橋正樹・小林哲夫編「関東甲信越の火山Ⅰ」. 築地書館、p.74-92.

早田　勉(2004)火山灰編年学からみた浅間火山の噴火史－とくに平安時代の噴火について－. かみつけの里博物館編「1108－浅間火山－中世への胎動」, p.45-56.

写真１　１号谷・As-Kkの層相
主体部が褐色軽石を含む黄灰色軽石層からなる。

写真２　１号谷・As-BとAs-Kk
成層したAs-Bの上位にAs-Kkの主体部の堆積が認められる。

写真３　１号谷・試料４(As-Kk)
淡灰色、淡褐色、褐色、白色の、またそれらが斑状に入り混じった色調の軽石やスポンジ状軽石型ガラスが多く含まれている.背景は１mmメッシュ。

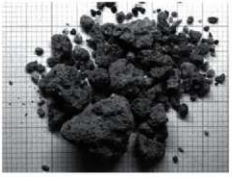


写真４　１号谷・試料６(As-B)
淡灰色、淡褐色、褐色の軽石やスポンジ状軽石型ガラスが多く含まれている.背景は１mmメッシュ。

第５章　まとめ

第１節　遺構、遺物の概要

以上のように、宮貝戸遺跡の発掘調査成果を報告してきたが、その成果は、ある意味で限定的なものではある。しかし、調査実績の希薄な東吾妻町箱島地区の埋蔵文化財の状況を示すに当たり、有用な事例になるものと考えられる。そこで本書のまとめとして、以下に本遺跡の調査成果を概述し、次節で若干の考察を試みることとする。

１．遺構の時期的制約

既に述べてきたように、本遺跡周辺は、６世紀初頭の榛名山の噴火に伴う火砕流堆積物が厚く堆積している。この火砕流堆積層の下には古墳時代中期以前の埋蔵文化財の包蔵も想定されるが、本調査においては安全上の制約もあって、火砕流層下面の様相を確認することができなかった。したがって本遺跡で調査し得た遺構は理論上６世紀以降のものに限られるのであるが、実際に確認できた遺構は、おおむね律令期から近世以降のものであった。また、出土遺物も少なかったため、個々の遺構の時期を明確にすることもできなかった。

２．遺構と遺物の概要

本遺跡で調査した遺構は、竪穴建物１棟、竪穴状遺構２基、掘立柱建物３棟、柵１重、土坑60基、ピット27基、溝５条、耕作痕跡11面、谷３箇所であった。なお、時期ごとの遺構数量は下の表15を参照願いたい。

さて、これらの遺構は先に述べたように、奈良・平安時代に現れ、中世を経て近世以降に及ぶものであるが、その遺構量は中・近世にかけて増加する傾向にあり、全体として中世を中心とした時期の所産であるものと見られる。

一方、出土遺物は少なく、得られる所見も多くはなかったが、土師器、須恵器、灰釉陶器、陶磁器が１・２・３区から出土し、２・３区では古墳時代後期以降に本遺跡に流入したと判断される早～後期の縄文土器の破片や石器の出土も見られた。

第２節　若干の考察

上述のように本遺跡の遺構は律令期以降のものに限らるが、律令期と中世の遺構について若干の所見を述べ、稿を閉じることとする。

表16　宮貝戸遺跡遺構一覧

区	遺構種別	時代							合計
		奈良・平安	古代～中世	古代以降	中世	中世～近世	近世	近世以降	
１区	竪穴建物	1							1
	柵				1				1
	土坑	3		3	6	23			35
	ピット		9	5					14
	溝					1		1	2
	耕作痕							3	3
	谷	3							3
２区	土坑		3			6			9
	ピット		3						3
	溝	1							1
	耕作痕							2	2
３区	竪穴状遺構	1			1				2
	掘立柱建物				3				3
	土坑				11	5			16
	ピット				10				10
	溝		1		1				2
	耕作痕						1	5	6
合計	竪穴建物	1							1
	竪穴状遺構	1			1				2
	掘立柱建物				3				3
	柵				1				1
	土坑	3	3	3	17	34			60
	ピット		12	5	10				27
	溝	1	1		1	1		1	5
	耕作痕						1	10	11
	谷	3							3

１．奈良・平安時代

奈良・平安時代(律令期)に属すると判断された遺構は竪穴建物１棟、竪穴状遺構１基、土坑３基、溝１条と自然地形ではあるが３箇所の谷があった。その分布は１区に集まり、２・３区では１遺構ずつを確認するに過ぎないものであった。

上述のように、竪穴建物は僅かに１棟を確認、調査

したに過ぎなかったが、この建物は併設すると判断される、２基の竈を有する特徴的な遺構であった。また本建物の周囲に他の竪穴建物あるいは同時期の掘立柱建物等が確認できなかったことから、本遺跡において集落が形成されていた可能性は小さいものと推量された。したがってこの建物はいわゆる「離れ国分」と称される、集落から離れて建てられた建物遺構であると判断される。なお、本建物は竪穴建物の減少する11世紀の所産であった。

また、19号溝は谷地形を溝状に整え、拡張したものと想定されるような構造を有するものであった。本溝の掘削意図は明確にはし得なかったが、現段階では椿名山からの湧水の処理に関連したものである可能性を提示したい。

２．中世

中世に属すると判断された遺構は、竪穴状遺構１基、掘立柱建物３棟、柵１重、土坑17基、溝１～２条があった。

このうち、３区南西部に３棟の掘立柱建物が確認された。しかし２・３号掘立柱建物は重複し、１号掘立柱建物と２号あるいは３号掘立柱建物は棟方向に若干の相違が見られたことから、これらの掘立柱建物が併存していた可能性は低いものと判断された。換言すれば、掘立柱建物は３時期にわたって建てられた状況が確認されるのである。

また、これらの掘立柱建物群の東には、近接してほぼ南北走行の18号溝があり、その走行は１号掘立柱建物の棟方向にほぼ直行するものであり、やや南北両端で揺らぐものの直線的な走行を見せる。18号溝を堀と認識するならば、１～３号掘立柱建物は屋敷に伴う建物である可能性が考慮され、この場合18号溝以西側が屋敷の郭域となる。しかし調査範囲が限定的なこともあるが、これを屋敷遺構と認識した場合、母屋は南西の調査区外にあると想定され、１～３号掘立柱建物以外の建物も確認されていないため、これらの遺構群を屋敷遺構と断定するには至っていない。

一方１～３号掘立柱建物の構造は１×２間と簡易な構造を有する小規模なものである。したがってこれらの掘立柱建物は母屋等にはなり得ないものであり、屋敷であれば付属屋に分類されるものである。なお、１号掘立柱建物は中に１号竪穴状遺構が掘削される特異な構造を呈することから、倉庫機能を有していたものと思慮されるが、近接した位置に建てられた２・３号掘立柱建物も同様の機能を有していた可能性が考えられる。

ところで、掘立柱建物の建てられた３区南西部を除く調査区の広い範囲、すなわち推定される屋敷の外側で、貯蔵穴としての使用が考慮されている短冊形や長方形プランの箱形の掘削形態を有する土坑の分布が見られた。これらの土坑は厳密に言えば中世、近世のいずれに属するかをつまびらかにし得ないものであるが、このような短冊形や長方形プラン土坑が比較的集中して掘削される例では屋敷や畠地である場合が多いが、本遺跡では18号溝以西に屋敷の可能性が考慮され、分布域に屋敷を示す遺構が確認されないことから推して、本遺跡における短冊形、長方形プランの土坑は畠地に掘削されたものであろうと思慮される。

３．３区の段差遺構

第３章第３節冒頭に記したように、３区中南部には幅10m以下を測る、上下２段の段差が確認された。上段は周囲から１m、下段は上段から更に0.4mほど下がって掘削される。この段差の左右両側（北東－南西）の傾斜は鋭角であり、上段端部（南東）の傾斜は鈍角である。なお、この段差は自然地形とは思われず、人為的に造成されたものと判断されるものである。その時期は特定できていないが、この段差面に掘削される土坑、溝は古代から中世の早い段階の所産と想定されることから、古代に掘削された可能性を考慮することができる。

その掘削意図は明らかではないが、19号溝のように谷地形を意識したものではなく、階段状の土地区画造成を意図して掘削されたものと判断される。しかし、その掘削範囲は幅10mほどと限定的で、棚田のような構造物の築造とは考えられず、また山林の造成に伴う平坦面の築造とも考えにくい。一方、その掘削方位は、想定される条里方限とは1/8周ほど回転した方向にあるため、条里制に依拠したものではなく、むしろ周囲の土地傾斜の方向に段差の進行方向は一致している。このような所見から、現時点では掘削意図を想定することはできないのである。

表17　遺物観察表(古墳時代以降)

1区南2号竪穴建物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第10図 PL.24	1	須恵器 皿	2号竪穴建物 完形	口 8.0 底 4.5	高	1.7		黒色鉱物/酸化炎焼成/ムラあり/褐 7.5YR5/4	体部から口縁部は直線的に開く。底部左回転糸切り無調整。整形時もロクロ左回転。	11世紀。

1区南7号土坑

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第14図 PL.24	1	灰釉陶器 椀	7号土坑 底部1/2	口 — 底 7.4	高		—	白色鉱物微量/良好/灰白10YR7/1	体部内面から高台外面に灰釉。高台内回転篦削り。	大原2号窯式,10世紀前半。

1区南16号溝

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第27図 PL.24	1	瀬戸・美濃 磁器 碗	16号溝 口縁部片	口 — 底 —	高		—	白//	口縁部内面から外面に型紙による染付。	近現代。

1区南耕作遺構群

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第28図 PL.24	1	瀬戸・美濃 陶器 すり鉢	6号溝 体部上位片	口 — 底 —	高		—	灰白//	内外面鉄釉。	江戸時代。
第28図 PL.24	2	瀬戸・美濃 陶器 碗	15号溝 口縁部片	口 — 底 —	高		—	灰白//	内外面灰釉。	江戸時代。

2区60号土坑

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第31図 PL.24	1	瀬戸・美濃 陶器 碗	60号土坑 体部片	口 — 底 —	高		—	灰白//	内面から体部外面下位に長石釉。高台脇回転横撫でにより窪む。釉厚は薄い。	17世紀か。

2区19号溝

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第34図 PL.24	1	土師器 甕	19号溝 口縁部片	口 — 底 —	高		—	黒色鉱物/良好/明赤褐5YR5/6	「コ」の字状口縁の上部片。	9世紀。

2区遺構外

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第36図 PL.24	1	埴輪 円筒か	2区カクラン 体部片	口 — 底 —	高		—	礫/良好/にぶい黄橙10YR6/4	外面は縦位ハケ目。内面は縦位ナデで,一部ハケ目が残る。	

3区1号竪穴状遺構

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第39図 PL.24	1	在地系土器 内耳鍋	1号竪穴状遺構 体部片	口 — 底 —	高		—	灰//	還元炎焼成。	中世。

3区耕作痕

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第49図 PL.24	1	肥前陶器 陶胎染付碗	3区方形状耕作痕 口縁部片	口 — 底 —	高		—	灰白//	外面染付。貫入入る。	江戸時代。
第49図 PL.24	2	瀬戸・美濃 陶器 瓶	3区方形状耕作痕 体部上位片	口 — 底 —	高		—	灰白//	肩部外面に横線内外面に黄瀬戸釉、肩部外面に銅緑釉流す。下部に焼成前の円孔1カ所あり。	江戸時代。
第49図 PL.24	3	瓶入系土器 土管	3区方形状耕作痕 筒部片	口 — 底 —	高		—	明赤褐//	無釉の土焼き土管。	近現代。
第49図 PL.24	4	製作地不詳 磁器 碗	3区西側耕作痕 体部片	口 — 底 —	高		—	白//	内面無文。外面は黒色、茶色、オリーブ灰色の釉下彩。	近現代。
第49図 PL.24	5	肥前陶器 陶胎染付碗	3区西側耕作痕 口縁部片	口 — 底 —	高		—	灰白//	外面染付。貫入入る。	江戸時代。

3区遺構外

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第50図 PL.24	1	須恵器 椀か杯	3区表土 口縁部片	口 — 底 —	高		—	礫微量/還元炎焼成/灰黄2.5YR7/2	口縁端部小さく外反。焼き締まりは弱い。	平安時代。

表18　遺物観察表(縄文時代)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第51図 PL.24	1	縄文上器 深鉢	2区19溝 胴部破片	残径	3.6 4.1	厚	0.9	A//	沈線文を斜位・異方向に施文して羽状意匠を構成。内外面共に風化。	加曽利B２式
第51図 PL.24	2	縄文上器 深鉢	2区19溝 胴部破片	残径	3.8 5.0	厚	1.0	D//	爪縄文を縦位施文し、括れ部に複数状の横位沈線文や上下に刺突を加えた８字状貼付文を施す。	堀之内１式
第51図 PL.24	3	縄文上器 深鉢	3区西側耕作痕 胴部破片	残径	3.6 6.6	厚	0.8	C//	爪縄文を横位に施文。内外面共にやや風化。	早期後半
第51図 PL.24	4	縄文上器 深鉢	3区東側表土 胴部破片	残径	3.6 2.3	厚	0.7	E//	やや繊細な爪縄文を横位に施文。内外面共にやや被熱風化。	諸磯ａ式
第51図 PL.24	5	縄文上器 深鉢	3区FP泥流、2整穴付近 胴部破片	残径	5.3 5.4	厚	1.0	B//	細い棒状具により斜位の沈線区画文を施す。内外面共にやや被熱風化・微かな煤状炭化物付着。	堀之内１式
第51図 PL.24	6	微細剥離痕 ある剥片	黒色土中 完形	長幅	6.2 5.0	厚重	1.0 28.9	黒色頁岩//	打面は自然面であり円礫を利用する。左右両側辺の背腹両面に微細剥離痕が認められる。	

宮貝戸遺跡　縄文土器の胎土分類

分類	特徴
A	少量の円磨度の進んだ珪質乳白色岩片礫・粗砂や赤色岩片・長石・輝石の粗・細砂を含む緻密な胎土。
B	少量の円磨度の進んだ軽石の礫・粗砂や中量の輝石と少量の長石・角閃石・石英・赤色岩片の粗・細砂を含む緻密な胎土。
C	少量の円磨度の進んだ軽石・チャートの礫・粗砂や珪質乳白色岩片・輝石・長石・角閃石・石英の粗・細砂を含む緻密な胎土。
D	多量の円磨度の進んだ灰白色・珪質乳白色岩片の礫・粗砂や輝石粗・細砂と少量の長石・石英・赤色岩片・雲母の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。
E	中量の円磨度の進んだ長石・輝石・灰白色岩片や少量の石英・珪質乳白色・角閃石の粗・細砂を含む緻密な胎土。

※各分類はルーペ等を使用した肉眼観察による相対的なものである。
※夾雑物の粒径分類については「新版 標準土色帳」の「土壌調査用チャート」に準拠した。

表19　土師器甕非掲載遺物集計表

区	遺構番号	遺構名	点数	重量(g)	備考
1	2	竪穴建物	4	28	
	15	土坑	1	82	
	37	土坑	1	9	
	1	谷	1	1	
2	19	溝	7	32	
	19	溝(黒色土層内)	4	9	
		表土	2	6	
		撹乱	1	6	
3		黒色土層内	3	33	
		表土	2	17	
		計	26	223	

表20　縄文土器非掲載遺物集計表

区	遺構番号	遺構名	点数	重量(g)	備考
2	19	溝(黒色土層内)	1	9.9	堀之内１式
		表土	1	24.5	焼町土器
			3	30.6	不明
3		表土	1	12.1	諸磯ａ式
			1	11.3	唐草文系土器(加曽利Ｅ式併行)
			2	72.0	堀之内１式
			2	9.2	不明
		計	11	169.6	

写 真 図 版

1　1区航空写真(東より、下蛇行部が鳴沢川)

2　1区航空写真(上南東)

1　1区南2号竪穴建物全景(北西より)

2　1区南2号竪穴建物遺物出土状況(東より)

3　1区南2号竪穴建物全景(北西より)

4　1区南2号竪穴建物竈1・2(北西より)

5　1区南2号竪穴建物竈1・2(西より)

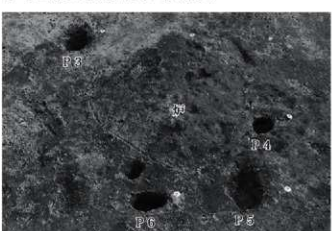
1　1区南2号竪穴建物竈1掘り方(南西より)

2　1区南2号竪穴建物竈2掘り方(北より)

3　1区南2号竪穴建物ピット1(北東より)

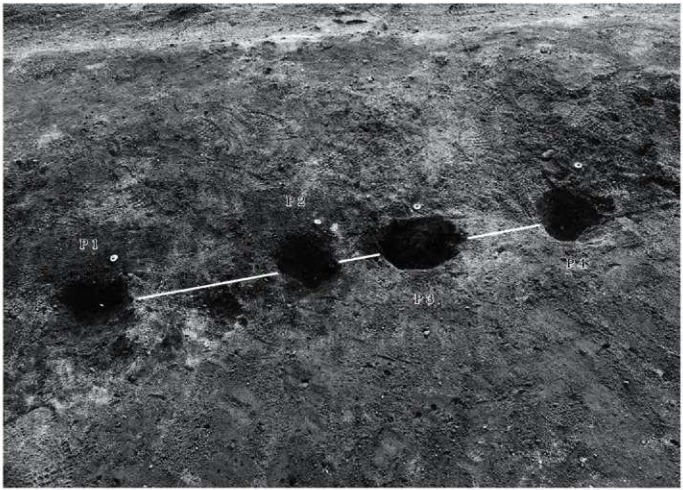
4　1区南2号竪穴建物ピット2(南より)

5　1区南2号竪穴建物ピット3(北東より)



6　1区南2号竪穴建物ピット3～6、炉(北西より)

7　1区南2号竪穴建物掘り方全景(北西より)



1　1区南1号柵全景(北より)

2　1区南1号柵ピット1(東より)

3　1区南1号柵ピット2(東より)

4　1区南1号柵ピット3(東より)

5　1区南1号柵ピット4(東より)

1　1区北1号土坑全景(南より)

2　1区南2号土坑全景(北より)

3　1区南3号土坑全景(南より)

4　1区北4号土坑、2号谷全景(北より)

5　1区南5号土坑全景(北東より)

6　1区南5・6号土坑、3号谷全景(北東より)

7　1区南7号土坑全景(北西より)

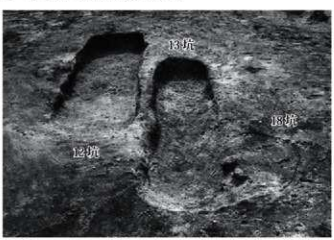
8　1区南7号土坑遺物出土状況(東より)

1　1区南8号土坑全景(北より)

2　1区南9号土坑全景(北東より)

3　1区南10号土坑全景(北東より)

4　1区南11号土坑全景(西より)



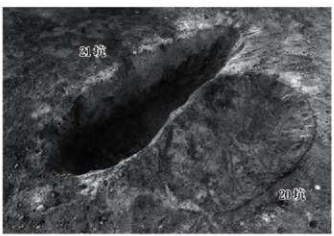
5　1区南12・13・18号土坑全景(北より)

6　1区南18号土坑全景(東より)

7　1区南14号土坑全景(北より)

8　1区南15号土坑全景(北より)

1　1区南16号土坑土層断面(南より)



2　1区南20・21号土坑全景(北西より)

3　1区南8・17・19号土坑全景(北より)

4　1区南22号土坑全景(北より)

5　1区南23号土坑全景(南より)

6　1区南24号土坑全景(北東より)

7　1区南25号土坑全景(南西より)

1　1区南26号土坑全景(南西より)

2　1区南27号土坑全景(西より)

3　1区南28号土坑全景(北より)

4　1区南29号土坑土層断面(南東より)

5　1区南30号土坑全景(東より)

6　1区南31号土坑全景(南東より)

7　1区南32号土坑全景(北より)

8　1区南33号土坑全景(東より)

1　1区南34号土坑全景(北東より)

2　1区南35号土坑全景(南東より)

3　1区北37号土坑全景(北東より)

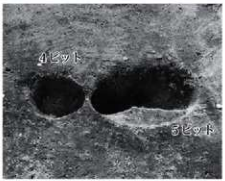
4　1区北37号土坑全景、1号谷土層断面(南東より)

5　1区北37号土坑、1号谷全景(北西より)

1　1区北1号ピット全景(北より)

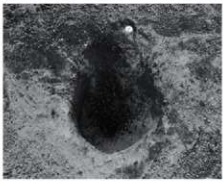
2　1区北2号ピット全景(北より)

3　1区南3号ピット全景(北東より)



4　1区南4・5号ピット全景(北より)

5　1区南6号ピット全景(北より)



6　1区南7号ピット全景(北東より)

7　1区南8号ピット全景(東より)

8　1区南9号ピット全景(北東より)

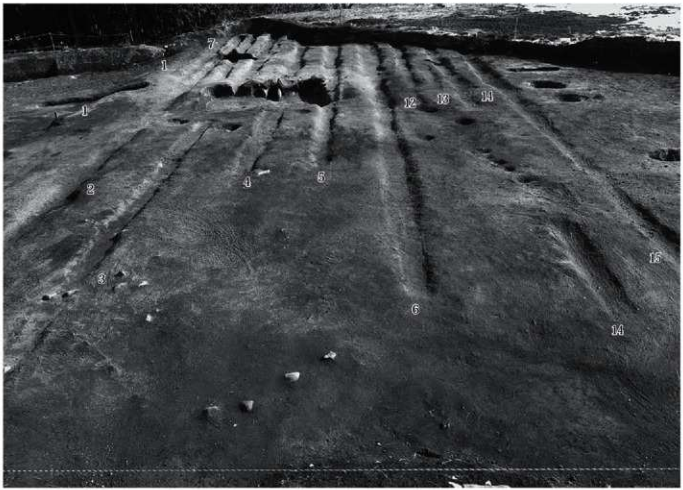
9　1区南10号ピット全景(南東より)

10　1区南11号ピット全景(北より)

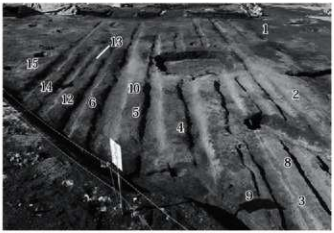
11　1区南12号ピット全景(南西より)

12　1区南13号ピット全景(東より)

13　1区南14号ピット全景(北西より)

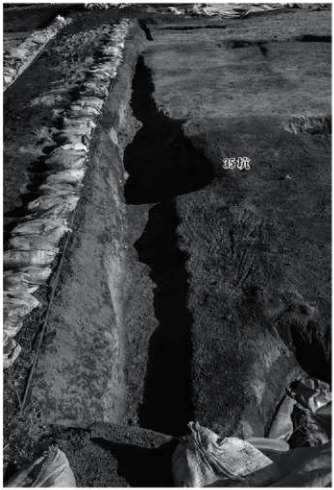


1　1区南耕作遺構群(1～10・12～15号溝)全景(北西より)

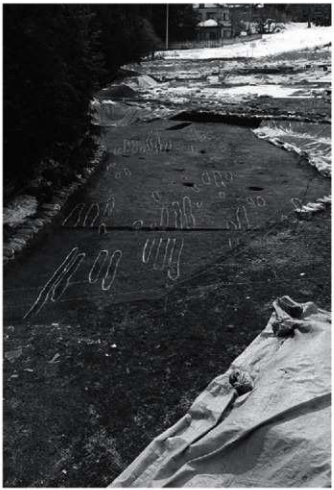


2　1区南耕作遺構群(1～10・12～15号溝)全景(南東より)

3　1区南11号溝全景(北より)

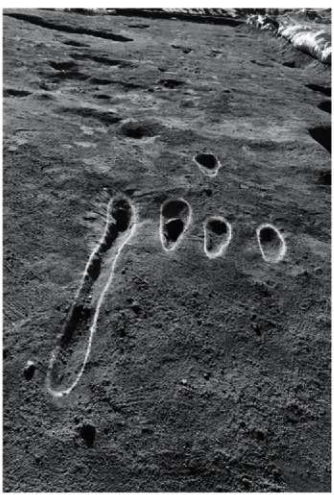


4　1区南16号溝(西より)



1　1区北1号畠北部全景(北より)

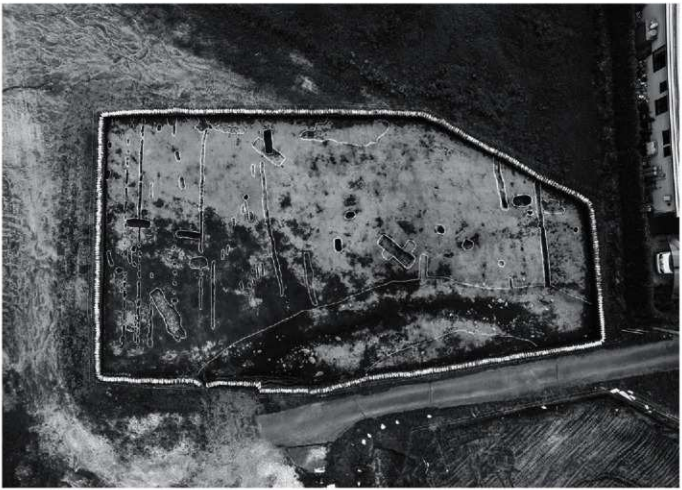
2　1区北1号畠南部全景(南より)



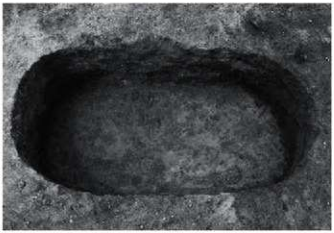
3　1区南2号畠東部全景(北西より)

4　1区南2号畠西部全景(南西より)

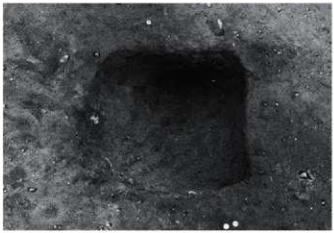
5　1区作業風景(南西より)



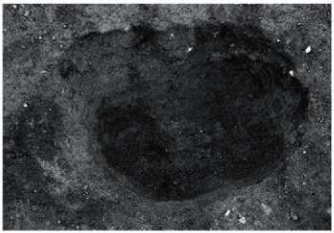
1　2区航空写真(左北)



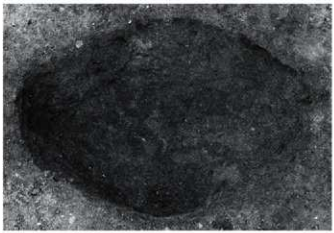
2　2区52号土坑全景(東より)



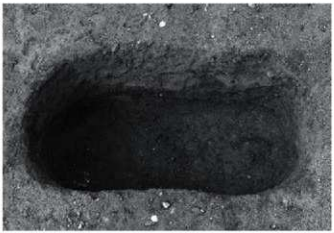
3　2区53号土坑全景(南東より)



4　2区54号土坑全景(北より)

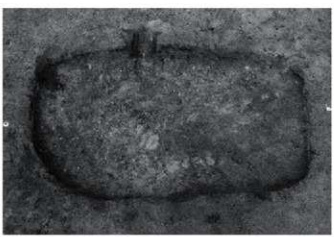


5　2区55号土坑全景(東より)



1　2区56号土坑全景(南より)

2　2区57号土坑全景(西より)

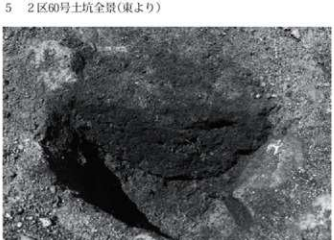


3　2区58号土坑全景(東より)

4　2区59号土坑全景(東より)

5　2区60号土坑全景(東より)

6　2区38号ピット土層断面(南より)



7　2区39号ピット土層断面(南より)

8　2区40号ピット土層断面(西より)

1　2区19号溝全景(北より)

2　2区19号溝北部全景(西側上空より)

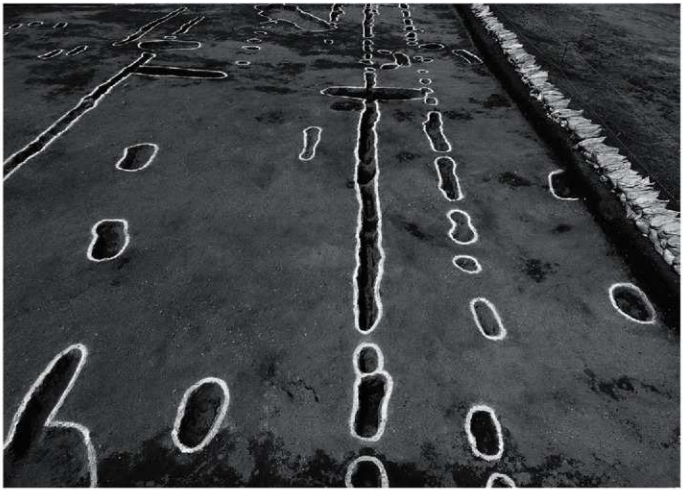
3　2区19号溝中央部全景(西側上空より)

4　2区19号溝南部全景(西側上空より)

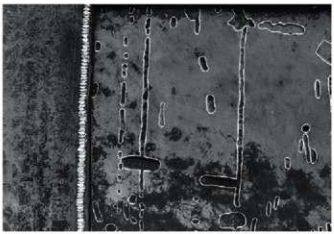
5　2区19号溝南西隅部全景(南東より)

6　2区19号溝粕川堆積分布状況(南より)

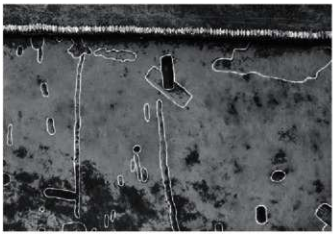
7　2区作業風景(東より)



1　2区耕作痕全景(東より)



2　2区耕作痕北東隅部全景(西側上空より)



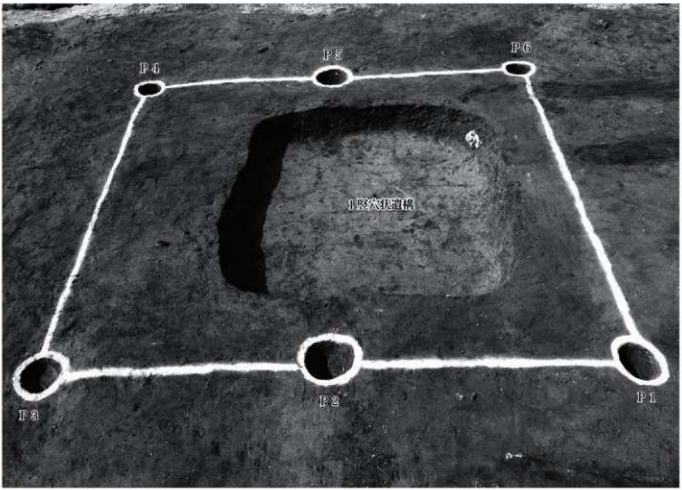
3　2区耕作痕東部全景(西側上空より)

4　2区耕作痕北西隅部全景(西側上空より)

5　2区耕作痕西部全景(西側上空より)

1　3区全景(西より)

2　3区粕川堆積下窪地全景(西より)



1　3区１号掘立柱建物全景(南より)

2　3区１号掘立柱建物ピット１土層断面(南より)

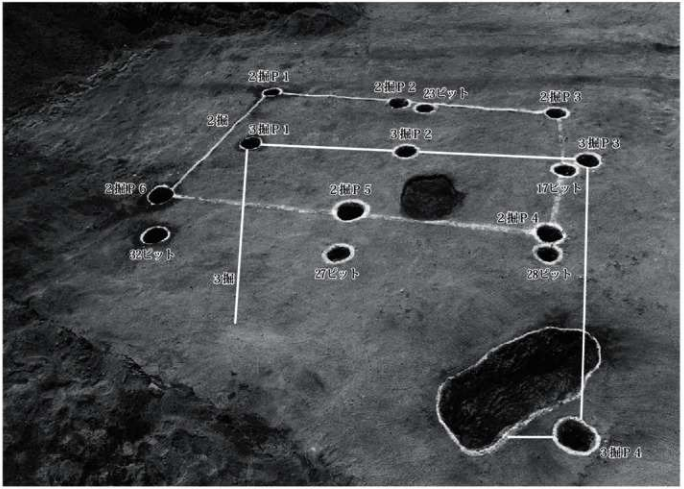
3　3区１号掘立柱建物ピット２土層断面(南より)

4　3区１号掘立柱建物ピット３土層断面(南より)

5　3区１号掘立柱建物ピット４土層断面(北より)

1　3区１号掘立柱建物ピット５土層断面(北より)

2　3区１号掘立柱建物ピット６土層断面(北より)

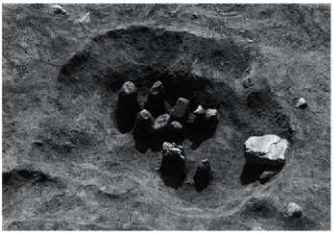


3　3区２・３号掘立柱建物、17・23・27・28・32号ピット全景(北より)

4　3区２号掘立柱建物ピット１土層断面(西より)

5　3区２号掘立柱建物ピット６土層断面(西より)

1　3区１号竪穴状遺構全景(西より)



2　3区２号竪穴状遺構礫出土状況(東より)

3　3区２号竪穴状遺構全景(西より)

4　3区36号土坑全景(北より)

5　3区37号土坑全景(北東より)

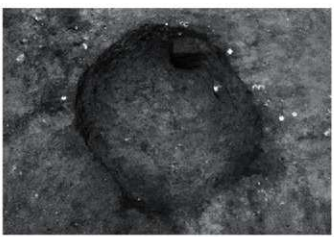
6　3区38号土坑全景(東より)

7　3区39号土坑全景(南東より)

8　3区40号土坑全景(北より)

1　3区41号土坑全景(北より)

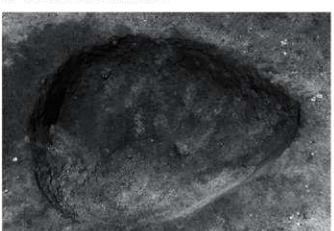
2　3区42号土坑全景(北より)



3　3区43号土坑全景(南より)

4　3区44号土坑全景(南東より)

5　3区45号土坑全景(南西より)

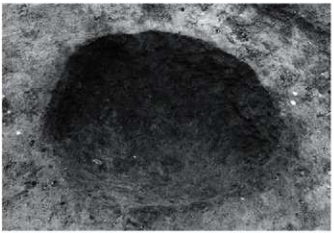


6　3区46号土坑全景(南より)

7　3区47号土坑全景(北西より)

8　3区48号土坑全景(北より)

1　3区49号土坑全景(南東より)



2　3区50号土坑全景(東より)

3　3区51号土坑全景(北西より)

4　3区19・20号ピット全景(南東より)

5　3区25号ピット全景(北より)

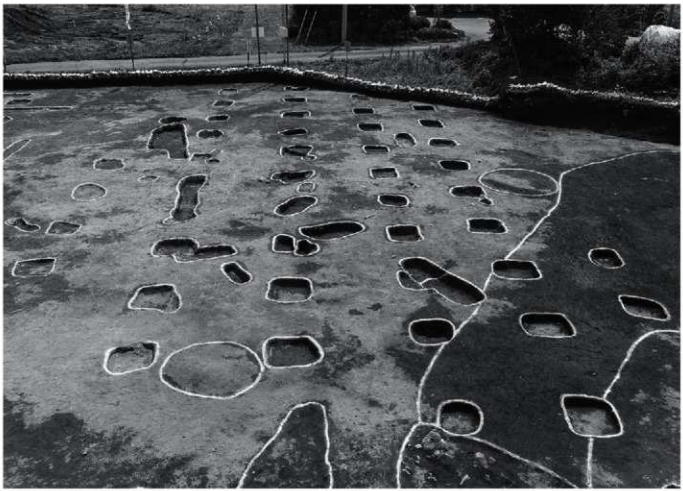
6　3区17号溝礫出土状況(北より)

7　3区17号溝全景(北より)

1　3区18号溝全景(北より)

2　3区18号溝南端部全景、土層断面(北より)

3　3区作業風景(南より)



4　3区耕作痕B群全景(西より)

PL.24

1区南2号竪穴建物

1区南7号土坑

1区南耕作遺構群

1区南16号溝

2区60号土坑

2区19号溝

2区遺構外

3区1号竪穴状遺構

3区耕作痕

1～3　B群耕作痕
4・5　F群耕作痕

3区遺構外

縄文時代

報告書抄録

書名ふりがな	みやがいといせき
書名	宮貝戸遺跡
副書名	上信自動車道祖母島箱島バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	—
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	646
編著者名	齊田智彦・石守晃・山本光明
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20181121
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784-2
遺跡名ふりがな	みやがいといせき
遺跡名	宮貝戸遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんあがつまぐんひがしあがつままちおおあざはこじまあざみやがいと
遺跡所在地	群馬県吾妻郡東吾妻町大字箱島字宮貝戸
市町村コード	10429
遺跡番号	0127
北緯(世界測地系)	3633250.8
東経(世界測地系)	1385535.5
調査期間	20170101-20170131 ／ 20170701-20170831
調査面積	5,470.37
調査原因	道路建設
種別	集落、畑
主な時代	縄文／古代／中世／近世
遺跡概要	縄文：縄文土器／古代：竪穴建物1＋竪穴状遺構1＋土坑3＋谷3－土器／古代～中世：土坑6＋ピット12＋溝1／中世：竪穴状遺構1＋掘立柱建物3＋柵1＋土坑17＋ピット17＋溝1／中世～近世：土坑33＋溝1＋耕作痕1－陶磁器／近世：耕作痕2／近世～近代：溝1＋耕作痕9
特記事項	竈を建物の一辺に2基併設する11世紀の竪穴建物と、掘立柱建物と竪穴状遺構の組み合わせによる建物遺構1か所を調査した。
要約	本遺跡は東を鳴沢川に画され、西を下位段丘に挟まれた、吾妻川右岸上位段丘面上に立地する。遺跡地周辺は、古墳時代後期初頭（6世紀初頭）の榛名山を起源とする火砕流に埋没しており、火砕流層上に古代以降の遺構群が残る。平安時代の竪穴建物と中世の建物群や土坑群、近世以降の耕作遺構等が確認された。

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第646集

宮貝戸遺跡

上信自動車道祖母島箱島バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成30(2018)年11月11日　印刷
平成30(2018)年11月21日　発行

編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555　群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
電話(0279)52-2511(代表)
ホームページアドレス　http://www.gunmaibun.org/

印刷／株式会社開文社印刷所